

---

**きっと僕らは光と闇を抱えて、**

日向ひすい

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

きつと僕らは光と闇を抱えて、

### 【Nコード】

N3163C

### 【作者名】

日向ひすい

### 【あらすじ】

蘭に正体がバレてしまった新一。そのことに戸惑う蘭。今までなんとなく保っていた均衡が瞬間に崩れていく。更にその裏では哀の怪しげな行動が。二人が再度心を許し合える日はくるのか…？

## 序章（前書き）

この小説の新一はコナンから戻れていない設定です。混乱を招いてしまったらすみません。

駄文かつ、少々長くなるかも知れませんが、どうかお付き合い下さい。

8月3日に第七部までを修正しました。

主人公の呼び名、台詞ややりとりを多少変えましたが、物語の進行には差ほど差し障りはないと思います。

面倒を起こしてしまい、申し訳ありませんでした。

## 序章

一発の雷鳴と共に雨が降り出した。

停電によって暗闇だった室内に稲光が差す。と、苦しんでいる一人の少年の様子が浮かび上がった。

骨が焼け、心臓が大きく波打つ。尋常で無い痛みで思考が停止し、意識が遠のくのが自分でも生々しく感じられた。

コナンはこの痛みを以前にも何度か体験している。

戻るんだ……

朦朧とする意識の中でコナンは静かにそう確信した。

冗談じゃねえ。

震える自分の手を隣で握ってくれている小さな温もり。心配そうに覗き込む、幼馴染み。

確かに”工藤新一”に戻るのには願ってもないことだ。この日とどれほど待ち焦がれていたことか。だが、完全に戻る保証は無い。いつまた”コナン”になるか分からないのだ。

「……………ん……………」

だから絶対に…絶対に、バレる訳にはいかねえんだよ。

そんな思いを嘲笑うかのように、未発達だった体は急激に成長していく。痛みも最高潮に達した。そして。

どくんっ……、と大きく体が揺れて、コナンは落ち着きを取り戻していった。

「コナン君……？」

真っ暗な中、荒い息づかいが響き渡る。

「コナン君、大丈夫？ やっぱり病院に行った方が」

横たわる体を手探りで触った蘭は、ハッと手を引つ込めた。そこには、さっきまでの小さな少年の姿は無い。代わりにあったのは立派な男の体だった。

こんな事ってあり得るのだろうか。それよりも、コナンはどこへ行ってしまったのか。

訳が分からず、困惑する。

再度、雷鳴が響く。部屋の中が一瞬明るくなった。けれど、それによって浮かび上がったのは、風邪気味の小学生では無かった。

コナンが居た筈の場所に横たわった人物。乱れてはいるが、その顔を見間違っわけがない。小さい頃からずっと一緒だった。けれど、最近は見たくても見られなかったその顔が、今、目の前にある。

まさか…そんな……

「新……………」

何か冷たいものが蘭の頬を伝った。

話の始まりは、この日の蒸し返るような暑い午後へと遡る。

## 一章 嵐の前触れ

天気予報ほどいい加減なものはない。

「今年の夏は猛暑になりますよ」と、美人のお天気キャスターがにこり発表しておきながら、冷夏になる事なんてよくある話だし、せつかくの傘がただの邪魔くさい棒へと変化するのは日常茶飯事。まあ、遠く離れた雲の動きを読むわけだから、それも致し方ないことなのだろうが。

ただ、ここで江戸川コナンが思うのは、別に美人お天気キャスターへの非難でも、傘の存在意義への追及でも、ましてや環境庁へのささやかな弁解でもない。

問題はこの雨である。

先週『梅雨明け宣言』が出され、やっと鬱陶しい夏の風物詩から解放されたと思ったら、今度は台風の到来だ。今夜あたりにも低気圧は東京を直撃するだろう。現に、この瞬間も雨はうざったく降っていて、雷は自らを轟かせる機会を今か今かと伺っている。

おまけにコナンはその雨をもろに受けながら走らなければならなかった。

顔や体中に雨粒の小さな衝撃を感じつつ、猛ダッシュで学校を出て、街を走って、走って、走って……。

やっとの事で住まいとする毛利探偵事務所へとたどり着いた。

コナンはやれやれとため息をつき、滴り落ちる汗を丁寧に拭いた。

探偵事務所の階段を這うようにゆっくり上がり、つま足と背筋を精一杯伸ばす。それでもしないとドアノブに手が届かないのである。……全く情けない。背が低いというのは、不便かつ、情けないの極みだ。

コナンはそんな事を考えながら、扉を開け部屋の中へと入っていた。

「ただいまー……」

「おかえりっ」と中から元気良く応えた蘭はずぶ濡れのコナンの姿を見て目を見開いた。

「どうしたの、コナン君。びしょびしょじゃない!」

「あ、いや……傘忘れちゃったんだ」

どうも返事が弁解がましい。

「朝、持ってた気がするんだけど……」

「気のせいだよ。蘭姉ちゃん」

そう言ったコナンに蘭は首を傾げ、それから慌ただしくタオルを探しに部屋を出ていく。

本当は蘭の気のせいなんかでは無い。今朝、コナンは確かに傘を持って学校へ行った。だが、友人である灰原哀に貸し与えたために、このようなサマになってしまったのであった。

「水もしたたるって言うもんな」などと、よく分からない言い訳を自分自身にしたりしているうちに蘭が帰ってきた。

コナンの前に真っ白なタオルが差し出される。

「はいつ、これでよく体拭いてね。お風呂も用意してきたからね」

蘭の優しさが身に染みた。テキパキと介抱する様子など、さすが我が幼馴染みと胸を張りたくなる。

実際は小学生の自分がそんなことをしたところで、何の”お返し”も期待出来ないのだけれど。いや、そんなもの期待する事自体が不純なんであつて。

とかなんとか話が八方に飛び散る。

無駄に混乱する思考を元に戻すためにコナンは頭を勢良く振った。強く振り回しすぎて軽くめまいを覚えたほどだ。

そして、不思議な事にめまいだけで無く、寒気もしてきた。それから頭痛も。

頭を振るといふのは、そんなに危険な行為だったのか？

「…コナン君？」

なに、と答えたいのに上手く舌が回らない。

蘭は心配そうな表情をして、手をコナンの額に当てた。その手はひんやりとしていて気持ちよかった。

「やっぱり」

「え」

「すごい熱だよ」

熱？

と聞き返す前にコナンの体は大きく揺らぎ、机に手をついた。

「大丈夫！？ 待ってて、今お薬持ってくるから」

そう言うが否や、蘭は再度部屋の中をかき回してコナンにカプセルを持ってきた。

蘭はせわしなく動いて新一の濡れた髪を乾かし、ベッドに寝かせ、（さすがに着替えは自分でやった）体温計を口に押し込んだ。

38度2分。

通りで寒気がするわけだ。

「どう？ 楽になった？」

横になって、少し落ち着いたコナンに蘭は優しく聞いた。

蘭に看病してもらえるならば風邪を引くのも悪くない……なんてことを考えていたらまた熱があがってしまうだろうか。

「うん。大丈夫」

「良かった。さっきの風邪薬は博士に貰ったやつだから良く効くよ、きつと」

蘭はコナンに笑いかけると、買い物に行くと言って出ていった。

博士に貰った。ということは作っただのは灰原哀ということになる。

「なんか怖えーな」

一人そう呟き、軽く目を瞑る。そうすると寒気も頭痛も和らいだ。コナンはベッドの心地良さを感じながら、ゆったりと眠りに落ちていった。

.

## 二章 垣間見たもの

どのくらい眠ったのだろうか。

「きゃあっ」という叫び声でコナンは目を覚ました。

気が付けば辺りは真っ暗。外が暗いというよりも部屋自体が光を失った感じだ。隣にはうずくまっている人の気配を感じる。

「蘭姉ちゃん？いるの？」

そうつと聞いてみる。と、人影が動いた。

「あ……ご、ごめんね。起こしちゃったよね。あの、急に電気が消えたからびっくりしちゃって」

案の定そこにいた蘭が済まなそうに謝る。

「もっとも周りが見えないため、”済まなそうに”というのは声色でしか分からないが。」

話を聞くと、どうやら停電らしい。コナンの様子を見にこの部屋に入ったところで暗闇に包まれたと言う。

「だったら早くブレーカーを見に行けば良いのだが、蘭は腰が抜けて一步も動けず、コナンも高熱の為立つのはなかなか難しい。」

「おじさんは？」

「お父さんは麻雀に行っくってさっき出て行っちゃったの」

それなら暫くは帰って来ないだろう。最悪、帰宅は明日になるかもしれない。

結局は二人して大人しく電気の復興を待つしかなかった。それにしても、とコナンは心の中で小さくため息をつく。

若い男女が二人きりで暗闇の中に居る。普通ならば願ってもないこの状況だが、自分は今”コナン”だ。小学生なのだ。

当然二人の間に何かあるわけもなく、ただ、時間だけが刻々と過ぎていった。

「なかなか付かないね」と蘭がもらった通り、明かりが灯る気配は一向にない。

まさか小五郎が帰って来るまでこの状態を維持する訳にもいかない。が、体中が熱くてダルい。

どうすればいいのか色々と考えを巡らせていたその時だった。

ピカッと雲に稲妻が伝い、その後を追うかのごとく低い唸る様な轟が響く。蘭の苦手とするものの一つ、雷だ。

「ひゃあっ!」

小さな叫び声と共に蘭がコナンの手をギュッと握った。

それに合わせてコナンの顔が赤くなっただことは、幸か不幸か蘭には気付かれなかったらしい。

「大丈夫?」

「うっ うん……ちょっと驚いただけだから……」

か細く震える声でそんなことを言われても説得力に欠ける。

大体、物心つく前からの付き合いなのだ。蘭が怖がりなことくら

い火を見るより明らかで。

コナンは軽く苦笑いをもらし、自分にしがみついてくるその手をそっと握り返した。

「あれ？」

蘭が首を傾げる。

「コナン君、熱上がってない？ 手が熱いよ」

言われてみれば確かにさっきよりも全身に熱を感じる。それだけでは無く、コナンは自分の体に微かな違和感を覚えていた。

何か骨が軋むような妙な違和感。心臓がばくばくと大きく脈打ち、何もしていないのに息があがる。それは蘭と手が繋がっているからではない。

な、なんなんだ？

思わず狼狽える。と、突然の激痛がコナンを襲った。とっさに己の左胸を掴む。

「くっ……」

頭が、心臓が、体中が燃えるように熱い。コナンの背中からは大量の汗が吹き出た。視界は二重に歪んで、どくんつと体が震える。

まるで骨が肉を突き破るみたいなこの感じには身に覚えがある。

まさかという疑いはやがて確信に変わり、コナンは不安に駆られた。一刻も早くこの場を離れなくては。

「コ、コナン君!？」

異変に気が付いた蘭が切羽詰まった様子でコナンの体を揺すった。

「だ、だい……じよぶ……だから……」

蘭を心配させないようにそう言ったけれど、荒い息遣いを誤魔化するのとは不可能で、それは苦しみの喘ぎにしかならなかった。

「大丈夫なわけじゃない！ どうしたの!？」

「か、風邪が…悪化…し、したのかな……」

軽くあしらおうとする声にも力は籠もらない。これが単なる風邪な訳では無いことなど明かだ。どれほど危険なことなのか、そしてこの行方さえもが先見える。

その先見が的中してしまった場合に愛しい人が受ける傷の深さもコナンは悟っていた。

だから早く。一刻も早く蘭から離れなければならないのだ。

けれど、何も出来ない。ただ痛みを身を委ね、苦しみに喘ぐことしか出来ない無力な自分に唇を噛み締める。

そして。

雷鳴がした。遠く雨の音も聞こえた。

凄まじい叫びを上げるそれらの音はまるで邪悪な怪物のようで、コナンは奇妙な異次元に連れ込まれた様な感覚に陥る。だが、怪物など居るわけもなく、異次元など存在しない。

これは紛れもなく 現実だ。

稲光が容赦なく部屋に差し込み一瞬にして”江戸川コナン”の正体を暴き出す。

それは流麗に、悲哀に、残酷に。

蘭の目が大きく見開かれ、様々な感情がその目に宿る。けれど息継ぎの音は異様に穏やかで。そして、一言。

「新一……」

ゆつたりとした時間の流れがその場にそぐわない雰囲気醸し出していた。

### 三章 気づいてないのか？

先ほどまでとは打って変わって穏やかな息遣いが部屋を満たす。それでもお互いに張り詰めた空気だけは拭い取れはしない。重い沈黙が二人を取り巻き、身動きする隙を与えてくれないのだ。その沈黙を振り払うように新一は伏せていた顔を上げ、蘭に向き合う。

「あ、あのさ……」

新一の声にびくつと反応した蘭だが、細い肩を震わしたただけで顔は伏せたままである。

自分を見つめているであろう真剣な目。見えずとも感じるその逞しいほどの存在感は小学生では有り得ない。目の前の人物はコナンとは違うんだということを生々しく感じさせた。

何とも言えない表情の新一に蘭の動きも鈍った。

聞きたいことは沢山ある。確かめなければならぬことも。なのに、そのどれもが喉元でせき止められ口まで上がってこない。

苦しい……

自分を取り巻く現実を受け止めるのを拒否するかのごとく、蘭の思考はぼうつとしていた。

「……蘭」

自分と呼ぶその声は記憶に残るものと一寸の狂いも無く一致して

いて。

それに耐えきれなくなった蘭は新一に背を向け走り出し、自分の部屋へと駆け込んだ。新一もそれを止めることは出来なかった。

蘭の居なくなった部屋は妙に、しん、としていて全て暗闇に飲み込まれているようだ。

バレた。

その三文字は新一の頭何度もこだまし、胸を抉る。こんな日が来てしまった時の対処を全く考えていなかった自分の傲慢さと、愚かさ<sup>さ</sup>に酷く嫌気が差す。

途方に暮れるということを痛感した。どうすればいいのかわからず、何よりも蘭を更に傷付けてしまったことに罪悪感が疼く。

そして、困ったことに疼いたのは罪悪感だけではないようだ。

「…、…っ…!!」

小さな呻きと共に再度激痛の波が押し寄せる。”工藤新一”でいられる制限時間タイムリミットが近付いてきている証拠だ。

一日に二回もこの痛みを味わうことになるとは。しかも新一はまだ蘭に何も伝えていない。経緯も、言い訳も、自分の思いさえも

……

「…ち…くしょう…っ」

次の瞬間。

静けさの中に小さな少年が一人、横たわっていた。まるでさつき

までの出来事は全て虚無であったかのよう。

けれど、汗ばんだ肌と体の疲労感が真実を物語っていて。

同時にそれは

「後、ほんの少しだけでも」という新一の儂い願いが無惨にも破棄されたことを意味した。

戻っちまったか……

己の手をじつと見て、その大きさが一回り小さくなったことに思わずため息が零れる。

本なら直ぐにでも蘭の部屋に行って状況を説明すべきなのだろう。でも何と言えればいいのか。今まで散々誤魔化してきた事実をどうして簡単に説明出来ようか。

全てを打ち明けるその時を想像してみるも、脳裏をよぎるのは蘭の泣き顔だけだった。

心の落胆に合わせ、コナンの臉はだんだん重くなってくる。頭では眠っては駄目だと信号が出ているが生理現象には逆らえない。コナンは不覚にもそのまま眠気の渦に吞まれてしまった。そうして長かった一日は幕を閉じたのであった。

静かな朝だった。

目が覚めてから窓の外に視線を走らせると、雷雨の痕跡など一切残らず、柔らかな陽が照っている。

昨日あんなことがあったと言うのに、すっかり熟睡してしまった自分にコナンは苦笑した。

微かに聞こえる小鳥の声に混じり、台所の方から包丁とまな板のぶつかり合う音が機械的に響いてきた。それは紛れもなく朝食の準備の音だ。

蘭が起きている。それはコナンの気を重くさせ、頭を抱えさせる。だが、何時までもここに居るわけにもいかない。今日こそは眞実を打ち明けなければ。

昨日に引き続き、浮かんでは消え、浮かんでは消えて行く蘭の泣き顔を深呼吸で一つずつ消す。

「きつと大丈夫だ」と自分に言い聞かせ、コナンはゆっくりと幼馴染みの元へと向かった

「あつ、おはようコナン君。風邪は大丈夫？」

………は？

「顔色は昨日より良いよね。熱も下がったのかな？さすが博士の薬ね」

意を決して話し掛けたコナンに返ってきたのは、いつもと変わらない蘭の笑顔。

拍子抜けして呆然と立ち尽くすコナンに蘭は尚も庇護の言葉を掛ける。

「これ、着替えだからね」

「……へ？」

「あ、そうそう。学校には休むって連絡しておいたから、今日はまだ寝てていいよ」

「……え？」

着替え？ 学校？ 一体、何を言ってるんだ。今、聞くべきはそ

んな事ではないだろう。

一瞬新手の嫌がらせかと考えたが、蘭の笑顔は生き生きとしていて全く不快感を滲ませてはいなかった。

当然、コナンの顔には無数の疑問符が浮かぶわけで。

「あ……のさ」

「なーに？」

蘭がぐるりとこちら向いた。冷や汗がコナンの背中を濡らす。

「蘭……」

姉ちゃん、と言葉を付け加えてはみたものの、コナンの内心は戸惑いに満ちていた。

まさか、あの騒動で蘭は何も気付かなかったと言うのか。暗闇ではあったけれど、確かに一瞬だけ自分の顔ははつきりと浮かび上がった筈。

それなのに自分の呼び名は未だに”コナン君”で。

もしかして…バレてないのか？

いや、そんな筈は。と、愚かな考えを一応は却下してみるもそれでは今の現状は説明出来ない。

夢でも見間違えでも無く蘭は笑っている。しつこいようだが、笑っているのだ。

頭をフル回転させて色々と考えを巡らせた末、最終的にこの日コナンが唯一蘭に伝えた事は、

「……………。がっ、学校遅れちゃうよ……」

だけであつた。ドタバタと学校へと向かう蘭を尻目に、コナンは  
何故だか訳も分からぬ敗北感に駆られたのだった。

## 四章 苦悩

「あっ、コナン君。ちゃんと夏休みの宿題やっておくのよ」

出かけ際の蘭にそう念を押された。それには生返事で答えておく。「行つてきまーす」と言う元気な声が探偵事務所に響いて、やがて静かになった。

帝丹小も含め、どの学校も夏休みに入り授業はもう無い筈なのだが、何でも蘭は部活に行くらしい。

誰も居なくなった空っぽの部屋でコナンは盛大にため息をつく。

今日もコナン君……か。

その余韻を残しながら水をごくつと一口頂く。乾いてくつ付いた喉に流れた水は冷たくて心地が良い。その心地良さに浸っていた時、机上の携帯電話がはたと目に止まったのである。

コナンは暫く携帯と睨めっこをした後、その上に指を滑らせた

「ほなバレへんかったんか？お前の正体」

受話器から聞こえる関西弁丸出しの声は真剣味や緊張感など微塵の欠片も無い。

「今日の飯はなんなんや？」とか。「オレは出来れば鯖がええんやけど、どない？」とか。「鯖はやっぱり鯖味噌やんなあ？」とか。そんなどうでも良い（鯖は特に関係ない）事を話すような呑気な

語調。

それは真剣に話しているコナン側としては、青筋を立てるには十分過ぎる理由だった。オレの質問にまじめに答える。と、小さな自尊心が疼く。が、彼に相談を持ち掛けたのは自分な手前、怒鳴るところは出来ない。

苛立つ気持ちのため息に変えて、コナンは冷静に返答する。

「分かんねえんだよ、それが。あの時、蘭は確かにオレの事」新一  
” っと呼んだんだ”

「けど、朝起きてみたら姉ちゃんはケロツとしてたつちゅーわけか」

「ああ……」

ぱりっと言う乾いた音が耳に残る。そのくせそれは重たくて、コナンは小さく息をついた。

気が付けば、あの時　あの雷雨の夜から一週間が過ぎた事となる。

雨の季節は終わりを告げ、灼熱の太陽が支配する季節となった。アスファルトの照り返しに汗を流し、蝉の大合唱に耳を塞ぐ。そんな夏らしい夏の始まりである。

だが、周りが一変したにも関わらず蘭は相変わらず”コナン”として自分に接してきた。蘭の視線、言葉、態度。そのどれもがいつも通りコナンに向けられるものなのだ。まるで、あの夜の事は無かったかのように。

それを、バレていないんだ、と解釈して胸を撫で下ろして良いものか。コナンはこの一週間迷い、そして戸惑い続けた。だが正解がどうしても導けない。いつもは頭脳明晰のコナンも、自分の事となるとさっぱりで。

そこで、服部平次に相談して今に至る訳である。

……が。

明らかに人選ミス。

「そうかあ……うーん。ほな、姉ちゃんに直接聞いてみたらええんとちやうか？」

すつと肩から力が抜けた。もちろん悪い意味である。

受話器の先に、オメーはバカかつ、と大声で怒鳴りつけたくなる。いや、実際怒鳴った。

「そんな事してバレてなかったらどうすんだよ！？それまた面倒な事になっちまうじゃねーか！」

「そんな時はお得意の演技力で誤魔化してやな……」

「誤魔化しが通用するかよ」

バレてなかったら。そんな馬鹿なとは思うが、蘭のあの態度だ。

有り得なくはない。もしそうだった場合、蘭に余計な疑惑を抱かせてしまう恐れがある。ケース・バイ・ケースと都合良くはいかない。だからこそ、コナンは平次に相談したのだ。だから。

蝉が五月蠅い。もはや騒音の域に達するのではとコナンは思った。だから、教えてくれよ。服部。お前ならどうする？

「工藤……」

怒鳴ったからだろうか。それとも……。急に平次の声が真面目な色を帯びた。さっきまでの呑気な語調では無い。

この探偵特有の声を望んでいたくせに、いざとなるとコナンは身

を竦めてしまった。

待ってるんや…おまえの口から直接、話聞かせてもらうんをな。

何時か平次に言われた言葉が蘇る。あの時も新一は正体がバレそうになっていた。平次はそんな新一を心配し、文化祭まで姿を現してくれたのだ。その後の滑稽な変装には目を瞑らざるおえないのだが。

しかし、しつかりと核心を射るところはさすが西の名探偵である。待ってるんや。今の平次はあの時と同じ据わった声と、電話の為見えないけれど、きっと同じ真剣な瞳をしているのだろう。

「工藤」

平次が再度ゆっくりとコナンの名前を呼んだ。

「オレには何とも言えへんな」

少し間が空く。平次が空咳をした。

「姉ちゃんがお前の正体に気づいてないのか、それとも気づいてへん振りをしてるのか。分からへん。これは二人の問題やからオレは口出しでけへんのや」

ずっと風が頬を掠めた。窓が開いているのかも知れない。

「気づいてない」フリ”。はっきりと言いつつ平次の言葉にコナンの胸は疼いた。

「けどな工藤。オレにも確かに言える事が一つだけある」

「え」

「元に戻った人には必ず原因があるんや」

心当たりあらへんか。と続いた。コナンは少し間を置いて答える。

「……あるには、あるんだけど」

「けど、認めたくないんやな」

内心をズバリ当てられ、コナンは身を固くした。

何故急に”工藤新一”に戻ったのか。その原因に心当たりはある。確信もある。が、認められない。それが真実だとは思えない。

なんでだ？ どうしてこんな事したんだよ。オメーだって……

コナンは軽く目を閉じ、自分の推理を思考から追い出した。

「ま、近々そつちに行つたるわ」

平次がまたがらりと口調を変えて言った。

「え？ こつち来るのか？」

「なんや、来て欲しないんかい」

「いや、そうじゃなくて」

「親友としては心配やからな。安心しい。オレがバツチり考えとい

てやる。楽しみにしとつてや。ほな、な」

「ちよつ、何を」

楽しみにしとくんだよ。と、言い切る前に機械音が耳に響いた。コナンはしばし自分の手の中にある携帯電話を見つめた後、無表情で通話を断ち切った。

「誰が親友だよ……」

もしかしたら自分は余計な問題トラブルを持ち込んでしまったのかも知れない。服部平次と言う名の問題を。

小さくため息をつく。けれど、その行為とは裏腹にコナンの心は少し軽くなっていた。

爽やかな夏の風がコナンの鼻先を優しくくすぐった。

## 第五章 夕暮れ時は

阿笠博士から電話があったのは平次との会話から更にその三日後、正午を少し程過ぎた頃だった。

「どうだった？」

通話ボタンを押した途端、噛みつくようにコナンは言った。それほど博士から報告を急いでいたのだ。

博士に、そう慌てるな、と諭されたけれど、慌てず落ち着いていられる訳が無い。コナンの心臓は高鳴りを見せ、口はいつもよりも些か滑らかになっている。

「どうだったんだよ」

コナンは声押し殺してもう一度催促した。

「……………君の言う通りじゃったよ」

受話器を落としてしまわないように、しっかりと握り締める。

酷く落胆し、訳が分からないと言つ戸惑いを、博士はそのまま口調に残っていた。

「そっか……………」

「新一……どうなってるんじゃない？ 何で」

「……分からない」

コナンは博士の言葉を重々しく遮った。博士はその口調から何かを感じ取ったのか、以降何も言わなかった。

それよりも、とコナンが話しを続ける。

「アイツに気付かれてねーだろうな？」

「調べた事とか？」

「ああ」

「大丈夫じゃ。彼女が学校に行つとる間にやったからのう。分かるとしたらワシがパソコンを少しいじった事くらいじゃな」

”くらい”でもアイツは不審に思うかも知れねーけどな。

チラツと考えたが、それは敢えて言わなかった。博士にこれ以上要らぬ不安を与えたく無かったし、不審に思っただろうが、いまいが、いずれ彼女には追及しなくてはならないのだ。

何で解毒剤を自分に飲ませたのか、を。

「新一」

博士が言う。

「蘭君の方は大丈夫なのか？」

「蘭？」

「さつき君の家の前で、暫く何か考え込んでいたぞ」

「……」

「その顔が、何とというか、泣きそう……いや、違うな。苦しそうな……そんな感じじゃった」

部活に行っただんじゃなかったのか。

コナンの額には深い皺が刻まれ、受話器を握る手に力が入った。

「新一？」

「……大丈夫だ。全部なるようにしかならねーよ」

なるようにしかならないのが大丈夫なのかは謎だが、今はこれくらいしか言えない。

「色々サンキューな。博士……」と礼を言って受話器を置く。

コナンは一息ついてから、もともと少し開いていた窓を全開にした。心地良い風が十分に入ってきた。部屋には冷房が効いているため、少し勿体無いかも知れない。が、ほんの少しの間だ。大丈夫だろう。

大丈夫。さつきから自分に言い聞かせるように何度も使っているこの言葉。そうでも言っておかないと崩れてしまいそうな気がする。脆い。

けれど、今一番脆いのはきつと蘭だ。部活だなんて嘘をついてまで行った工藤邸で蘭は何を思っていたのか。

考えれば、考えるほどに頭が鈍く痛む。コナンは頭を抱え、外気をそっと自分の肺に入れた。

ある人物へと呼び出しの一報を入れたのはこの後の行為だった。

がらりと人の居ない公園は、待ち合わせの場所としては最適だったと言えよう。

時は夕暮れ。好き勝手辺りを照らしていた太陽は大人しく地平線の彼方へと姿を消す。最も、ビルが立ち並ぶこの東京では地平線なんて見えるわけは無い。要は言葉の”あや”である。

待ち人はまだ来ない。呼び出しておいて遅刻とは聞き捨てならない現状ではあるが、少女の内心は穏やか、むしろ沈んでいる。

今日、自分が彼に呼ばれた理由はすでに熟知していた。仕方無い。それだけの事をしたのだ。

”あれ”が彼女を傷つけた。彼女が傷付いた事で彼の事さえも。

「大切に、なんて綺麗事かしら……」

少女は苦々しげに自分の手を腕を抱く。強い力だった為に細くて白い少女の腕には、赤い指の痕が禍禍しく残った。

まるで戒めの刻印の様に。

でも、後悔はしない。

そう決めた。

誰かを傷付けるのはこれで最後。今は無理でも、必ず良い方に転じるから。そう信じて彼に薬を渡した。

正解じゃない。でも間違ってもいない。これで良かったなんてとも思えないけれど、悪かったとも思わない。

リスクは高く、失うものは限り無い。けれど得られるものもまた多

い筈。

複雑に絡み合った彼と彼女を繋げてあげられたならば、自分を抑制できるのだろうか。自分の中に渦巻く欲望を、制御し、いずれ消す事も可能なのか。

答えはおそらく、否。

それを知った上で少女は願う。それでも、と。

「それでも……諦めなきゃいけないの」

チリチリと肌を焼くような暑さは嫌いだ。人の領地にずかずかと踏み込んで来る様な無礼さに耐えられない。

そう思ってしまうのは、きっと自分が闇に染まっているから。

夕日に彼の姿が浮かび上がる。逆光で見えない筈なのに、そのシルエットだけで彼と判ってしまった自分が嫌になった。

「本当に……諦めなきゃね」

少女は苦笑混じりにそう言うと、くいつと顎を引いた状態で沈んで行く太陽を一瞥した。

## 第六章 棘

愛しい幼馴染みが眠って居るであろう部屋の扉を静かに開ける。そこには案の定、長い黒髪を垂らして寝息を立てる蘭の姿があった。

コナンはゆっくりと蘭の傍へと歩み寄り、暫く彼女の安らかな寝顔をじっと観察する。

ふと、思い立って蘭の頭を優しく撫でてみた。蘭が小さな息をもらす。その行為にコナンは不本意ながら、どきりとしてしまうのである。

”気づいて無いわけじゃない……”

思い出された言葉。

夕日に照らされながら叩きつけられたそれは、今でも胸にちくちくと刺さる。最初は小骨くらいだった痛みはやがて鋭いナイフへと変わった。

”彼女はあなたの正体に気づいてる。けれど受け入れられてない”

”目を背けているのはあなたも同じじゃない”

コナンはナイフが胸を容赦なく抉る度に深く息を付きながら、それでも蘭を優しく撫で続ける。

「蘭……」

呟いたその一言は虚しく響き、闇へ消え去った。

” いい？ 工藤君、選択肢はないのよ ”

さくっ……

微かに砂が動いた音に眉をひそめる。公園には静かに足を踏み入れるつもりだったのだ。

コナンはだんだんと歩調を緩め、やがて赤みがかった茶髪を持つ少女の前で静止した。

少女はチラリとコナンを一瞥し、そのまま視線を斜め下に送り、一言。

「……遅刻よ」

穏やかな口調だった。

「あ、ああ。悪いな。灰原……」

「暑かったわよ。蝉もつるさいし」

” 灰原 ” と呼ばれた少女は手で団扇を作り、自分に微量の風を送

った。それが相当心地良かったのか、少女は目を閉じ、髪を靡かせた。

言葉とは裏腹に哀に長いこと待たされて苛立つ様子はない。何故かどこか悲しげで、小さな体がより小さく見える。

「自分が呼び出された理由……分かってんだろ？」

自分の意志とは関係無く、コナンは哀に訊いていた。

「博士に頼んで調べて貰ったんだ。お前のパソコンをな。そこにはオレの推理通りある薬のデータが入ってた」

哀はコナンの言葉から逃れるように目を切り、押し黙る。だが執拗に絡むコナンの視線に哀はとうとう観念したのか軽く息を尽き、己のポケットから何かカプセルの様な物を取り出した。

それは。

「解毒剤……だよな」

「ええ。正確には、前にあなたに渡した解毒剤の白乾児バイカルの成分をほんの少し薄めた物。正直効き目があるか五分五分だったわ。あなたの体には抗体が出来てる訳だし。でも、あなたが私を呼び出したと言うことは戻ったのね」

哀はそう言いながら解毒剤を手の中でころころと遊ばせた。

「戻ったよ……あの嵐の夜に数分だけな」

「とりあえず実験は成功って事かしら」

相変わらず哀の掌で軽快に動き回る白いカプセル。が、それは突然地面に叩きつけられた。

じつと解毒剤を無表情で見つめていたコナンが哀の胸ぐらを勢い良く掴み、その衝撃で掌から零れ落ちたのである。

自らを持っていてくれるものが無くなった解毒剤はころころと転がり、やがてコナンの足元で落ち着いた。

コナンは足元のカプセルを睨み付けながら、目を伏せ続けている哀を静かに放した。

「……けんな」

小さな声だった。言ったコナン自身でさえ聞き取れない程の。

「ふざけんなよ、灰原」

コナンは吐き捨てる様にそう言った。

「実験？ 違うだろ。お前はそんな理由でリスクを負うような軽率な人間じゃねえよ。蘭に風邪薬だと偽って解毒剤を渡し、オレに飲ませた。あの日、傘を忘れたのも、オレにどしゃ降りの中を走らせ、風邪を引かせる為か？」

「……あなたなら傘を忘れたと言う私を放っておかない。たとえ自分が濡れたとしても、ね。まあ、それで本当に風邪を引くと言う確証は無かったから半ば運任せな所もあったけれど」

哀はため息混じりにそう言うと、目を細めながら茜空を仰いだ。どうしてもコナンと目を合わせたく無いらしい。

もしくは、合わせ”られない”のか。

「運任せなら尚更意味分かんねえよ」とコナンは疲労感を声に滲

ませる。

「なんでこんな事した？お前だっていつもはオレの正体がバレねーように協力してくれてたじゃねえか」

「……そうね。いつもの私なら間違ってもこんな危ない賭けなんてやらないでしょうね」

「だったら、なんで」

哀は静かにコナンの言葉を遮った。

「諦めなきゃいけないの」

「諦める？」と怪訝そうに聞き返したコナンに、そうよ、と哀は毅然とした態度で答えた。

コナンは一瞬言葉に詰まったが、尚も哀に問い掛ける。

「それは、オレが元に戻る事で諦めが着くのか」

「分からない……分からないけれど諦めなきゃいけないのよ。どんな手段を使っても、絶対に」

「なんで」

「叶わない願いは自分の首を絞めるから……」

「はあ？」

哀の意味不明な返答にコナンは首を傾げる。そんなコナンに哀は

「判らなくていい」と言葉を浴びせる。

「もういいでしょ。理由は言ったわ。あなたはこれからの事を考えなさい」

「これからの事？」

「正体、バレたんでしょ？ 彼女に」

”彼女”と言うところで哀は微かに顔をしかめたが、コナンは気が付かなかつた。

それよりも今の問いの方に気を取られていたからだ。

「やっぱりバレてんのかな……」

「えっ」

哀が驚いて顔を上げたため二人の視線はやっと噛み合う。

「バレて……ないわけ？」

「いや……」

コナンはばつの悪そうに頭の後ろをかき、分かんねえんだよ、と困ったように言った。

「あの時 オレが元に戻った時、蘭がすぐ近くにいて……その後蘭は何も言わずに出て行った」

「それで？」

「それで、朝起きてみたらオレに”おはよう、コナン君”って」  
「……」

「あつ、もしかしたら暗闇だったからバレてない……のかも」

コナンの話を黙って訊いていた哀の眉間に無数の皺が刻まれる。  
夏の風に乗ってふわっと遠くで小さな風鈴の音がする。

哀は固く結んでいた唇をべりつと話すとその端から小さな息をもらした。

「バカね……」

風が止まり、風鈴の音が止む。

「気付いて無いわけじゃないじゃない……」

絞り出すような哀の声。苦しみなのか、憎しみなのか、はたまた悔しさなのか。コナンは哀のその表情に少し様々な感情が現れた事に動揺した。

しん、とした公園は薄気味悪い。見れば夕日は完全に沈み、辺りはすっかり暗くなっていた。

彼女は、と哀は続ける。

「彼女はあなたの正体に気づいてるわ。だけど受け止められてない」

「受け止める？ 何を」

「真実を」

ぴしゃりと言い返された。くっ、と一呼吸置いてコナンは話す。

「……蘭は逃げてるってのか。真実から目を背けてる？何の為に？  
今までオレは散々蘭に疑惑の目を向けられてたんだぞ。お前も知っ  
てんだろーが。それをこの期に及んで何で」

「分からないの？」

哀は呆れたように首を振った。

「彼女は怖いだよ、認める事が。怖くて、混乱して、逃避する。夢  
であつたらと願ってしまふ……そんなのってあなたには分からない  
んでしょっね」

哀は言葉を挟もうとしたコナンを静止させ、それに、と続ける。

「目を背けてるのはあなたも同じじゃない」

哀はそれだけ言うと、コナンに背を向けスタスタと歩き出した。  
コナンは呆然とその背中を見送る。

ふと立ち止まり、振り向き様の哀にもう一言投げつけられた。

「いい？ 工藤君、選択肢は無いのよ」

選択肢……？

何だよそれ、と言おうとした時には既に哀の姿は無く、虚空に砂  
埃が舞うばかりであった。

哀との会話から数時間が過ぎ、時は夜中。コナンは蘭が眠っている部屋へとそつと侵入した。

別に何がしたかった訳では無い。何を求めていた訳でも無い。ただ、何だか思考が上手く働かず、胸に色々な事がひっかかり、眠れなかったのだ。その原因が哀の言葉にある事は明らかで。

「蘭……」

脳裏をよぎる言葉の棘を一本一本抜くかのごとく、コナンは優しく蘭の髪を撫でた。

「お前は怖いのか？」

返事は無い。  
それを確認してからコナンは続ける。

「オレは……怖いよ。お前に真実を打ち明けるのがすごく怖い。それは逃げてるのか？」

蘭の細く、艶やかな髪は自然にコナンの指へと絡む。

「蘭……お前の涙だけは絶対に、絶対に見たく無いんだ……」

どうすればいいのか分かんねえけどな、と苦笑を零す。それから、お休みと言いながら名残惜しそうに部屋を出て行った。

パタンと扉が閉まり一瞬室内に静寂が訪れる。

コナンは気が付いていなかった。寝ていると思っていた蘭の意識は確かに此処にあり、コナンの言葉を全て訊いていた事、そして彼が出て行った空っぽの部屋で一人、ある眩きをもたらした事に。

「新一……」と。

## 七章 彼女の異変

見れば今まで街を包んでいた闇は、一筋の光にだんだんと侵略されていく。風光明媚かつ、平面的なその光景は何処か一流画家が書いた絵画を思わせた。

夜が明けようとしていたのだ。

十、九、八、七……

コナンは目を瞑り、ゆっくりと声には出さずカウントを始める。最近朝の習慣に成りつつある行為。それはコナンがいかにか熟睡出来ていないかを物語っていた。

六、五、四……

己の度量の小ささと、情けなさで溜め息を尽きながらも数字は刻々と進んでいく。

三……

空の明るみが増した。カーテンの隙間から光が差し込んでくる。もうちよつとだ、と息を吐き出した。

二……

後少し。

一。

ジリリリリ！

コナンが”一”と言ったのと殆ど同時に目覚まし時計が喧しく騒ぎ

出した。ただしコナンの部屋の時計では無い。

蘭の、だ。数秒間鳴り続けた目覚まし時計は瞬間、ピタリと止まった。その後ガサゴソと人が動く気配がし、台所が騒がしくなる。新たな一日の始まり。

「また全然寝てねえな」

言葉にするつもりは無かったのに自然と漏れた。おまけにそれは疲れた様な呟きになってしまった。

眠れないと言うのは結構堪える。精神が擦り切れているからか。もしくは躰の機能が巧く作動していないのかも知れない。

何にせよ自分の弱みが浮き彫りになるこの夜明けと言う時間帯をコナンは酷く嫌っていた。唯でさえあの嵐の夜から余り寝ていないと言うのに、昨日の哀の言葉の仕業で今日は一段と躰を安められていない。

コナンは最終確認をするかの様にもう一度だけ目を瞑ってみたが、眠気は一向に襲っては来ず、とうとう諦めてベッドを抜け出した。

とん、とん、とん…

食卓に入ってまず目に入ったのは長い黒髪を纏った、すらりとした後ろ姿。蘭の腕が忙しなく包丁を動かしているのは背後からでも充分に確認に出来た。

「おはよう」

コナンの方から声を掛ける。だが声にピクリと反応した蘭はなかなか此方を向かない。

「蘭姉ちゃん？」

「……あ、お、おはよう」

二度目の呼び掛けに蘭が口籠もりながら答えた。チラリと目端で捕らえた蘭の横顔。

目が赤い？

「蘭姉ちゃんどうしたの？目、腫れてるよ」

「え……昨日日本読んで寝たからかな」

コナンは、ふうんと首を傾げながら自席に着いた。まさか蘭のそれが涙の痕だったとは知る由も無く。

思えばこの瞬間から蘭の異変は見て取れた訳で。こうして事態は動こうとしていたのだ。

「ちょっと待っててね。もうすぐ朝食出来るよ」

蘭が少し微笑みながら言った。

「あ、ボクいいや。博士の家に行くてくる」

「こんな朝早くから行くの？」

「う、うん。ちょっと用事があった……」

そう、と低めのトーンで蘭は告げた。そんな蘭から逃げるように、コナンは沃さと出て行くこうとする。

「じゃあ、行ってきます」と、コナンはドアノブに手を掛け、足

を進めようとした。その時。

「まっ……待って!」

突如家に金切り声が空を切った。その場に似つかぬ余りの突然さと切羽詰まった声に、コナンは、え?と呆然と蘭を見詰めてしまう。蘭はハツとしたように口を閉じると気まずそうに顔を伏せた。

「蘭姉ちゃん……?」

混乱気味にコナンは声を掛けた。

「どうしたの」

「……ううん、ごめん。何でも無いの」

蘭は絞り出すような声で、それでもはつきりと言った。

「車に気を付けてね」とだけ付け足すと、また台所へと向かい朝食の準備を再開した。その時の蘭の顔からは何の感情も読み取り得なかった。

「それで?」

コンピューターをカタカタと操っている小さな背中の話の続きを促される。その横からは博士が三つのカップを持って現れた。

カチャカチャと音を鳴らすカップ達に気が付いたのか、哀も画面

から顔を離した。

「それでって……別にそれだけだよ。お、サンキュー博士」

コナンは青色のカップを手に取り、面倒くさそうに返答する。

「呼び止められた後何か言われなかったの」

今度は哀が赤い色のカップを取り、中身を口に含んだ。コナンもそれに習って半透明の中身をこくつと飲む。と、口の中に程良い酸味と甘味が広がった。

カルピスか。きつと博士への御中元だ。そう言えばカルピスなんて久し振りに飲んだな。などと、全く話題にそぐわぬ他愛のない事を考えてみたりする。

「ちょっと、工藤君。聞いている？」

そんなコナンの脳内暴走を止めるように哀が鋭く言った。

「聞いているって。車に気をつける以外には何にも言われなかったぜ」

「本当に？」

「マジ」

それだけ訊くと、哀はまた物思いに耽るように椅子をコンピューターの方に向き直した。コナンはもう一口カップを啜り、口内の甘味を噛み締める。

そうして盛大に溜め息を尽くと、椅子をズルズルと滑った。非常にだらしない格好になってしまったが、コナンは敢えて直そうと

はせず、そのまま椅子の上で伸び続けた。

それを見た博士は、どう感じたのか、何処か憐れみの優しい目つきでコナンを眺めていた。

「新一」

「ん」

「まだ話さないのか？」

「うーん……」

コナンは手の中のカップの柄を指でなぞりながら唸った。

「どうすっかなー……」

「まあ、蘭君が君の正体に気付いてるのかも判らないんじゃない判断しにくいとは思っけどのう……」

「……」

カップをなぞりながら時折溜め息を漏らすコナンに博士が何か言う前に、部屋にコール音が鳴った。

「電話じゃ」と言いながら子機の元へと向かおうとする博士にコナンは小さく声を掛けた。

「博士」

「ん？」

「このカップ趣味悪くねーか？」

コナンはカップをくるりと一周させ、博士に柄が見えるようにする。曲面いっぱいに広がる不細工なペンギン。

博士はそれを目に止めると少し困ったように口籠もった。それから「ほっとけ」と苦笑を零し、電話に出るためにコナンに背を向けた。

「ごめんなさい」

「……え？」

今のは哀の言葉だ。だがコナンは意味が理解出来ない。

「何で謝るんだよ」

「あなたにじゃないわ」

「はあ？」

カタカタという最早部屋のBGMと化していたキーボード音が止む。

「じゃ、誰に？」

「彼女」

「蘭？」

哀は首を振るでもなく、何も言わずふいっとそっぽを向いた。コ

ナンは額に皺を集めると顔中に疑問符を浮かべる。

「お前ってさ、時々訳判んないよな」

「そうかしら」

「いや、間違えた。いつもだな」

にやりと笑みを浮かべたコナンを見た哀は心外だとばかりに顔をしかめて見せた。

「そう言えば」と哀が切り出す。

「あん？」

「そのカップ選んだの私なのよね」

「……あ。そう……」

微妙な空気が二人間に流れ、コナンは笑みを引つ込めざる負えなくなる。コナンのその様子を見た哀は勝ち誇った様に鼻歌を歌った。

「なんじゃと!？」

暫く受話器を持ち、何かを話していた博士がいきなり声を張り上げた。何事かと哀とコナンが椅子から立ち上がる。

「……ああ。……いや、来たらんよ。コナン君だけじゃ……まさか、もう夕方じゃぞ……ああ、分かった……来たら君に連絡すればいいんじゃない?…分かった…それじゃ」

博士は通話を切断すると、暗い顔でコナンをじっと見た。

「ど、どうしたんだよ」

肩で息をする博士の様子に狼狽える。博士は数回深呼吸をしてコナンに向き直った。

「いいか、新一。落ち着いて聞くんじゃぞ。今のは毛利君からの電話でな。実は」

続く言葉を聞いた時、落ち着けと言われていたにも関わらず、コナンの頭の中は真っ白になった。

まさか…何で……

心拍数は上がり、何も考えられない。何も聞こえない。呼吸法すら忘れてしまった。ぐらりと足元が揺らぐ感覚にコナンは立ってられない。

完璧にパニックに陥ったコナンの心の中では唯唯博士の言葉が連呼されるだけであった。

「蘭君が行方不明になった……」

## 八章 選択肢

酷く息切れがする。背中からは汗が噴き出し、動機も激しい。痺れるような衝撃が躰を貫き、コナンは走るのを止めて身震いした。一旦止めた足は動けと一喝する意識に抗い、ガクツと力が抜けた。膝に手をつき、肩を上下させ、乱れた息を整える。

「……………くっ……………そ……………」

コナンは思い切り、壁を蹴った。びくともしない。打ち付けた爪先の鈍い痛みにも顔を歪める。

焦るな。落ち着け。冷静になれ。頭を使うんだ。

そう頭の片隅で囁く探偵としての本能に近い声だけがコナンの理性を保たせていた。

「新一！」

背後から名前を呼ぶ声に反応し、振り向く。白髪の老人が此方に駆けてきていた。博士はコナン同様息を切らし、それでも必死にコナンの元へと来ようとしていた。

体に悪くはないか、とちらりと考える。

「ら……………蘭君は？」

息も絶え絶えに博士が訊いてくる。コナンは静かに首を横に振っ

た。

あれから数時間。その間、コナンは一心不乱に走り続けた。駅、公園、本屋など思い付く全ての場所を探したが、蘭の姿は一向に見つからない。

どうやら博士の方も不発に終わったらしく、ガクリと肩を落として落胆してみせる。

「まさか蘭君、何かの事件に巻き込まれたんじゃない？」

眉を顰めながら博士が言った。

拉致。誘拐。監禁。その他不吉な考えの諸々がコナンの頭をすつとよぎる。だが、今幾ら考えを巡らせた所で仕方がない。自分に来ることは諦めず、探し続ける事。

「オレ、もう少し探してみるよ。灰原も居るし博士は家に帰ってくれ」

「え？じゃが……」

「これ以上走ると体に良くないぜ」

有無を言わせぬコナンの口調に博士がたじろぐ。その時、コナンの胸元で何かが震えた。

「電話か？」

「いや、メールだ」

コナンは胸ポケットから携帯電話を取り出すと、パカッと開き内容に目を通す。と、急にその目がすつと細くなった。

それに気付いた博士が訝しげに首を傾げた。

「誰からだったんじゃ？」

「……蘭」

「なっ……！ 彼女は無事なのか？」

この時、博士の頭では”身の代金の要求”なんて言う文字が激しく点滅していた事だろう。

コナンは目を細めたまま、なかなか返事をしない。

「新一……まさか」

博士が心配そうな顔で答えを急かした。数秒の沈黙の後、コナンは小さく息を吐き出すと、自分の携帯画面を前に突き出す。博士はそれを食い入るように見詰めた。

”あなたの家で待ってます”

蘭がコナンに宛てた内容。絵文字や顔文字どころか、何の感動符さえ含まれていない。普段の蘭のメールからはとても想像出来ない素っ気ない物だった。

それを見終わった博士がほっと胸を撫で下ろす。

「良かった……無事なんじゃな」

「ああ」

蘭の無事が確認出来、安堵の表情を浮かべる博士に対して、コナ

ンは何処か煮え切らない態度。「どうした？」と博士が訊いても考え込むばかりであった。

「ほれ、早く家に帰らんと。蘭君が待って居るんじゃない？」

「博士」

「うん？」

「おかしいと思わねーか」

コナンは重い口調で話し掛け、続ける。

「普通、小学生相手に」あなた」なんて使わない。第一あの探偵事務所は蘭の家だ」

「一つ一つ謎解きをするかのごとく、コナンは丁寧に言う。だが、博士は今一つコナンの言わんとする事が判らない。それに気が付いたコナンは、自分の携帯を博士の目の前でひらひらと振って見せた。

「それに、これはコナンの携帯電話じゃない」

「え？」

「「工藤新一」の、携帯なんだよ」

「なっ……!!」

博士の目が眼鏡越しに大きく見開かれた。

「そ、それじゃ、蘭君がいるのは……」

「オレの ” 工藤新一 ” の家だろうな」

カチツと言う音がして二人のすぐ隣にあつた電灯に光が灯った。光は何回か不定期に点滅した後大人しくなる。周りはいつの間にか暗くなっていた。

「行くのか？」

誰も通りかからない丁地路は酷く物悲しげだ。その中でポツリと囁くように問われる。

” いい？工藤君、選択肢は無いのよ ”

昨日公園で哀に言われた言葉だ。まるで映写機に掛けたように、その場面、台詞、仕草までもが鮮明に途切れる事なく脳裏に呼び覚まされる。彼女はこうなる事が判っていたのだろうか。

「行くよ」

しっかりと博士の目を見て答える。

「じゃが、行ったら君の正体がバレるんじゃない……」

「もうバレてるよ」

コナンは弱々しい微笑と共にそう言うと、ゆっくりと歩き出した。その行く先は工藤邸 蘭の元。

地面を踏みしめる様にして顔を伏せながら前に進む。

「今度こそ誤魔化せなくなるんじゃないぞ！」

背中に言葉が降り懸かっていた。コナンは一時的に足を緩め、首だけで振り返ったものの、何も言わない。相変わらずゆっくりと蘭の元へと進み続ける。

そんな姿を見て、博士も無駄だと悟ったのか、もう何も言わず、ただコナンの小さな背中を見送るばかりで。

「……選択肢は無い、か」と言う、コナンの小さな呟きが虚空を舞ったのを、その耳が捕らえる事はなかった。

冷たいオレンジジュースをトポトポと容器に注ぎながら、哀は窓辺へと体を寄せた。飲み物を口に含んだ途端、オレンジの酸味が広がる。

窓の外を覗いて見ても”夏の大三角”が映り込むと言った二流の演出が在るわけもなく、夜空には星座に成り損ないの二等星が、ちらほらと見えるだけだ。だが、それらが見えただけでも都会の空としては充分と言えよう。

時折ジュースをすすりながら、暫くぼうつとしてしていると、その限られたフレームの中に一人の少年が現れた。少年は俯き加減に歩いている。

哀はカップを片手に、少しばかり身を乗り出し、その少年の行方を目で追った。

「工藤君？」

名前を口走った瞬間、ちらりとコナンが此方に向いた気がした。何をした訳でも無いのに、哀は思わず物陰に身を隠してしまう。二、三回深呼吸をしてから視線を窓の外へと戻す。

どこにいくの……

哀の問いに答える様にコナンはある一点に向かって歩き続ける。阿笠邸の隣の家。そこはコナンの 工藤新一の自宅。

「そこで、待ってるのね」

哀は誰に言うわけでもなくそう呟くと、星空を仰いだ。予感はしていた。昨日の蘭の様子をコナンに聞いてから何か起る様な気がしてならなかった。そして彼女がどれ程追い詰められているかも知っていた。だから。

”ごめんなさい”と。

先程のこの謝罪が只の自己満足に過ぎない事は重々承知していたが、言わずには居られなかった。彼の前で言っておかければならぬ気がした。

私の我儘に巻き込んでしまって、ごめんなさい。

あなたとあなたの大事な人を傷付けて、ごめんなさい

ハッと意識を覚醒させて窓を覗き込んだが、そこにはもうコナンの姿はなく、規則正しく並べられた電灯がちかちかと照らしているだけだった。

哀は小さくため息をつき、視線を手元に下げる。目に入ってきたのはカップに描かれている大きなペンギンの図柄。昼間コナンが「

趣味悪い」と言い放った物だ。

哀は、失礼ねと軽く口元に弧を描き、コナンがしていた様にペンギンを指で優しくなぞった。

「どうか頑張つて……」

緩くなった口から零れ落ちた言葉だった。

ピンポーン、ピンポーン……

少し場違いな軽快な雰囲気醸す呼び鈴。だが呼び鈴は、呼び鈴。これ以上どうしようもない。

博士かなと思ひ、哀は重たい腰を上げ、玄関へと向かう。

ピンポーン、ピンポーン……

前のチャイムから差ほど時間は経っていないと言うのに、再度呼び鈴が鳴った。

博士は何時からこんなにせっかちになったのか。

「はいはい、今開けるわよ」

哀は気だるそうにそう言うと、これ又気だるそうに鍵を開けた。

呼び鈴を押した相手が露わになる。

瞬間、哀の形の良い切れ目は大きく見開かれた。二歩程後退りした為、哀の小さな体は棚に当たり、棚はガタンと音を立てる。

「あなた、なんで……」

そつと呟いた哀の言葉だけが部屋に響いた。

.

## 九章 沈黙の傍らで

蘭は暗い部屋に一人座っていた。

暑い。誰も出入りせず、冷気を暫くの間通していなかった部屋は、とにかく暑い。うだるような熱気が蘭を包み、掴んで離さない。だが、不思議と汗が服に滲む事はなかった。常に背中に寒気を感じていたのだ。

辺りを見渡す。高い天井。広い洋間。聳える本棚。東京に在るにしては珍しい洋館を思わせる風貌だ。

ほんと、道楽息子なんだから……

くすりと笑い声が出た。びくっと肩を震わせて周りを確認したが、人の気配はしない。どうやら今の笑い声は自分が発したらしい。信じられない。こんな時でも笑えるなんて、なんて凶太いのだろう。

蘭はため息をつき、目を伏せた。

アイツの事を考えるといつも、そう。自分でも信じられないくらいに、わたしは凶太く、楽観的になる。涙もろくもなる。酷く気持ち揺さぶられたり、安心感に浸れたりする。

それだけ、わたしはアイツを想ってる。想ってる筈だ。なのに……

なのに、試すような事をしてしまった。一番残酷で、卑怯な行為だと判っていたのに。疑惑を持ったなら、直接問えば良かった。直接想いをぶつければ良かった。判っているのに。

コナン君は新一なの？

今まで幾度となく抱いてきた同じ様な疑念。けれど、肝心な時に直視出来なかった。現実を受け止めるのが怖くなった。何故なら、

今まではあんなに生々しく”新一”と言う存在に触る事はなかったから。

コナン君は新一なの？

言えない。訊けない。受け止められない。

ねえ、怒ってる？

困ってる？

悲しんでる？

もし、来なかったら。

その考えが唐突に蘭を襲った。後ろに仰け反るほど、唐突に。

もし、来なかったら……それでいい。誰も来なかったらわたしは今まで通り、アイツを待ち、あの子と暮らす。それが一番良い。そうに決まってる。

もし新一が現れたら。メールを見た新一が現れたら……そうしたら素直に再会を喜ぼう。

「どうしたんだよ？ あんなメールよこして」

「うん。どうしても、無性に新一に会いたくなっちゃったから」

「そ、そっか……いや、その、オレもそろそろオメーのアホ面を見たかったと言うか……」

照れた様に頬をかきながら、そっぽを向く新一が目には浮かぶ。そんな少し艶やかな会話が出来るかも知れない。

もちろん、わたしに”会いたかった”などと言える素直さがあれば、の話だけね。

それじゃ、もし。

もし”コナン君”が現れたなら、わたしはどうすれば良い。何でここに来たのと訊くの？自分で呼び出して置いて？

唇を押さえ、かぶりを振る。

まだ判らない。だって、わたしはまだ真実を聞いてはいない。勘違いかも知れないじゃない。そう、勘違い。こんなの馬鹿げた妄想だ。妄想？ 本当に？ 違う。妄想なんかじゃない。

それは今までの様に唯の直感でなく、確信だった。

ねえ、怒ってる？

困ってる？

悲しんでる？

教えてよ、新一。あなたは今どんな顔してるの……

蘭の耳が扉が開く音を捕らえた。扉には鍵を掛けていなかった。すぐに彼が入って来られるように。

「……蘭……」

小さく聞こえた声。足音。ゆっくりと振り向いて、そこに居たのは眼鏡を掛けた、見慣れた小学生の姿だった。

蘭は目を閉じ、すっと息を吸った。

コナンは玄関のチャイムを押そうとした手を止めた。

きつとドアに鍵は掛かっていない。理由は無いがそう思った。いや、感じたと言った方が正しいかも知れない。ドアノブに手を掛けると、案の定、扉は何の重みもなく開いた。きい……っとな嫌な音が響く。自宅ながら少し気味が悪い。

家の中に足を踏み入れた途端、むわっとした熱気に襲われた。その熱気の中に彼女は居た。

反対側を向き、行儀良く椅子に腰掛ける細身のシルエット。艶の

ある長い髪の毛は僅かな光でも跳ね返す。

「…蘭……」

コナンは小さく呼び掛けた。蘭が振り向く。暫し閉じられていた瞳が、こじ開けるように開かれた。

「蘭」

もう一度確かめる様に呼ぶ。返ってきたのは蘭の弱々しい泣きそ  
うな、笑みだった。

「蘭姉ちゃん、でしょ」

コナンは何も答えなかった。黙って蘭の元へと歩く。膝の上でき  
つく結ばれている蘭の指は微かに震えていた。

蘭は、コナンがそれを見ているのに気が付くとキュッと指に力を  
込めた。

「蘭。あのさ」

「大騒ぎになってる？」

震える指先とは対照的にはつきりした口調に遮られた。思わず、  
え？と問の抜けた声を出してしまう。

「わたしが見つからなくて大変な事になっちゃってる？」

「あ、ああ、まあ。蘭が行方不明って」

「えっ。まさか警察なんて呼んでないわよね」

「それは、ねーな。おっちゃんが『蘭は自分が探し出す』って言うてたから」

「なにそれ。たまに部活サボっただけなのに、大袈裟だなあ」

「大袈裟って…… おっちゃん、すげー心配してたんだぞ」

「たまにはいいわよ。いつも娘の事なんかそっち退けなんだから」

肩をくすめて、口元に緩やかな弧を描く蘭。綺麗だ。思わず見入ってしまう。だが、大きくて形の良いその目は決して笑ってはいなかった。

背中 of 辺りが寒くなる。言葉に詰まる。ここに来るまでに、沢山の言葉を考えて来た筈なのにそのどれもが脳内から吹っ飛んでしまっていた。

冷や汗が頬を伝い、口元に当たった。何か言わなくては。だが、その口は重たくて、開くことが出来ない。

どうした。何か言えよ。言わなきゃ蘭に何も伝わらないだろう。

「ら……」

「やめて」

突然蘭が叫び、耳を塞いでうずくまった。

「蘭？」

コナンは戸惑いながらも蘭の元へと駆け寄る。

「ちよつと、待って……」

それは、まさに哀願だった。小さく消え入りそうで、何かを請う響きが含まれていた。胸がチクリと疼く。

言われた通りコナンは時間を置いた。蘭にはこの何倍もの時間待っていてもらったのだ。この位何でもない。時間は何でもないが、やはり沈黙は重たかった。

どのくらい経っただろう。五分かも知れないし、一時間かも知れない。やがて、うずくまっている蘭がポツリと言った。

「あの日……」

あの日。あの嵐の夜の事だろう。

蘭が顔を上げた。視線が噛み合う。その瞳に刻まれているものは怒りでも、悲しみでもない。あれは困惑か？

「あの日、わたしはコナン君のベッドの上で新一を見た」

ぼつり、ぼつり。蘭の艶やかな唇から零れ落ちる言葉をコナンは黙って聞いていた。

「見た、気がしたの。だつて有り得ないよ。そうでしょ？夢だと思つた。朝起きたら全部元通りになつてる。そう信じたて眠つたの。実際、次の朝いつも通りコナン君が起きてきた。あっ、いつもより少し疲れてるみたいだったかな。だけど、それだけ。背はわたしより低かつたし、眼鏡も掛けてた。

普通ならこれで安心出来るよね。やっぱり勘違いだったって。だけど……駄目だった。どうしても不安でどうしようもなくて」

蘭はそこで言葉を切り、息をついた。

「やっぱり心の奥で勘違いじゃないって思ってたのかな」と力なく微笑む。コナンには返す言葉がなかった。蘭は続ける。

「それで昨日、ベッドの横で囁くコナン君の言葉を聞いて……」

「あの時、起きてたのか」

「ごめんね。寝てるふりしてたの」

蘭の髪がさらりと揺れる。

「コナン君　あなたの言葉を聞いて、どうすればいいのか判らなくなっただけ……　今まで通りはもう無理なんだって思った……」

「蘭……」

「だから」

蘭の口調が少し強めに変わった。コナンはぎくりと体を震わす。

「だから、本当の事を教えて。コナン君はコナン君だよな？ 新一とは別人なんだよね？」

「……」

「お願い……　答えて」

消え入りそうな蘭の声。穏やかな息遣い。

” 蘭でいい！蘭のままがいい！”

不意に小さい頃の蘭の言葉が脳裏をかすめた。

” わたし新一がだーい好き”

” 聞こうと思ってもこっちからじゃ聞けないから……”

” 言い訳なんて聞きたくないよ……”

” 一人にしないで……”

次々と浮かんでは消え、浮かんでは消えて行く蘭、蘭、蘭。小さい頃から現在に至までの様々な幼馴染みの姿。いつたい自分の何処にこんな沢山の彼女が居たのか。とにかく、底はかたなく出て来る。

だが、どれも今の蘭ほど苦しそうな表情はしてはいなかった。今の蘭は張りつめていて、少しでもついたら破裂してしまいそうなほどで。

もう、限界だ……

コナンは目を瞑り、瞼の下に闇を確認すると、静かに自分の眼鏡を外した。蘭が息を呑む気配がする。

「蘭……」

蘭の息遣いが聞こえる。

「蘭、ごめん。オレは……オレの正体は……」

躊躇う様に目を伏せる。だが、それも束の間。コナンはすぐに顔

を上げ、蘭に向き合う。

二人の視線が絡み合う。

「工藤新一」

## 九章 沈黙の傍らで（後書き）

いつも『きつと僕らは光と闇を抱えて、』をご覧になって頂き、本当に有り難うございます。お陰様で読者数も信じられないくらい増えました。それから、いつも引つ張ったように伏線を残して終わらせてしまう事をお詫び申し上げます。今回、回想シーンには原作の1、23、26、47、55巻の言葉を引用させて頂きました。駄文ですが、これからも読んで頂けると嬉しいです。日向ひすい

## 十章 拒絶のライン

「嘘でしょ……?」

蘭の口元が固く結ばれる。細い肩は小刻みに震えていた。

コナンは目を背けてしまいそうな自分に必死に抗う。もうここまで来たら、逃げることも、隠れることも、誤魔化すことも出来ない。目の前の幼馴染みを直視する他、道は残されていないのだ。

「嘘じゃない」

かさかさに乾いた唇の狭間から漏らす様に声を出す。

「嘘なんだよね……?」

「嘘じゃないんだ、蘭」

「嘘よ!」

蘭は耳を強く押さえ、目を閉じ、叫んだ。目尻に涙を溜め、それが頬を伝って流れ出さない様に唇を噛み締める様子がひどく痛々しい。

プツンと糸が切れたみたいに蘭はどんどん饒舌になる。

「ありえないよ!だって新一はわたしの幼馴染み。高校生なのよ。」

コナン君は……コナン君は小学生じゃない。新一はバカで、いつつも自信たっぷりで、推理オタクで、だけど凄く格好良くて、優しくて、頼りになつて……コナン君とは全然違うよ……」

蘭の声は語尾に近付くにつれ段々とか細く小さくなり、最後には息の漏れる音しか聞こえなくなった。うなだれた蘭なんて、蘭じゃない。あの光を纏ったように嬉々として笑う自分のよく知ってる彼女とは、まるで別人だ。

けれど、蘭から笑顔を奪ったのはやはり自分自身で。

コナンは息を吸い込み、充分に肺に酸素を送り込んだ。

「蘭、あいな」

「わからないよ……」

小さな震える声に遮られた。

「え？」

「わからない。何で？ 今までだって、コナン君の正体は新一なんじゃないかって思った事はたくさんあったよ。何度も確かめようとした。だけど、その度に上手く誤魔化されたよね。なのに、何で今更そんな事言うのよ……」

「それは……」

「あの日、わたしに正体を見られたから？ もう仕方無いからバラしちゃおうって思ったの？ そんな適当な理由？」

「な、何言って……」

「わたしに今まで正体を言わなかったのも同じ理由なの？ わたしに説明するのが面倒くさかった？ わたしの事そんなに適当に考えてたってわけ？」

「ちがつ…… そんなわけねーだろ！」

「じゃあ、何よ！ わたしの事、適当に考えてなかったなら何で今まで何も言ってくれなかったの！」

「それはっ、オメーを、蘭を傷付けたくなかったから……！」

そう発した瞬間、吐き気と目眩と酷い嫌悪感に同時に襲われた。傷つけたくなかった？ だったら、蘭の側から消えれば良かったのだ。組織の危害が及ばないように遠くから見ているだけで良かった。こんな中途半端に接点を持ちたりせず、泡が消えて無くなるように静かに居るべきだった。

にも関わらず探偵事務所に住み、正体を偽ってまで蘭の側に居て、何の意味があった？ 蘭と一緒に居たいと言う、己の欲が満たされただけじゃないか。蘭が今流している涙は誰のせいだ？ 蘭の心を絞め続けたのはいったい誰だ？

傷つけたくなかったから      そんな綺麗事で片付けられると？  
ふざけんな。ふざけんなよ。

罵声を浴びせられる。誰でもない、自分に。自分が自分に対して酷い罵りをする。吐き気がする。目眩もする。嫌悪感が体内を駆け巡る。

それでも。

「本当に傷つけたくなかったんだ……」

オレにとつてオメーは本当に大切なんだ。大切な人の涙なんか嫌なんだよ。見たくねえんだ。

「……勝手だよ」

蘭の頬に一筋の光が伝った。輝いて綺麗だ。あまりに綺麗過ぎてそれが涙だと気付くのに少し時間が掛かった。

「新一は、勝手過ぎるよ……」

「わかってる」

「わかってない！」

蘭が右手の人差し指で流れる涙を掬った。

「新一は探偵なのに、わたしの事全然わかってない……」

涙を拭き取った筈の蘭の瞳はまだ充分潤んでいた。その瞳が真っ直ぐコナンに向く。

この視線。この目つき。この表情。もう”江戸川コナン”に対するものではない。全てが”工藤新一”に向けられるものだった。

「蘭。オレは……」

「やめてよ」

蘭の細い首が微かに横に振られた。まるでコナンと言う存在を拒むかの様に。

それは、明らかかな拒絶だった。幼馴染みとしての数年間、弟分と

しての数年間、いずれも二人の間には決して引かれることのなかった残酷で卑猥な拒絶のライン。

初めて味わうそれは、強烈に苦くて何処か滑稽だ。

「聞きたくない」

「ら」

「もう、何も聞きたくない……」

「た、確かにオレはオメーにずっと正体を隠してきたけど、それは……！」

「やめてよ！ 聞きたくないんだってば！」

「蘭っ！ 頼むから！」

「やだ……っ！」

「聞いてくれ！」

コナンは叫ぶように言うと、椅子に座る蘭の躰を強い力で自分の方へと引き寄せた。蘭はその力に抗い、コナンを押し返す。

刹那。ぱしん、と言う乾いた音が洋館に響いた。同時に衝撃を受けてよろめく。じわり、じわりと頬が熱を持って行く。コナンは痛みみの根元に手を合わせて、ようやく自分の頬が張られた事に気が付いた。生々しい痛みは引くことを知らず、コナンの胸に焼き付く。

叩いた蘭自身も自分の行動に驚いたように目を見開き、宙に在る右手を異物を見るような目つきで見つめた。

「あ……「じめ」」

「いや……」

両者とも気まずそうに視線を泳がせ、辿り着いた行方は各々の足元。

コナンは先程の己の行為に対する羞恥と共に、蘭に押し返された肩の辺りの感触に、胸の奥がずっと冷える感覚に駆られた。

「「じめ、ん、なさい……」」

後悔と動揺を滲ませた声で蘭が言う。

「その……叩くつもりなんて本当になくて。ただ、びっくりしたから、だから……」

「あ……いや、オレがあんな事したから……」

蘭はまた何か言いかけたが、狼狽えたように押し黙った。コナンも無言で目を伏せる。しばらくしてコナンは唐突に謝った。

「本当に、ごめん」

「え？なにが。叩いたのはわたしが悪」

「そうじゃなくて、今までの事だよ」

蘭が肩を揺らし、顔を上げる。

「あ……」

「オメーは聞きたくねえつつたけど、オレはやっぱり本当の事を話したい。今更何だっと思うかも知れねーけど、中途半端は嫌なんだ。今まで蘭に嘘ついたり、隠し事したり、それで蘭が傷ついてたのも知ってる。オメーが怒るのは当たり前前えだと思っし、いくらでも謝るよ。悪かった」

「新一…… 違っよ」

「蘭。最後まで聞いてくれ」

「違っ。わたし、怒ってなんかない。さっきはちょっと怒鳴っただけ、聞きたくないって言ったのはそんな理由じゃない……」

蘭はそこで言葉を切り、躊躇うように目を伏せた。

「怖い……」

それはかろうじて聞き取れる程の小さな呟きだった。

「オレの話を聞くのがか？」

コナンが問うと蘭の首は左右に二回程振られる。それからほんの少し音量を上げて蘭は言った。

「新一を信じられなくなるのが」

蘭は目を逸らし、体をコナンと反対側に向かせた。コナンは息を呑んで黙って続きを待つ。

「怖いし……嫌なの。大切な幼馴染みを……新一をこれ以上疑いたくない。何も聞かなければ、何も知らなければ、疑う必要なんてないでしょ」

「蘭……ごめん」

「もう、謝らないで。新一に何か事情があるのはわかってるから、わたしからはもう何も聞かないから、だから、お願い。何も言わないで」

何も言わないで。

皮肉も、憎しみも込められていない只の言葉。その筈なのに頭を強い棒で殴られたような気がする。今まで蘭が自分を待っていてくれることに感謝しながらも、何処か心の奥底で当たり前だと感じていた。当然だと思っていた。それが傲慢なのだとようやく判ったのは、ここまで蘭に突き放された後だった。

情けねえ。つくづく情けなくて笑っちまう。

だが、コナンの口から出たのは自嘲ではなく、後悔の念を込めた深いため息だった。

「わかった」

沈黙が訪れた後、コナンは声を下げて一言告げた。

「蘭が聞きたくないんだったら、オレは何にも言わねーよ」

「うん…」

蘭が泣きそうな顔で頷く。

「だけど」と、コナンは逆接を繋げた。蘭の視線が自分に向くの

を確認してから言葉が続けた。

「だけど、オレ待ってるから」

「え？」

「オメーがオレを待っててくれたように、オレもオメーが話聞িয়েくれるの待ってるから。ぜってえ諦めねーから」

コナンがにと笑う。意図的なその笑みに逞しい線が加わる。蘭が僅かに身じろぎした。小さな頃からずっと魅せられてきた幼馴染みの笑みに目眩を覚えたからだ。もっとも、体は小学生のままなのだから自分より遙か大人びて見えるのは単なる勘違いだろう。けれど、コナンの口元に浮かぶ笑みは懐かしさと優しさに溢れていて。

蘭はコナンに気付かれないように、そっと下唇を噛んだ。

懐かしさなんて、優しさなんて、とんでもない。ついさっき自分から突き放しておいて、何言ってるんだ。

「新一」

名前を呼んだ。自分でも理由が判らない。何も聞きたくないのは本当だけれど、もう少し話していたかった。何かを感じていたかった。

だが瞬間、シツと言うコナンの鋭い声が放たれた。口元に人差し指が一本添えられる。静かにと言う合図らしい。蘭は訳も判らず首を傾げたが、耳を澄ませると玄関の方で何やら物音がする。コナンもそれに気付いていたらしく、怖い顔をして玄関を睨み付けている。

「な、なに？ 誰か来たの？」

「みてーだな。でもなんで入って… あっ、鍵」

「し、閉めてないの？」

返事は、ない。どうやらそれが答えらしい。

「蘭、電気消せ」

コナンが小さく命じる。蘭は軽く頷き、スイッチを切り替えた。辺りが光を失う。

コナンは蘭を肌で感じながら息を潜めた。足音が近づいてくる。

「懐中電灯、持ってるか？」

背中の方で怯えて細かく呼吸をしているであろう蘭に尋ねる。

「持ってるわけじゃない。こんな事になるなんて思ってなかったし……」

コナンは、そうだよな、と軽く口端を上げて笑い、自分の手元に一冊の分厚い小説がある事を確認する。さっき慌てて本棚から取り出したものだ。大した武器にはならないが、目眩ましくらいにはなるだろう。それから顎を引いてドアを見据えた。

ひたひた、と足音は相変わらず近づく。

キィ、と音がして人影が二人入ってきた。

「誰だ！」

コナンは叫ぶと同時に本を人影に向かって思い切り投げつけた。「うわっ」と言う声と共に、どかっと言う鈍い音が聞こえる。どうやら一人に命中したらしい。瞬間。

「なにすんねんっ!」

人影が悲痛の叫びを上げながら小さく呻いた。聞き覚えのある関西弁に、え?と蘭が息を呑む。コナンも訳が判らず棒立ちになった。

「おい、コラ! いきなり本投げつけるてどういうことや!」

「ちょっと! 人様の家で怒鳴らんという。勝手に入ってきたアタシらが悪いんやから」

「鍵閉まってへんかったんやから、ええやんけ」

好き勝手に口論を始める二人組。蘭が啞然としながら、静かに電気を付けに行っただのにもお構い無しに、二人は無我夢中で口喧嘩を続ける。

見事なまでにシリアスな雰囲気をぶち壊してくれたこの不躰な訪問者達を、コナンは、いや蘭も、あんぐりと口を開けながら見ている他なかったのは言うまでもない。

## 十一章 分岐点

拳が静かに震えた。

視線を車窓の外へと走らせると、左から右へ物凄い速さで流れる深い緑色。思わず引き込まれそうになる。拳の震えた原因がこの景色にあるのはまず間違いない。だが、それは感動なんて言う樂觀論ではないのも明らかであろう。

怒り、だ。

誰にでも在るものだと思う。怒りとはかなり大切な感情であり、自分を制御する能力、即ち自制心なるものを養う上で大切な役割を果たす。ただ、それが時には殺意に変わると言う事を探偵たるもの熟知しておかないとならないわけである。

そして、今この瞬間にコナンの体内にふつつつと煮えたぎる怒りはその後者に属した。

「おー！ めっちゃ迫力あんな」

コナンと同じ様に窓の外を堪能していたある一人の男が唐突に叫んだ。

ふざけんな。

コナンは心の中で鋭く毒づき、隣に座る色黒の青年を自分に出来る最大限の眼力で睨み付ける。けれど、小学生の童顔では大して怖くもないのだろう。青年はコナンの視線を、あっけらかんと笑い飛ばす。

「なんや？ そんな顔して。感謝される覚えはあっても、恨まれる覚えはないで」

「ハハ…… 誰が恨まれる覚えはねえだつて？」

コナンの声がかどす黒い物を帯びる。

「どうしても分からねえってなら一つずつ挙げてやろうか？ なあ、服部」

服部と呼ばれた男はようやく自分に向けられた只ならぬ殺気に気が付いたのか、顔をひくつかせ、両手を軽く挙げた。いわゆる”降伏”の姿勢である。

だが、一度はけ口を見つけた怒りはそう簡単には大人しくならぬものだ。コナンはそれを無視して話を続ける。

「一つ目はな、服部。昨日オメーが勝手にオレの家に入って来やがった事だよ」

「あ、ああ」

「オメーのせいで蘭との会話が中途半端になっちまったじゃねーか」

コナンは不機嫌を少しの躊躇いもなく顔に表す。

「それは何度も謝ってるやろ」

「謝って済む問題じゃねーんだよ！」

大して悪びれた様子のない平次にコナンは声を上げる。

「大体何でオレが工藤邸あそしにいるって分かったんだ」

睨み付ける目はそのまま、けれど口調の角は少し取って平次に問う。

「あのちっこい姉ちゃんに聞いたんや」

「は？ 誰だよ、それ」

「ほら、あの阿笠うちゅーじいさんの家に住んどる……」

「灰原？」

「せや！ そいつや」

コナンが眉間に皺を寄せる。

「なんで博士んちに？」

「東京着いてすぐに探偵事務所に行ったんやけど、誰も居らんくてな。お前らの行き先知ってる人探してたんや。それであの家に行ったら、あの娘が出てきた」

「アイツ、何て？」

「なんや、質問攻めか？」

「いいから答えるよ」

「さあね、隣の仰々しい家でも探してみたら？」 やって

けつたいな娘やな、と平次は付け足し、ふわりと欠伸をした。コナンは口元に手を当てて考える。

アイツ、見てたのか。

思えば、灰原とは不自然な別れ方をしたままだ。あの時は蘭が行方不明になったと聞いて無我夢中で博士の家を飛び出したから仕方がない。そう言えばあの”ごめんなさい”の意味もきちんと聞いていなかった。其ればかりでなく、最近の灰原は少しおかしい。コナンに未完成の解毒剤を騙してまで飲ませるなんて彼女らしかぬ行為である。

なにかを隠してる……？

「工藤？」

名前を呼ばれて思考が断ち切れた。我に返る。

「また考え事か？ そんなに何でもかんでも背負い込むと潰れてまうで」

何て事無い暢気な口調ではあったけれど、胸にすつと落ちてきた。軽く頷く。

「そうだな」

「そうや。只でさえ今のお前には考えんとアカン事が」

「じゃ、二つ目」

コナンは平次の言葉をさらりと遮り、顔の前で指を二本立てた。

「まだ言っつか！」

「なんか文句あんのかよ」

ぎろり。相応しいかは別として、その擬態語が一番的を射ていると思う。平次に注がれた視線は厳しく険しい。

「いや……」と平次は思わず身じろぎする。

「どこどこだと思ってる？」

「は？」

「だから、オレ達がいるこの場所どこだと思ってるんだ」

「どっつて……」

朝焼けの奥に隣宅が見えた。哀は静かに高く聳え立つそれを見詰める。

「哀君？」

何を見ているんじゃないや、と博士が歩み寄って来る。博士は、哀の視線の先に気が付くと顔を綻ばせた。

「新一君、か」

哀は否定も肯定もせず、ただ黙って口元を引き締めた。朝日が差し込む。信じられないくらい眩しい。けれど、目は閉じない。暗闇が、怖いから。

「昨日は驚いたのう」

「本当に」

「蘭君が見つかった良かった」

そうね、と軽く相槌を打つ。

昨晚、帰って来た時の博士は酷い状況だった。額からは汗が噴き出し、白衣は乱れて中のシャツが丸見え。必死に走り回って彼女を探したのだと外見で察した。

当然と言えば当然だ。博士にとって彼女は孫同然の存在なのだから。それならば、私はどうなのだろう。

ねえ、博士。私が突然居なくなったらあなたはどうするの。探し回る？疲れて立てなくなるまで走るの？そんなの、無意味よ。全て無意味だわ。

ばかり。博士と目が合う。訳の分からない気恥ずかしさが哀にそっぽを向かせた。

「それにしても、まさか彼が来るとは。そう言えば君は会ったんじゃないかな」

「………忘れたわよ。そんなこと」

博士は優しく笑って哀の隣に立つ。

探偵事務所に誰も居てへんねんけど。アンタ、何処に居るか

分かるか？

昨日、服部平次に唐突に聞かれた内容だ。はっきり言って彼とはあまり面識がない。大阪府警本部長の一人息子で工藤新一に並ぶ探偵である事以外は殆ど知らされていない。故に答えて良いものか迷った。けれど、彼らの為に自分に来ることはもう残されていない。そう思い直し、居場所を教えた。それに。

それに、私には他にやるべきことが在る。それを全うしなければ。

「工藤君達は今何してるのかしらね」

哀がぼつりと呟く。

「新一君？ああ、きっと今頃は新幹線の中じゃろつな」

「え？」

「ん、何も聞いてないのか？」

何も、というふうに首横に振る。博士がにこりと唇に緩い弧を描く。

「旅行じゃよ」

「りょこつ？」

まさかそんな言葉が飛び出てくるとは思ってもみなかった。

何やってるのよ。もう彼女とは話がついたの？こんな時に遊びに行くなんて何考えてるの。

哀の表情が突然険しくなった事に気が付いた博士は慌てて説明を付け足す。

「ほれ、今は夏休みじゃろう？それで服部君が無理矢理新一を引っ張って行ったらしい。それどころじゃないのにつて新一から愚痴の電話を今朝もらったのう」

「ふうん」

「哀君……？」

「なに？」

「何がおかしいんじゃない？」

「は？」

「さっきまで顔をしかめとったのに、今は笑つとるぞ」

笑ってる？私が？

掌を頬に持つていく。確かに口元がやや上につり上がっていた。

哀の肩が小刻みに震える。俯いた口から笑い声が漏れた。だが、それも一瞬で終止符を打ち、沈黙が訪れる。

なるほどね。なかなか仕事がいややすくなったわ。まだ神に見捨てられてはいなかった、か。

わざと音を立ててスカートの埃を振り払った。

心配じゃ。

それは、博士の口から零れた小さな呟きだった。哀が首を傾げる。

「なにが？ 工藤君の事？ 彼なら大丈夫よ。きつと気まずい旅行を楽しんでるわ」

「君の事じゃよ、哀君」

「私？」

「危ない事しとらんか。わしらに何か隠し事をしとらんか」

「何よ、それ」

「嫌な予感がする。何か悪いことが起きる気がしてならないんじゃ」

博士が小さく息をつく。

「彼女に工藤君の正体がバレたのよ。もう充分悪いことが起きたじゃない」

「いや、それだけじゃなくて……」

「いいえ。それだけ、よ。もう何も無いわ。安心して、博士」

哀は博士の肩に優しく手を置き、微笑んだ。つられて博士もおおずおずと笑い返す。博士は

「そうだな。わしの思い過ぎじゃ」と一人で納得したように苦笑すると、朝食の用意を言うと行って哀に背を向けた。

博士の出て行った後、哀は目を瞑り深く息をつく。大丈夫。哀は小さく呟いた。

「大丈夫。何も問題ない。博士にも、工藤君にも、誰にももう迷惑はかけない」

いつまでも黙ってただ守りに入っているわけにはいかないのだ。覚醒せねば。その想いだけが哀を突き動かしていた。

哀は静かに研究室へと歩く。

パソコンの起動音が冷たい部屋に響いた。

## 十一章 分岐点（後書き）

この度後書きという欄を活用させていただいて今後の指針について話させて頂きたいと思えます。もちろん詳しいストーリー展開を明かすことはないのご安心下さい。まず、このお話は二部に渡ってお送りする予定です。一部はご存知の通り「蘭が新一の正体に気付いてしまう」。二部も大まかに話は決まっていますが今はまだ秘密です。ごめんなさい。今は丁度この二つが同時進行している状態なのでややこしくなっています。わざわざ言わなくてもとは思ったんですがこれを知った上の方が読みやすいかと思ひまして。駄文で読みにくいかとは思いますが、長い目で見ていただけると嬉しいです。日向ひすい

## 十二章 後悔とその先に

「ごめんな、蘭ちゃん！」

目の高さで掌をぱしんと合わせて拝むような姿勢で和葉が蘭に謝った。

前の座席でさっきからコナンと話し込んでいる平次を一度睨んでから和葉は続ける。

「平次のアホが急に旅行の事言い出すから、事前に連絡出来ひんかったん」

迷惑やったよね。心配そうに上目遣いで話す和葉。が、反して内心は欣快に堪えない様子だ。尻尾を振る子犬の様に顔が生き生きとしている。

やはり平次や蘭と遊びに行けるのがどうしようもなく嬉しいのだろう。彼女自身それを申し訳なく思っているのか、複雑な表情を浮かべている。

そんな和葉の言葉に蘭は慌てて頭を振った。

「そんな事、ないよ。ちょっと驚いたけど和葉ちゃんに会えて嬉しかったし」

正直、蘭の驚き様はちよつとどころではない。昨日など和葉と平次の声に急かされながら、大きな鞆へと数日分の日用品を詰め込む

自分の行動に大きな疑問を幾度となく抱いたものだ。

急な展開に頭がついていかず、意識がはつきりしないまま、気が付いたらこの新幹線へと飛び乗っていた。と、言うより乗らされていた。昨日からの経緯を簡潔に示すと、この様になる。

しかし、戸惑ったと言っても、後者に述べた事もまた事実。東京と大阪と言う距離のせいではなかなか会うことが出来ない親友の顔が見れたのは願ってもいない事だ。

それに。

「それに、アイツと居ても何話して良いのか分かんないし……」

和葉と久し振りに会えて気が緩んでしまったのか。はたまた、胸に想いが溜まりすぎて思わず本音が出たのか。言葉がほろりと零れた。

発した瞬間、蘭の顔は露骨にしまったという表情に変化した。案の定和葉は、えっ、と好奇心やら何やらで顔を輝かせる。

「もしかして、帰って来たん!？」

和葉がずいっと蘭に迫った。蘭は勢いに押されるように後ろへと仰け反る。

「だ、誰が？」

「もう。惚けたってアカンよ」

につこりと和葉が笑う。決まってるやろ、とその顔が物語っていた。

「帰ってきて……ないよ」

少し躊躇いながら答える。その口元がきつく結ばれた。和葉の表情は期待の輝きを無くし、代わりに困惑を浮かべる。

「新一の事、だよな。帰ってきてない」

蘭は動揺を悟られないように、当然だと断定的な口調で言った。

「ホンマに？」

「うん」

静かに語る蘭の横顔はどきりとする程綺麗で、寂しげで、悲しそうで。事情をよく知らない和葉は何も言えなくなり、そうなんやと一言呟いただけでシートにもたれ掛かるしかなかった。

沈黙。蘭はふっと一息つくと、不自然な微笑を顔に貼り付けて和葉に向かい合う。

「聞かないんだね」

「何を？」

「アイツって誰、とか……」

「聞かへんよ」

迷わずそう答えた和葉は視線を宙に泳がせた。

「なんで？ 気にならないの」

「そら、めつちゃ気になってる」

「じゃあ、なんで？」

「そやかて蘭ちゃんその人のこと聞いて欲しないんやろ？」

「え？」

「さっきの蘭ちゃん、めつちゃ悲しそうな顔すんねんもん。触れな  
いでつて顔に書いてあつたし。せつかく久し振りに会つたのに、そ  
んなん嫌や。せやから、蘭ちゃんが言いたないんやつたらアタシは  
何にも聞かんよ」

「和葉ちゃん……」

和葉の思いやりにも、胸がいっぱいになった。目の奥がほんのりと  
熱くなる。それなのに、なぜか胸の一番深いところは冷めていて。  
蘭は込み上げる自分でもよく分からない感情を抑え込んで、小さい  
声で、ありがとうと言った。

ありがとう。それから、ごめんね。和葉ちゃんは明るくて、優し  
くて、すごく良い子で……そういう周りの人の眩しい光と反対側に  
浮き上がる自分の影が最近すごく、辛い。

新一の事をなかなか受け入れられない自分の弱さ。脆さ。

コナン君は新一なの？

確かに、何度もそうじゃないかと疑った。確かめようとしたこと  
もある。でも、それは「コナン君が新一だったら」という単なる願  
望の裏返しでしかなくて。

なぜ優しい言葉をかけてあげられないのだろう。お帰りなさい、  
ずっと待ってたよ。なぜその一言が出て来ない。偽ることを止め、

激しい葛藤の末に正体をさらけ出してくれた彼の誠意に、どうしても応えられないのか。

好きなのに、大切なのに、どうしても受け止められない。昨日から会話はもちろん、目を合わす事すら出来ない。

胸が焦げる程に待ち望んでいた幼馴染みとの再会の筈なのに、すぐ近くに居ると分かったのに、今の方がずっとずっと新一が遠い。それはわたしが拒んだから。

こんなんじゃないダメだって分かっているのに。なぜ、なぜ、なぜ……

蘭の思考が負の方向に流れているのは、表情を見れば誰の目からも明らかで。見かねた和葉は重い空気を断ち切るように、跳ねるような声で言った。

「なあ、蘭ちゃん。お腹空かへん？」

につこりと眩しい程の笑顔を向ける和葉に、一瞬遅れてそうだねと微笑み返す。そんな蘭の様子に安心したのか和葉は整った口元になだらかな弧を描いた。

がさごそビニール袋を漁る和葉を横目に、蘭はごめんねともう一度心の内で謝った。

### 十三章 縮まらぬ距離（前書き）

お久し振りです。日向です。ここ数ヶ月、家庭の事情（詳細はあとがきに変えさせて頂きます）により更新が滞ってしまいました。本当に申し訳ありませんでした。今まで待っていて下さった読者の皆様、心の底から感謝申し上げます。ありがとうございました。

### 十三章 縮まらぬ距離

新幹線の終着駅から電車とバスを乗り継いで、はや二時間。都会に比べて、ここは気温が低い。日本有数の避暑地として知られているだけあって、夏の匂いを引き立てる心地の良い風が絶え間なく吹き渡っていた。見渡す限りの深い緑色は素朴な中にもどこか雄大で、そんな自然の中に聳える一軒のペンションの中に四人は立っていた。

天井は高く、吹き抜けになっている。壁にかかる西洋騎士が描かれた肖像画。中央にある螺旋階段が趣のある洋風な造りを一層際立てていた。単純なものではあるがシャンデリアもある。

「ここが、平次が知り合いの人に貸してもらったうちゅーペンション？」

室内を行ったり来たりして見回していた和葉がくるりと振り返って平次に聞いた。

平次が、そうやと答えると、和葉は「わあ、すごいな」と感嘆の声をもらった。平次も満足そうに頷く。

「どや？ 気に入ったか」

「うん。広いしキレイやしめっちゃ気に入った。アタシてつきりオンボロ屋敷で思ってたもん」

屈託なく笑ってそう言った和葉に、平次が怪訝そうに目を細める。その様子に気付いて、和葉は肩をすくめた。

「たぶん蘭ちゃん達はあんなところに行ってもおもんじゃないて、平次が言うてたから」

「え？」

和葉の言葉に今度はコナンが反応した。コナンは眉をひそめて、平次と視線を合わせようとす。平次はばつが悪そうに口の端をゆるりと持ち上げた。

「そういう意味ちゃうんやけどな」

平次が肩をすくめてコナンと蘭を交互に見る。蘭がかすかに身じろぎしたのを、コナンは背中を感じ取っていた。

振り返って蘭の顔を伺う。一瞬かみあった二人の視線。だが、それは蘭が横に視線を流した事で、すぐに離れてしまった。

平次が軽い口調を持ち直して言う。

「ま、とにかく部屋に荷物でも置こうや。オレらは大阪出てからほとんど休みなしでヘトヘトやし、ボウズらもいきなりこんな高原地に連れてこられて立ちっぱなしはしんどいやろ」

「せやね」

和葉が、静かに同意する。

「部屋はどうしよか？ 二部屋しかないんやろ？」

「いや。狭くてもええんやったら、二部屋あんで」

「そう。どうする？ コナン君と蘭ちゃんは同じ部屋の方が」

「別々の部屋でいいよ」

和葉の言葉が遮られる。今まで俯いていた蘭の視線が和葉に注がれる。蘭の瞳を見た瞬間、和葉はぎくりと体を凍らせた。

「コナン君は、わたしと一緒にじゃなくても困らないよ。服部君とも久しぶりに喋りたいと思うし、ね」

ね、のところで蘭はコナンを見る。目の端で、コナンが戸惑ったように体を震わせたのが分かった。

蘭のその言葉は、確実にコナンに向けられていたはず。それはわかってる。だけど、蘭がどこかずっと遠いところを見ている気がして、和葉はまだ身震いした。

さっきの蘭ちゃん……壊れそうやった。

どこがというわけではない。ただ、そう思った。感じた。目の前にいる彼女が崩れていく様を見た気がする。

和葉は、おずおずと蘭の様子を伺った。彼女はこのペンションに到着してからさっきの言葉以外は何もを発していない。何か考え込んでいるように俯いていて、時折小さく息を吐き出すだけだ。

彼女がそんな様子では、居心地も悪いのだろう。新幹線の中では蘭を安心させたくて「何も聞かない」という態度をとったけれど、やはりふつふつと湧き出てくる好奇心は否めない。

どうしたん？ 何でも言うてくれて、ええんよ。アタシが全部聞いてあげる。

喉元まで出かかった言葉を幾度も呑み込んだ。「聞いてあげる」なんて傲慢な態度は取りたくなかった。虫唾が走る。

それでも、そつとしておくとしたのだから。  
だから和葉は、後ろの蘭を気にしつつも笑顔を絶やさない。

「ほな、平次とコナン君で一部屋ついたらええね。蘭ちゃんはアタシと同室、な」

部屋は広間とは違い、さほど装飾は施されていなかった。あるのは二つのベットと小さな机と、ベッドのみ。机の上には一本だけ古い万年筆が置いてあった。

「ずいぶんと質素な部屋なんだな」

コナンが部屋を見回しながら言う。

「ああ。大広間に金注ぎ込んだから、部屋まで整える余裕あらへんかったんやて。ほんまは金のベットにしたかったらしいけどな。実際はこんなもんや」

平次はそう言って一つのベットにどかっと座った。きしんで、スプリングが派手に音を立てた。

「知り合いとか言ってたな」

コナンが大きなエナメル製の鞆を床に置く。大きいとは言っても隣に乱雑に置かれた平次のもの比べてみれば、それは二周りくらい小さかった。

こんな時だけは子供服の軽量さに感謝をする。

「オレがちつこい頃から世話になってるオツチャンや。男のくせに城に住むのが夢とかいうけつたいなヤツでな。ある意味、金の猛者やな」

「その人、彼女とは知り合いじゃねーのかよ」

彼女？ と平次が首を小さく捻る。それから、思い出したように手をポンと打って顔をしかめた。

「和葉か。ちやうわ。なんでいつもアイツが出てくんねん」

平次がわざとらしくため息をつき、手をひらひらと振った。そして、急に表情を引き締める。

「それで？」と唸るように平次は言った。

「なんだよ」

「アホ。とぼけんな。どうなつとんのか詳しく教えてもらおか。新幹線じゃ後ろに姉ちゃん和葉が座つとつて、あんまり深く聞けへんかったからな」

コナンは平次の顔をじとつと睨み、しばらく押し黙る。突然訪れた沈黙が、平次を少し困惑させた。

「なんや？」と首を傾げる平次に、コナンは、大きく息を吐き出した。

「和葉ちゃんって良い子だよな」

「は？」

「オメーにはもったいねえよな」

「……」

「愛想、つかされねーようにしろよ」

静かながらも、荒々しい感情の渦が平次へと向けられる。普段なら顔をしかめる平次も、コナンの言葉が何を意味するのか分かってか、このときばかりは「せや、な」と小さく頷く。

「愛想つかされたんか」

真面目な顔で言う平次に、コナンは一瞬目を見開いて、それから弱弱しい笑みを浮かべた。その笑みはあまりにも乾ききっていて、尋ねた平次もぎくりと身じろぎするほどであった。

「オメーなあ、もう少し気遣えよ。ったく。ほんつとに彼女の足元にもおよばねえな」

「アホか。オレはふざけてるんとちゃう。きちんと、答える。何があつた？　なんでそんなに追い詰められてる？　ほんまは姉ちゃんに何て言われたんや？」

「……」

さつきまでのふざけた調子はどこに行ったのか、突然詰問を始める平次にコナンは小さく息をつく。

分かっていた。目の前の西の名探偵がなぜこんなところに自分と蘭をつれてきたのか。なぜそれが今だったのか。

それは彼なりの気遣いと、じっくり話し合えという示唆。先ほどまでの無駄とも思えるようなお調子者ぶりもそういう意味があったことだ。

すべて分かっている。けれど。

どうしようもなく、苛立つ。

平次の思いやり。それから、それに感謝もせず放っておいてくれと心の奥で懇願する自分自身にも。

何があった、か。

そんな一口に説明できるものならば、そう悩みはしなかったのだろ。まあ、もともと自分でまいた種なのだけれど。

コナンは一度、沈黙し、それから顔をあげて言った。

「蘭に拒絶された」

### 十三章 縮まらぬ距離（後書き）

前書きにも書きました通り、少し私生活でトラブルがありました。小さな事だったのですが、なかなか小説を書く時間がとれなくて、今まで更新が遅れてしまいました。本当に申し訳ありません……。もうトラブルの方も収まったのでこれからはもっとこまめに更新出来ると思います。ダメ作者ですみません……。また読んでいただけると嬉しいです。日向ひすい

## 十四章 思想

「拒絶？」

わけがわからないというように首を振る平次に、コナンは肩をすくめる。

「昨日、蘭に正体をバラした。オメーらが来る少し前だ」

「……それで？」

「アイツ、オレと目を合わせようとしなないんだ。昨日から。気づいてたろ？」

「あ、ああ……」

「なにより、言われたんだよ。昨日」

「何を、や？」

「もう何も聞きたくない……ってさ」

平次は思わず息を飲み込んだ。

「甘いよな、オレも。悪いと思いつながら、心のどっかで、蘭なら

分かってくれると思ってた。許してくれると思ってた。最低だな」

疲れたように笑うコナンは脆く、痛々しく。

ああ、こいつは本当にあの自信満々だった工藤新一なんだろうか。そう思わせるほどに、神経が蝕まれているのが伺える。

平次は拳を固く結び、それに比例させるように口も閉ざす。

別荘（別荘）に來れば、すべて解決すると思った。都会よりも静かな環境で落ち着いて話し合えば二人はすぐに元通りになれると思っていた。だからコナンから電話をもらって以来、この日の為に着々と準備を進めたのだ。

だが、自分は思っていたよりも軽率な行いをしてしまったのかもしれない。なんとかできると思ったのは、ひどく自信過剰だったことを思い知らされた。

思い知らされたのに。

それでもまだ、ここで……この別荘ですべては解決すると感じている自分はおかしいのだろうか。

探偵の勘というべきものが、何かを伝えてくる。証拠がないから謎解きもできない。そもそも、まだ何が起こるかもわからない。全く。探偵らしかぬ状況だ。

けれど、あの二人なら大丈夫だと思う。かたい絆で結ばれているあの幼馴染ならば、この試練を乗り越えられると思う。

もしくは、そう信じていたい。

その時、コナンの小さな身体が一瞬揺らいた気がした。心なしか目の下にクマが見受けられる。また、少し痩せたようにも感じた。まさか……。

「工藤……」

「ん？」

「寝てへんのか、お前」

平次がたずねると、コナンはびくつと体を震わせた。

「……西の名探偵つてだけのことはあるな。蘭でさえ気づかなかつたのに」

「いつからや？」

「さあな。そんなの忘れたよ」

「大体でええから答えろ」

「一週間くらい前から」

平次はぎよつとしたような表情を見せた。そして、椅子に頬杖をついて座っていたコナンを軽々しく抱きかかええた。

「なっ!?!」

コナンは慌てふためき、平次の腕から逃れようと身体をよじる。だが当然小学生の力で高校生に勝てるわけもない。

それでもなお抵抗するコナンに、平次から一喝が飛ぶ。

「アホ! 暴れんな!」

「アホはどつちだっ! ふざけんなよ。降ろせ!」

コナンの必死の叫びも空しく、平次はコナンを抱き締めたままべ

ツトの脇まで運んだ。そしてようやくコナンを解放して、ベッドに優しく寝かしつける。

「……なんなんだよ」

平次に睨みを利かせながらコナンは訊いた。

「とりあえず、寝てろ」

「はあ？ わざわざこんなところまで来てお眠りかよ」

「そつちや」

「冗談だろ」

身をよじって無理やり上半身だけ起き上がるうとするコナンを平次は抑えつける。

しばらく無言の戦闘は続いたが、やがて平次のしつこさにコナンが折れ、静かにベッドに寝そべった。

「ったく。わあつたよ……」

「最初からそう大人ししとけばええんや。どうせ起きてても姉ちゃんに氣イ遣って部屋から出えへんつもりやったんやろ」

「……」

「ほら、早寝ろ。飯の時間になったら起こしに来たるから」

「食欲ない」

「ええから」

そうコナンをしかりつけ、踵を返して静かに部屋を立ち去ろうとする平次。

その後ろ姿にコナンはゆっくり語りかける。

「ありがとな。服部」

小さな呼びかけに返事が返ってくることはなかった。

気がつけば、空はもう茜色で。頬を撫でる風を冷たいと感じるのは単にここが高原だからだろうか。それとももう秋が近づいているということだろうか。

あと二週間と少しで新学期が始まる。宿題はもうほとんど残っていない。

それさえもが自分とは関係のない次元の話に聞こえる。またあの日々に戻るのだろうか。友達と笑い合って、ふざけて時に怒って。そして、心配して、いつか会える日を待って、待ち続けて……。

無理だよ。と身体が返事をした。

わたしにはできない。なんにもなかったかのようにして過ごすにはもう疲れてしまった。今では笑うことだって出来ないのに。

知らないほうが、楽だったのかな。ねえ……

今では口に出すことさえ躊躇われる名前。すこし前まではすごく愛しくて、大切にしていたのに。

怒り……違う。憎しみ、哀れみ、悲しみ。すべて違う。

「ただ、かつて愛しく思っていた相手に、今は負の想いを抱えていることだけは真実だった。」

「こんな感情、捨ててしまいたい。」

新幹線に乗ってここまで来るまでずっと願っていた。でも、自分の中に生まれたこの醜い感情は一旦曝け出されてしまうと、もうどうしようもなく。

「蘭ちゃん!!」

和葉に呼ばれ、はっと我に返る。意識が戻ってきたと同時に鋭い痛みを指先に感じた。

「痛っ……」

「大丈夫？ ちょっと見せて!」

何が起きたのかを自分で理解する前に、和葉に手を持っていかれた。和葉は素早く傷の具合を確かめると、「救急箱取ってくる」と言って蘭に背を向けた。

損傷したのは中指の第一関節の少し上。包丁で切ってしまったらしく、ザックリと縦にわれ、そこからドクドク血が流れ出している。蘭は呆然と自分の血を見つめていた。

そんなに間を空けずに、和葉は大きな救急箱を抱えて帰ってきた。蘭の手をとり、蛇口で傷口を洗う。テキパキと、黙々と処置をする。たまに「大丈夫?」とか「痛ない?」とか、蘭の様子を伺った。

自分の手にせつせと包帯を巻いている和葉を、蘭は、泣きそうになりながら見つめる。

「痛いというよりも恥ずかしい。恥ずかしいというよりも情けない。なんで、こうなっちゃうんだろう。」

「いろんな人に迷惑かけて、心配させて。本当に嫌になる。」

「はい、完了」

結局和葉の処置は五分もかからなかった。その手際によさには脱帽するばかりだ。

「ちょっと大袈裟やったかな」

そう言って、ぺろっと茶目つ気たつぶりに舌を出す。蘭を元気付けようとしているのがよく分かった。

「ごめんね……」

「大丈夫。もうご飯ほとんど出来てるもん。後はアタシ一人でやるし。……まったく。せつかくこんな良いとこに来ても家事やっとなら意味ないやんな。たまには平次達に作ってもらいたいわ。な、蘭ちゃん」

「え？ うん…… いや、そうじゃなくて」

「アタシらこそごめんな」

「え？」

「蘭ちゃんしんどいのにこんなとこ連れて来てしてもて。なんや、コナン君も元気ないし。ほんま、不謹慎やったと思う」

「そつ、そんなこと」

「でも。平次、たぶん二人が元気ないの知ってたんやと思う。せ

やから、何か考えがあつて蘭ちゃんたちを連れてきたんやと思うんよ。しょーもない思いつきかも知れしれんけど、許したつてくれる？」

和葉の言わんとすることが伝わってきて、久しぶりに温かな気持ちになることが出来た。

いま、この瞬間は幼馴染に対する揺らぎも薄らぎ、目の前にいるこの少女が愛おしいと思った。

自分でもまだこんな感情があつたことに安らぎを感じる。

「もちろんよ」

蘭は微笑んだ。

「わたしね、こんな素敵なところに連れて来てもらえて服部君に感謝してる。ほんとだよ」

「……………うん」

「それに、服部君、和葉ちゃんが言ったみたいに、わたし達を元気付けるためにこの別荘に案内してくれたんだと思うの。コナン君と連絡とつてみたいだか」

そこで蘭は言葉をつくんだ。

「ちょっと、待って。コナン君と服部君」

「そもそもなんなので二人はあんなにも仲が良いの。だって、そんなのおかしいじゃない。事件になるといつも二人でコソコソ話してた。」

普通の小学生と高校生があんな視線を交わすわけがない。それに、あの視線って、見覚えがある。あれは確か文化祭で殺人事件が起き

たとき。あのときは服部君が来てて、それから……  
もしかして……。

「蘭ちゃん？ どないしたん？」

思わず駆け出そうとする蘭を和葉は呼び止めた。蘭は振り向き、言葉につまりながら和葉を見た。

「ご、ごめんね。和葉ちゃん。わたし、ちょっと行ってくる」

説明も不十分に蘭は部屋を急いで出て行く。

確かめなくちゃ。

この仮定を決定付けたところで、何かが変わるかは分からない。もしかしたら何も変わらないかもしれない。その可能性のほうが高いだろう。

だけど、何もしないでただ呆然としてさっきのような失態を繰り返すのだけは嫌だった。

確かめなくちゃ。わたしの知らない”彼”を……。

蘭は無我夢中で別荘内を動き回った。そして、テラスに出てみたとき、目標の人物を見つけた。服部平次を。

平次は蘭に気づくと、それまで耳につけていた携帯電話を離し、パタツと二つに折った。

「いいの？ 話し中だったんじゃない？」

躊躇いがちに蘭は尋ねる。

「いや……もう切れとったから。それより、なんや？」

平次は少し警戒するような視線を蘭に向けた。蘭は俯き気味だっ

た顔をはつきりと上げ、そしてすっと息を吸った。

「服部君。訊きたいことがあるの」

## 十五章 絡み合うのは

コナンを半ば無理矢理寝かしつけた後、平次は頭を冷やすためにテラスへと足を運んだ。

短髪を揺らす風が心地良い。都心とは違う自然の空気を吸い込み、やや強い風にされるがままになる。

何やってんやろ。オレ……

平次は独りでに苦笑を零す。そして、出ていきざまのコナンの言葉を思い出してほくそ笑んだ。

” ありがとな。 服部 ”

「ほんま、どういたしましてやで」

その時、平次の胸ポケットの中で携帯電話が震えた。見たことのない番号がディスプレイに表示される。

夏休みなどの期間休業中に平次に電話をかけてくるのは大抵和葉か、部の仲間か、刑事達と決まっている。新一と電話越しに話をすることもあったが、そのほとんどは平次からかけていたものだった。

平次は怪訝に思いながら、通話ボタンを押し、携帯電話を耳へと持っていた。

「もしもし」

「……」

返事がない。相手の無作法に多少苛ついて、更に電話の向こうに呼びかける。

「もしもし？」

「こんにちは」

その声を聞いて、今度は平次が言葉を失う。

声の主は一瞬にして分かった。一度聞いたら忘れられない、その年齢にそぐわぬ落ち着きを払った美声。

だが、彼女がなぜ自分に連絡を？

「いえ。もう、こんばんはかしら」

くすりと笑ったような声が聞こえた。平次は困惑しながらも懸命に平静を装う。少し咳払いをして、心臓を落ち着けた。

予想外の出来事などいつも体験しているのはずなのに、足元がぐらつく。

ため息をつく。

けれど、平次がここまで戸惑うほどに、この少女からの電話は危険な香りを漂わせていたのだ。

「何の用や？」

「そんなに警戒しないで。だから、探偵って嫌なのよ」

「工藤か？」

「違うわ。あなたに訊きたいことがあるの」

静かに少女は言った。平次はごくりと唾を飲み下し、身構える。

「なんや」

「お願いだから警戒しないで。私と話していること、彼に悟られなようにして。いい？ ……それで、滞在はいつまで？」

「は？」

「だから、いつまで東京を離れてるの」

素っ気なく訊かれた。なんだ、そんな事か。体全身から力が抜けていくのを平次は感じた。だが、足元がぐらつく感覚はまだ続いていた。

突然、受話器の奥で物音がした。扉が開いた音だ。続いて、なんと言ったのかは分からなかったが、確かに男の声がした。

途端に少女の慌てた様子が伝わってくる。

「早く！」

「え」

「早く言って」

今まで冷静だった声が、突然噛みつくようなものに変化した。いきなりの豹変に戸惑い、平次は口ごもる。自分と話しているのが見つかったらまずいのか？

「……明後日までや」

「明後日、ね。ありがとう。それじゃ」

「あつ……ちよつ、ちよー待て！」

「あなたには感謝してるのよ」

僅かに笑いを含んだ声に遮られる。平次は、はっと息をのみ、足を踏ん張った。

感謝？

「あなたが、工藤君を連れ出してくれたんだから」

「は？」

「ありがとう。本当に」

その言葉の意味を問う間もなく、もう通話は断たれていた。冷たい機械音だけが平次の耳に煩くこびりつく。切断されたと分かっている、耳から電話を離すことが出来ない。

なんやったんや……

平次は、ただ呆然と呟いた。

今のはただの少女の戯言だ。気にするに値しない。ならば、この締め付けられるほどの不安感は何なんなんだ。

そもそも自分は何故、少女から連絡が来たただけであんなにも動揺したのか。普段なら絶対にそんなことはない。

何かが、おかしい。引つ掛かる。今の電話の何かが……。

ふと、人の気配を感じて振り向いた。

薄暗闇の中に蘭が立っていた。平次を見上げたその表情は美しくも悲しげで。整った大きな瞳には、切迫した感情だけが浮かんでいる。

まだ自分の手が携帯を握っていたことに気づき、耳から離れた。

「いいの？ 話し中だったんじゃない？」

蘭は、ばつが悪そうに平次に訊いた。さっきの電話のこともあって、平次はなかなか緊張の姿勢を解けずにいた。「いや……もう切れとったから」と答えるだけに留める。

平次の様子を変だと思ったのか、蘭は不思議そうに首を捻った。

「まずい。」

何がまずいのか、平次自身よく分からなかったが、とにかく目の前の少女の神経をこれ以上すり減らすような行為だけはしないように努める。今、一番辛い状況にいるであろう彼女をこれ以上不安にさせる必要は皆無だ。

「それより、なんや？」

優しく聞くと、蘭は真剣な表情で軽くうなずいた。

「服部君に訊きたいことがあるの。」

あなたに訊きたいことがあるの。

さっきの言葉が思い出される。また胸がざわめく。いったい何だと言っのか。

平次は、「訊きたいことって？」と慎重に聞き返した。蘭はまた軽く頷いたが、その後少し沈黙した。そして、顎をくいとあげ平次と視線を絡ませた。

「コ……し、新一のことを教えて」

小さく、しかしはっきりとそう言った蘭の表情は崩れ、いまにも泣きそうなものになった。平次は一瞬ぼかんと口を開け、目をぱちくりさせる。

「……それは、アイツから聞かされたんやろ？」

そう言うと、蘭の身体はびくつと跳ね、興奮して顔は硬直した。

「やっぱり」と、突然叫んだかと思うと、立ち上り地面を大きく蹴った。

「ど、どないしてん……」

「やっぱり服部君、知ってたのね」

「せやから、何を」

「コナン君が新一だって……！」

そう訴える蘭を見て、平次はやっと状況を理解した。顔を引き締め、ああと頷く。

「知っつたで」

蘭はそれだけ聞くと、地面にへたり込んでしまった。慌てて平次が手を差し伸べたが、あまりの無力感にこっちまで引きずられそうになった。「大丈夫か」と平次が聞くと、蘭は小さく頷いた。

がくつと脱力したままで蘭は静かに囁く。

「いつから……なの？」

「ずいぶん前から」

「なんで、教えてくれなかったの」

「……」

「分かってる。服部君は優しいから、新一が自分で言うの待ってたんだよね。わたしも……もう少し、待ってればよかった……」

かける言葉がなくて、平次は押し黙った。蘭は、平次が眉をひそめているのに気がつくのと、はっと手を振った。

「ご、ごめん。わたし、こんなこと聞きたいんじゃないのに」

蘭は、首を横にやり、軽く目を瞑った。平次は、首を捻って蘭を見る。

「ほな、何を？」

「わたしの知らない……アイツのこと」

「工藤？」

「うん。わたしが、コナン君としてしか見ていなかった間の新一を教える欲しいの」

平次の表情は変わらなかった。一、二度瞬きを繰り返したただけだ

った。

なんと答えれば良いのか。平次は、ただ、それだけを考えていた。自分と工藤新一との間に面識が生まれたのは、彼が”江戸川コナン”へと幼児化した後。もちろん平次は、東の高校生探偵として注目を集めていた新一を常に気にかけていたのだが、あの時は表面上ばかりで彼の内面までは知らなかった。知る必要などないと思っていた。

ライバル。

そんな軽い言葉で表したくはないけれど、それ以外に二人の関係を上手く当てる術がない。そして、今ではそこに友情まで絡んできている。

いつの間に。そして、何故。

やはり、そこには互いに持つ幼馴染の存在は欠かすことは出来ないだろう。

同じ幼馴染を持つ者として、彼にとってそれが探偵として、人として、どれだけ支えになっているのか、痛いほど判る。

だからこそ、慎重に言葉を選らばなくては。

平次は大きく息を吸ってみる。花の香りが鼻腔に広がった。

「オレは、工藤新一でいたときのアイツを知らんけど、たぶん全然変わってへんで。工藤のヤツ、アンタのことばかりや」

「え？」

「気づかへんか？ 工藤は小さなってからも、ずっと見てた。ずっと傍におった。自分を犠牲にしても守り通そうとしてたんや。大切にしとった。アンタを」

蘭の目がみるみる広がっていく。

「アイツは何にも変わってへん。まあ、見た目は変わったけどな。でも、此処は姉ちゃんの知っとる工藤のまんまやで」

そう言つて、平次は自分の胸の辺りをとんと軽く叩いた。

「向き合つての、怖いんは分かる。けど、このままじゃ何にもならんのとちゃうか？ きちんと話さんことには何も解決せえへん。まだ、聞いてへんのやろ？ なんで工藤が小学生になつてしもたのかとか、なんで姉ちゃんに黙つとつたのかとか。聞いたつてくれや、アイツの口から。工藤は姉ちゃんに自分を偽るのを止めたんやで。今、逃げてんもつてんのは、アンタの方やと思つけど」

そこまで言つてから、しまったと思つた。

今言つたほとんどのことは自分が言つべきではなかつたかもしれぬ。変わつてないなんて何度も連呼すべきではなかつた。

言葉を選んでいたつもりなのに、いつの間にかいつもの謎解きモードになつていたようで、変に饒舌になつてしまつていた。前にもこんな失敗をした気がする。

身体は正直なもので、そう思つた途端に平次の口からは、あつという呟きがもれていた。

「ス、スマン。言い過ぎた。つい……な。オレが今、言つたこと、気にせんでええから」

平次がそう言つと、蘭はゆっくり首を横に振つた。

「ありがとう」

「はっ」

「ありがとう、服部君。なんだか……まだ、分からないけど……話、聞いてよかった」

「そうか？」

「うん」

蘭が、にっこりと微笑む。笑えるようになったのかと、おかしな安心感が全身に広がった。

平次もその笑みにつられて笑い返す。

「ほな、よかったわ」

そのままテラスを退散しようとしたが、ふと思い出して足を止める。

「お節介ついでにもう一つだけ言ってもええか？」

「うん。なに？」

「工藤、寝てへんみたいなんや。ここ一週間。知つとった？」

蘭は驚いたように口元を強張らせ、ぶんぶん首を横に振った。

「そうか。あつ、いや、アンタを責めてるんとちゃう。姉ちゃんの方が大変やったんやろうし。ほら、そんな顔すんな。せやからな、何が言いたいかつちゅーと、今アイツは一人で部屋に寝てる」

「寝てる？」

「せや。ま、それだけやから。オレ、行くな。冷えてきたし、和葉もそろそろ飯作り終わったやろ」

「あつ、うん」

「ほな、頑張つて」

最後にそう付け加えて、静かにテラスから出る。今まで風に当たっていたから、なくなるとなんだか少し物足りなさを感じる。

あのタイミングで頑張つては、ちよつとクサかったな……。

平次は一人、苦笑をこぼす。

我ながら粹な計らいをしたものだ。両手をあげ、胸を張る。

「しつかりせえよ、名探偵」

そう、小さく呟いて……。

ピッ。

「ただいま、哀君」

電話を切ったのと、博士が部屋に入ってきたのはほぼ同時だった。良かった。どうやら、電話をしていたことは気づかれていないみたいだ。

哀は、出来るだけ自然に博士におかえりを言った。博士は微笑んで、手に持っているビニル袋を誇らしげに掲げた。

「ほれ。すごいじゃろう。今日は、珍しい部品が手に入ったのう」

「よかったじゃない」

嬉しそうに話す博士に、哀も合わせて感心したような態度をとる。

「そうじゃ。歩きながら考えておったんじゃが、今から二人で」

「博士」

滑らかに話す博士を、哀は静かに遮った。

「博士。私、いまからちよつと研究室にこもるつもりなの。出来れば静かに作業したいんだけど」

博士は一瞬戸惑ったような表情になったが、すぐにいつもの笑顔を取り戻した。

「あ、ああ。分かった。じゃあ、コレは今度にしようかの」

「ええ。悪いわね」

哀は、本当に残念だわという表情を作りながら博士の前から立ち去り、研究室への階段を一段一段丁寧に下りた。

扉を開け、自分が入るとすぐにピシャリと閉じる。電話を取り上げ、名刺を見ながらダイヤルを押す。

研究室は防音になっているから、誰にも会話を聞かれる心配はない。

女は、ワンコールですぐに出た。けれど、相手の様子を伺うために、すぐには返事をしない。女は、さっきの相手とは違い、哀が返

事をしなくても怒鳴るようなことはしなかった。

おそらく、今は一人なのだろう。女の口元が擦れる音以外は聞こえない。

それが確認できてから、ようやく哀は口を開いた。

「お久しぶりです」

「そうね。あなたから連絡が来たのにはちょっとびっくりしたわ」

サプライズ。国籍が国外なだけある。とてもいい発音で女はそう言って、ふふふと笑った。

「それで？ 今日はどうしたのかしら。もしかして、私たちの要求、呑んでくれることにしたの？」

「まさか。それは前に断っているはずよ」

「そう言っと思ったわ」

女はまた笑った。そばで、氷と液体がぶつかる音がする。哀は、「お酒でも飲んでるの」とからかい半分に聞いてみた。だが、返ってきた返事は「ただの水よ」というそっけないものだった。

そう、分かった。早く本題に入らせて事ね。いいわ。

「あなたに電話したのは頼みたいことがあったから。もちろん、ギブアンドテイクは守る」

「あら、何をくれるのかしら」

好奇心を滲ませた声で問いかけられる。

食いついてきた。この糸は絶対に離さない。

「新しい情報を掴んだの。全部、あなたたちに売るわ」

## 十六章 贖罪の産物（前書き）

また前話から間が空いてしまいました。申し訳ありません。携帯電話が故障して執筆出来ない状況でした……。お詫び申し上げます。

## 十六章 贖罪の産物

まるで、幻の水の上を歩いているみたいだった。

立ち止まればずぶずぶと沈んでいく鉛のような身体。振り向けば、歩いてきた筈の道は真つ暗で、唯波紋が延々と広がってゆく。

直視しがたい現実。

見てみぬ振りをしてきた自分自身の逃避。

平次にストレートな言葉で突きつけられたそれは胸に深く突き刺さり、同時に蘭を瞑想に浸らせた。

コナンは寝ていない、と平次は言った。それも一週間も。

その事実を聞かされたとき、蘭はたまらなく不安に駆られた。自分のせいだと責任を感じたからではない。もちろん、新一を苦しめる不眠の原因が自分にあるということは判っている。罪悪感もあるけれど、それは単なる後付にすぎなかった。

あの時、蘭の中から湧き出た感情はただ、彼を労る純粋な気持ちのみだった。

自分で自分がわからない、なんて。頼まれもしないのに、嘲笑を一つ。

「これ以上信じられなくなるのが怖い」

コナンが正体を曝したときに自分は確かにそう言った。嘘ではない。この言葉は本物だ。いや、本物だった。

だから、前に進むことも、後ろに退くこともできずにいた。そして、しようとしていなかった。

けれど、本当にそれだけなのか。答えは否。

その理由に隠れているものを見落としていた。簡単なことを勝手に複雑化して、誤魔化して来た。

そんなことさえも、平次に教えてもらうまで気がつけなかったなんて。

このままでいいの？

幾度も自分自身に問いかける。

このまま、ずっと逃げているの？

目を背ける？

長年抱えてきた想いはそんなに簡単に捨てられるもの？

首が自然に横に触れた。そんなわけ、ない。それじゃ、一体……

一体、どうしたいの？

気がついたら、ある部屋の前に来ていた。

今アイツは一人で部屋に寝てる。

うかつにも平次の言葉を思い出してしまった瞬間、蘭は足元の幻の水が大きく波立ったのを感じた。

冷たいドアノブに手を伸ばしては、しまう。また、手を伸ばしては、しまう。繰り返しその動作を行った。

部屋に入ったところで、何を話せばいいのか。自分でコナンのことを拒んでしまったのだから、かける言葉は一つも浮かばない。

残された蘭は一人、またさっきの動作を繰り返す。だが、やがて諦めたように息を吐き出し、思い切ってドアを軽く叩いた。二回ほど、ゆっくりと確かめるようにノックをした。

心臓がばかみたいに早鐘を打つ。

突然、蘭はこの場から逃げ出してしまいたい衝動に駆られた。勝手に動こうとする足を必死に床に釘付けにして、相手が出てくるのを待つ。だが、なかなかコナンは出てこなかった。

寝ているのかも知れない。

そう思ってドアノブに手をかけた瞬間、扉が勢いよく開いた。はずみで蘭は数歩後ろに飛び退いた。

「もっと早く起こしに来いよ。服部」

下のほうに不機嫌顔で現れたコナンは、蘭の姿を捉えるなり激しく硬直した。

「らっ……蘭？」

戸惑いを隠そうともせずコナンは、信じられないといった口調で言う。

「……コナン君」

蘭はそう発したけれど、これは違うなと思い直して、

「新一」

震える声で一言呟いた。コナンは自分の本当の名前が呼ばれた瞬間、小さく身震いした。蘭は自分の頭の中が真っ白になっていくのを感じた。

「ど、どうしたんだよ」

「あの、えーと……しよ、食事」

「え？」

「食事が出来たって、呼びに来たの……。和葉ちゃんに頼まれて」

咄嗟に口を突いて出た嘘は我ながら笑ってしまっくらい貧相なも

のだった。もちろんコナンがそれに気づかなかった訳がない。

人の口調、顔色、瞳孔の開き方さえもを味方につけ、偽りを見抜く。的確に真実を貫く。それが秀でた探偵の証なのだから。

本当は何しに来た。

そう問われると思った。けれど、コナンは唯頷くばかりで。

「あ、ああ。分かった。すぐ支度するよ」

「うん……」

しどろもどろの会話とも言えないようなやりとりをして以来、二人は一言も言葉を発しようとはしなかった。

コナンは動揺しながらもベットを直したり、部屋に転がっている服などを片付け始める。蘭はその様子をしばらく見つめていた。

コナンの瞳がつつと横に流れ、蘭に注がれた。瞬間、彼はぎよつとしたように息を呑んだ。

「蘭……」

「えっ」

「その手」

少し上擦った声に驚いて、急いでコナンの視線を辿ると、行き着く先は包帯が巻かれた自分の指だった。

痛みなどとうに忘れていた。だが、血のついた包帯をよくよく見てみると今更ながらその下にある傷の深さにぞくりとなった。

「怪我したのか？」

「あ、なんでもないの。ちょっと包丁で切っただけで…… 和葉ちやんが手当てしてくれたし、ほんと大丈夫」

「ちょっと見せてみる」

「だっ、大丈夫だってば！」

「いいから」

「ちよっ……」

いそいそと背中に回そうとした蘭の手をコナンは無理やり取って、優しく硝子細工でも扱うかように指の調子を確認し出した。

「見るだけだから引っ叩いたりすんなよ」

「し、しないわよー！」

あの夜の事を言っているのだろう。思わぬ抱擁に思わず手を上げてしまった。あれだっけ別にわざとやったわけじゃない。あの時は混乱していたから……。

真剣なコナンの表情は、もう「新一」としか見ることは出来なくて。何故今まで気がつかなかったのかと疑問に思う。

いや、気づかなかった訳ではない。予感があった。唯、知らなかつただけだ。

知ると言うことは覚悟を伴うと、この一週間で学んだ。「江戸川コナン」の正体を知りたいと騒ぐばかりで、何の覚悟も出来ていなかった。真実を知ってしまったら、もう引き返せない。何も知らなかった頃の暢気な日常は戻ってこない。そんなことさえ判らないでいた。

自分の愚かさに笑いがこみ上げてくる。けれど、実際蘭の表情を崩したものは笑みでなく、涙だった。

蘭の意思に関係なく涙は止め処なく溢れて。嗚咽を堪えるのが精一杯だった。

ぽつりと一粒水滴が落ちる。

それを手の甲で受け止めたコナンは、驚いたように顔を上げる。

二人の視線が噛み合った。コナンはふと俯き、名残惜しそうに蘭の手を解放した。

「……悪い」

違う。謝る必要なんかない。もうこれ以上贖罪を求めてなどいないのに。

けれど、これ以上涙が落ちてこないように力を込めていた所為で言葉が出てこない。首を横に振るのがせめてもの返答だった。

「痛み、本当になんだな」

「うん」

「そっか」

「うん」

「良かった」

本当に安堵を滲ませたコナンの声に、また涙が出そうになる。蘭が唇を噛むその時間がしばらくの沈黙を運んで来た。

蘭は自分の気持ちを落ち着かせて、やや低めの声で問うた。

「新一は？」

「え？」

「眠れないんでしょう？」

コナンは、はっとしたように蘭の目を見つめた。

「服部に聞いたのか？」

「うん」

「ったく。蘭に言うなんて何考えてんだアイツ」

コナンはわざとらしく顔を顰める。蘭はそれを無視して続けた。

「大丈夫なの？ 今は？ ちょっと寝れた？」

「眠れたよ」

「どのくらい？」

「たくさん」

「ウン」

「嘘じゃねえって」

「嘘でしょ。全然寝てないんでしょう？ 顔見れば、分かるよ……」

語尾を小さくし、俯く蘭にコナンは優しく声をかける。

「心配すんな。オレは大丈夫だから。な？ オレは探偵だぜ。一週間くらい寝ずに容疑者を尾行するなんて日常茶飯事なんだからさ」

「新一、じめ……」

「謝んな」

有無を言わせぬ口調に、蘭の言葉は遮られた。びっくりして顔を上げると、そこには悲しそうに、そして悔しそうに目を伏したコナンがあった。

「謝んなよ。蘭」

「でも！」

「オレの事情を背負い込むな。自分の所為だなんて絶対に思っなよ。これはオレの問題なんだ。オメーには関係ねえよ」

辛辣な言葉の筈なのに、そこには苦悩が滲み出ている。

「だけど」

「え？」

「けどさ、ありがとな。オレにはこんな事言われる資格ねーかも知れないけど」

屈託なく、ただど何処か皮肉めいた笑みをコナンは浮かべる。

こんな顔、似合わないなと蘭は思った。して欲しくないと瞬時に願った。

ああ、やっぱり簡単な事だったんだ。どんなに足掻いても、抗っても、この想いだけは真実。何より信じられる新一からの賜物。

だからこそ、わたしは……。

「さ、飯食いにいこうぜ」

口調をがらりと変えてコナンが言う。言いたい事はまだあるのに、蘭は頷くことしか出来なかった。

扉を開けたとき、夢を見ているのかと思った。久しぶりに落ち、自分勝手な夢を見ていると。

蘭は食事に呼びに来たと言った。それが嘘なのは見て取れたが、そんなことはどうだっていい。理由なんて要らない。蘭と言葉を交わしているという事実を噛み締められれば、後はなんだった良かった。

不思議だ。幼馴染として何年も付き合ってきている筈の蘭を不思議だと感じた。単純で、涙もろいけれど、優しくて。この見解に間違いはなかった筈だ。少なくとも今日までは。けれど、初めて掴み損ねた。

ここ一週間ほど、彼女には拒絶され、目を背けられ。当然の報いだと思った。おそらく神経の疲れから来ているのであろう不眠症も蘭に負わせた傷を考えれば、受け止めることは容易だった。

今日は違う。蘭の方から自分を訪ねてくるなんて、眠れない自分の心配をしてくれるなんて信じられない。

もっと憎めばいいのに。自分を欺いていた男のことをもっと詰ればいい。苛めば楽になるのに。

けれど、嫌われたくない。

蘭にだけは嫌われたくない。いや、嫌われてもいいから憎まれたくはない。そう思ってしまう。蘭の人を恨めない性格をありがたく感じてしまう。そんな自分の甘さがたまらなく嫌だった。

遅すぎたのだ。全てが。二人過ごした時間は忘れるには長すぎる。蘭への想いは断ち切るにはあまりに重い。

コナンは唇を噛み締めた。噛み締めたまま、かぶりを振る。

やめよう。今は考えられない。考える時間も気力もない。

けれどいつか、近い内に変わってみせる。この壁を崩してやる。

また二人、歩み寄れる日を目指して。

## 十七章 密やかなる消息

「和葉」

平次はそつと名前を呼んだ。テーブルに手を置き、和葉が椅子に座っていた。

もうすっかり日は落ち、電気のついていない室内は薄暗い。僅かな月明かりだけが細身なポニーテイルの少女をぼうつと浮かび上がらせる。あまりに美しい光景に柄にもなく、ぎくりとしてしまった。平次は困ったように頭を掻き、電気のスイッチを入れた。部屋に明かりが灯り和葉が鮮明になる。

「なにしてんねん、電気もつけへんで」

責めるような口調になってしまったのは、単なる照れ隠しで。呼びかけると、和葉は顔だけを回して平次を見た。

「ん…… 考えごと」

「考えごと？」

「うん」

「そつか……」

一瞬の沈黙。和葉が自分の手でぎゅっと拳を作ったのを平次は見落とさない。和葉も考えていることは自分と同じなのだ、どこか憂鬱な気持ちになった。

「どや？」

主語も修飾語もない単純な文章を呟くように言う。それだけで通じたのか、和葉の肩が小さく揺れた。

「アカン……元気ない」

「そうか」

「そつちは？」

「元気なんてこれっぽっちもないな」

「……喧嘩したんかな。やっぱり」

喧嘩とは一口に言えない。でも、それでもいいと思った。そんな簡単な言葉で片付けてしまうのも悪くない。要は考え方なのだ。

「心配か？」

「蘭ちゃんが？ それともコナン君？」

「どつちも」

「心配。めっちゃ心配。あんな元気ない二人見るの、アタシもしんどいもん。なあ、平次」

「うん？」

「工藤君どこにおんねやる……」

「工藤？」

平次は瞬きした。和葉の拳がさらに締まる。

「アタシじゃアカンねん。蘭ちゃん元気に出来るんは、やっぱり工藤君しか」

和葉は言葉を切り、目を伏せた。

的外れだ。見当違いもいいところだ。毛利蘭が泣いている原因は元はと言えば工藤新一にあるのだから。だけど。

和葉の言葉に妙に納得してしまった。彼女をここまで追い詰めることが出来るのが工藤新一だけならば、彼女の涙を拭いてやれるのもまた工藤新一だけなのだろう。

所詮自分にはその手伝いしか出来ない。それは和葉も同じこと。

「和葉」

「……うん……」

「そつとしとけ」

「え？ ……あつ、なに？」

平次はため息を一つついて、和葉の前まで歩み寄った。顎に指を

かけ、顔を無理やり上げさせる。和葉の顔が一瞬にして紅く染まる。平次はその額にピンっと指を弾いた。

「痛っ！ なにすんの!？」

額を押さえ、少し涙目になりながら和葉が平次を睨みつける。頬はまだ紅いままだ。

「アホか」

「はっ?」

「なにお前まで辛気臭い顔しとんねん、らしくもない。オレらはそつとしといたらええねん。これは姉ちゃんと工藤の問題やろ」

頷きかけた和葉首が停止し、怪訝そうに斜めに曲がった。

「工藤? いま蘭ちゃんとコナン君の話してたんとちゃうの」

「え? あっ、そうか」

「はあ?」

「お前が工藤の名前なんか出すから間違えたんじゃ、ボケ!」

「なっ。人の所為にせんといてよ!」

口調は怒りながらも、どこか楽しそうにする和葉に平次は安堵を覚えた。普段通り和葉と一緒に居られることがとても幸せなことのようにも思える。そんなこと、口が裂けても言えないけれど。

そう思うようになった理由は自分でもよく分かっていた。

工藤。

胸の内で小さく呼びかけてみる。

工藤。お前がそんなやとこつちまで調子が狂う。オレだけやない。お前の一動が色んなことを惑わす。ちゃんと分かっているんか。

ふと、先ほどの少女の声が頭に浮かんだ。灰原哀のものだ。彼女もまた、工藤新一という存在に惑わされているのだろうか。ろくに話をしたこともない少女の事を知らず知らずに考えている自分に戸惑う。

彼女から電話があったことを新一に知らせたほうが良いのだろうか。けれど、言うなと釘をさされている。

胸のうちのざわめきはまだ消えてはいない。背中の毛が逆立つような感覚ははまだ鮮明にある。

「ちょっと、平次聞いてる?」

「……」

何が起こってるんや。

哀がなんらかの行動を起こしていることは間違いない。その計画が着々と進んでいることも。では、彼女は一体何をしているのか。

「平次? どうしたん?」

判らない。判らないことは怖い。だから不安になる。だから真実を知りたくなる。たとえその真実が人を裏切り、ときに誰かを陥れても。

今の新一にこの真実を追及するのは無理だ。なぜなら彼もまた真実と虚構の狭間にいる人間だから。いくら名探偵の名を持つ新一でも手がいつぱいになることもある。一度に二匹の鮪を釣り上げよう

とする奴はいないだろう。

では、誰がもう一匹の大物を仕留めるのか。むろん、自分だ。他に誰が居ようか。

「平次？ へい……」

「せや！！」

「へ？」

気になるやら調べればいい。嫌な予感がしているなら徹底的に止めるまでだ。

どうやら場のネガティブ思考に流されて自分にすべきことを見失っていたようだ。見つけたからには全うする。

「よっしや。貸し二つやで、工藤」

思わずニカツと笑う。そのまま視線を横に流すと不振そうな表情を向ける和葉がいた。平次は慌てて口元を引き締めた。

「貸しって何やの？」

「いや、べつになんでも……」

「また何かしでかす気なん？」

「しでかすってなんやねん。オレはいつも親切に困ってる奴を助けてるだけや」

「それはお節介言うんちゃうの」

「アホ。ちゃうわ」

くすくすと和葉が笑った。

「蘭ちゃん感謝しててんで」

「は？」

「平次が蘭ちゃんとコナン君のこと心配して此処に連れてきたのぢやーんと分かってくれてん。せやから平次にありがとって……」

和葉の視線が優しく揺れる。一瞬、綺麗やなと感じた。は？ 綺麗？ あり得ない。今日はどうも調子が狂う。やはり全て工藤のせいなのだ、理不尽な怒りがふつつ沸いてくる。

やがて和葉の瞳からは優しさが消え、いつものいたずらっぽさが現れた。

「まあ、蘭ちゃん優しいから、平次に気遣たんやろつけどなア」

指をくるくる回して笑いながら和葉が言った。

「安心してや。蘭ちゃんにはアタシが平次の代わりに謝つといてあげたから！」

「恩着せがましいなあ、自分」

平次は大袈裟に顔をしかめた。和葉の笑顔は消えない。少し無理したような彼女の笑顔を見て、平次は、自分もまた、ひどく疲れていることに気がついた。肉体よりも精神が疲労している。

けれど動かなくては。

新一は愛しい人との間に出来た壁と戦っている。蘭は自分の弱さと戦っている。和葉は何も出来ないふがいなさで戦っている。

自分一人、何もせずにうずくまっているわけにはいかない。

戦うべきは……未来。嘘と偽りにまみれ、巧妙に隠されようとしている未来を暴き、何かあるようなら全力でそれを阻止すること。せめて、新一が蘭との問題を片付けるまでは、この役目を果たす。

「仕事してくるわ！」

平次が和葉にひらひらと手を振った。

「えっ？ 仕事って……」

「依頼人が来たんや。無報酬やけどな。ほな、いつてくる」

「ちょ、ちょっと！ 平次！ これからご飯なんやけど!!」

「帰ってきてから食べるからとつといてくれ」

「はあ!?!」

和葉の非難の声を無視して玄関を出る。外はもう真っ暗で、冷え冷えとした風が吹いていた。何か乗り物はないかと辺りを見回してみたが、あったのは錆び付いた自転車のみ。こんなことならバイクを持ってくるべきだったとひどく後悔した。

平次はため息をつきながら自転車に跨り、強く地面を蹴った。自転車につくライトが僅かに光る。小さな光はやがて暗闇へと消えていった。

信号機が点滅し、赤に変わった。もどかしい。哀は軽く舌打ちした。

この道路を渡れば目的地に着くのに。いつも、そう。ぎりぎりのところで前に進めない。足止めを食らう。今回だけはどんなことをしてでもそれを避けなければ。

時間が経つのが惜しいのだ。あと一分、一秒でコナンを巻き込んでしまう気がする。

落ち着いて。息を吐き出さない。彼は遠いところにいる。そして、何も知らない。計画を邪魔されることは絶対にならない。

絶対？ ほんとうに？ 彼は探偵よ。いつも、何をするにも、彼には見抜かれてた。いとも簡単に先回りされた。

腹立たしい。今回は自分の好き勝手にやらせてもらう。誰にも邪魔させない。もう決めたのだから。

信号が青に変わる。哀は思わず駆け出していた。

指定された喫茶店に行くと女は既に席にっていた。彼女の前はコーヒーの入ったカップが置いてある。湯気立ち、いい香りを発するそれを一瞥しながら女と向かい合う形で席に座る。

「貴方も何か飲む？」と訊かれたが、丁寧に断った。

「ごめんなさいね、呼び出してしまって。きちんと目を見て話したかったものだから」

女の謝罪に哀は首を振る。

「わたしもこっちの方が都合が良いわ。あの家は盗聴されているかも知れないし。まあ、此処が安全とは限らないけれど」

「安心して。盗聴器がないのは確認済みだし、私の仲間が外で張っ

てる」

それならだいじょうぶね、となんて言えない。彼らならいかなる情報をもまるで奇術のように引き出せそうな気がする。もちろんそこには奇術のような鮮やかさも、高揚感も存在しないのだが。

女が薄く笑う。

「それじゃ、電話で言っていた話の続きを聞かせてもらおうかしら」

哀は頷き、息を小さく吸った。

## 十八章 一切の私欲を捨てて

「情報を掴んだの。とつても重要なことよ」

もったいぶってそう言うと、女の耳がぴくりと動いた。

なかなか本題に入らないのがもどかしいのか少し身を乗り出し気味である。

「重要？」

「ええ。もしかしたらこれで彼らの息の根を止めることが出来るかも知れない」

「そんな情報を教えてくれるの？ 私たちのこと完全に信用出来る確証はないって、前に貴方言っただけじゃなかったかしら」

「もちろん今だって完全な確証はないわ。けどあの時よりはずつと信用してる。それに、私だけで太刀打ちできるような相手じゃない。貴方たちの力が必要な」

女が微かに身じろぎ、息を吐く。金髪が揺れた。危険な匂いを察知できる者だけがごくたまに見せる素振りだった。

「……要求を聞きましょう」

哀は頷くと、顔から一切の表情を消した。

「守って欲しい」

「守る？」

「ええ。私の情報が在ったとしても、きっと厳しい戦いになる。火種が飛んでくるかもしれない。危険がないように守って欲しいの」

女のすつと体を引く。沈黙。小さく息を呑む音が聞こえた。

「つまり、こういうことかしら。貴方はその重要な情報とやらを私に提供し、代わりに私たちは貴方の身の安全を確保すると？」

「違うわ。私はどうなってもいい。確保するのは……江戸川君と、その周りの人の安全」

「コナン君？ どういうことなの。あの子も関わっているの？」

「かなり深く」

「そう……ええ、そうでしょうね。でも……前から思っていたけど、貴方たち……何者なの。普通の小学生なワケないわよね。アイツラとどっという関わりが」

「ジョディ・スターリング捜査官」

哀が力強い口調で話を遮った。ジョディと呼ばれた女は、はっと目を見開いた後、諦めたように目を伏し、ため息をついた。

「いいわ。何も追求しない、今はね」

「ええ」

「話を戻しましょ。私たちはコナン君の安全を確保する」

「その周りの人のも」

「分かってるわ。指一本触れさせない」

「ありがとう」

「話はまとまったわね。それじゃあ、そろそろ教えてもらえる？  
貴方が掴んだ情報について」

哀は口元を引き締めた。指が震える。怖じているのではない。興奮しているのだ。体中に震えが走り、歯がカチカチと音を立てる。

けれど、冷静を保たなくてはならない。それが取引をするときの基盤となるのだと、闇に堕ちていたときに学んだ。

いかなる時も表情を変えない。常に相手よりも賢くあれ。組織の上部からそう言い渡されていた。

忌々しい記憶だ。出来ることなら捨ててしまいたい。けれど、逃げるなど彼が言ったから……逃げない。役に立つものは遣う。たとえそれが組織に教養させたことであっても、自分が使い道を間違えさえなければいい。

「場所が分かったの」

哀は小さく囁いた。そこにはまるで恋人に向けられているような艶めきがあり、同時にどうしようもない憎しみをぶつけたような切ない響きがある。不思議な声だった。

その声がジヨディを困惑させる。

「場所？」

「奴らの中枢地点」

「中枢……？ それって」

「組織の本部よ」

「は！？」

ジヨディはひっくり返りそうになるほど大きく体を仰け反らせた。

「冗談でしょう！？」

「冗談なんかじゃないわ」

「そんな……まさか……極秘事項じゃないの」

「重要だって言ったはずよ」

「重要どころじゃないじゃない！」

ジヨディが叫んだ。これほどまでに感情をあわらにする彼女を見たことがない。

哀は自分の鞆からファイルを取り出し、音も立てず机に置いた。

「これは……？」

「本部周辺の地図とその資料よ」

恐る恐るファイルに手をかけたジョディの手も哀同様震えていた。パラパラとページをめくる度に彼女の目は大きく見開かれる。

最後のページに差し掛かり、やがてファイルは閉じられた。ジョディは暫く何も言わず俯いた。まだ動揺は見受けられるが本来の落ち着きを取り戻したようだった。

「……FBIだって全力で探してたのよ。けれど見つからなかった。一体どうやって……」

「組織のパソコンをハッキングしたの」

「ハッキング？ 貴方が一人でやったってどういうの？」

「まさか。私にそこまでの技術はない。向こうから仕掛けてきたのよ」

ジョディの眉間に深い皺が刻まれる。まだいまいち事情を飲み込めていないらしく、瞳が揺らぐ。

「詳しく聞かせて」

「そうね。二週間……いや、三週間くらい前だったかしら。私のパソコンから警報が鳴った、ハッキングされてるってね。まさかと思つて逆探知してみたら」

「組織からだった」

「ええ」

「そんなの……」

「信じられない？」

挑むように言った哀にたじろぎながらも、ジョディは申し訳なさそうに首を横に振る。

「気を悪くしないでちょうだい。でも、だって相手はヤツらなのよ。それじゃまるで頭の悪いハッカーじゃない」

「そうね。でも彼らは頭が悪くなってる」

「もちろん。良すぎて困ってるくらいよ。だったら考えられるのは」

畏。

どちらからともなく呟いた。背筋に悪寒が走る。とんでもなく愚かだ。愚かで、この上なく危険な行為だ。畏と分かりながら自ら火の中に飛び込むなんて。

そんなことジョディも判っているはずなのに、そのことについて彼女は何も言わなかった。FBIの実力に相当な自信があるのか。もしくは、すぐにでもこの戦いに終止符を打ちたいのは彼女も同じなのか。

「この地図、どれだけの信憑性がある？ 絶対って保障は殆どないでしょう？」

「……」

哀は答えなかった。瞼を伏せ気味にして、スニーカーの先に目を

落とす。集中して考えを馳せ巡らせているようにも、また心惑わせているようにも見える表情だった。

「あるかもしれない……」

「え？」

「信憑性」

ジヨデイが瞬きする。哀はまだ目を伏したままだ。そのまま話し続ける。

「見覚えがあるの」

「この風景に？」

資料中のある写真をジヨデイが指差した。「ええ」と小さく頷いて見せる。

「私はまだ子供で、真っ白な建物の中に実験室があった。両親がいて、それから……姉が」

「お姉さん？」

「この場所はてっきりもう使われていないと思ってた。でも、私がいなくなってからまた利用するようになったのね。きつと」

「貴方がいなくなっ……え？」

哀は苦笑して、肩をすくめた。

「つまり、あそこが本部じゃないにしても、何かしら得るものがあるってことよ」

ジョディが息を飲み下す。今まで大きく見開かれていた目がすとと細くなる。

「貴方って……」

何者なの。

かき消されたはずの後方のことばが何故か淀むことなく耳に届いた。

組織の人間。黒の墮落者。そう答えたら、貴方は私を軽蔑する？ふふっと思わず嘲笑がこぼれた。他者を蔑む醜い笑みが最近癖みたいになってしまっている。いけない。嫌だ。焦り、口元を引き締める。

彼女ならば……人を尊び、愛することを知っている彼女なら、そんな笑い方絶対にしない筈だ。

彼女の笑みと自分の笑みは全然違う。彼女の微笑みは人を幸せにする。特に、幼馴染のことを。

嫌だ。心地よい。醜い。嫌だ。

貴方って何者なの。

わからない。私は何者？

昔から、人に振り回されるのは嫌いだった。脳内を掻き乱されるのは苦痛以外のなにものでもなかった。

お姉ちゃんだけいれればいい。

ずっとそう思ってきた。

そう。もう充分に思い知らされた筈。人間の愚かさを。無慈悲さを。醜悪さを。そして愛する人との別れの辛さを。

なのに何故願ってしまうの……違う。だからこそ願ってしまうの

だ。巻き込みたくない、と。無事でいて欲しい。どうか幸せになつて欲しい。こんなこと願う権利はないと分かっていても。

「明日よ」

決意を込めて呟く。

「え？」

「明日乗り込むわ」

「明日！ 無茶よ。まだ準備が整ってないわ。せつかく場所が分かつたんだから慎重に行動しないと……」

「だめよー!!」

怒鳴っていた。べつに気持ちが高ぶっていたわけでも、苛立っていたわけでもなかった。ただ、早くせねばという焦りがそうさせたのかもしれない。

ジョディは目を細める。

「何故明日じゃないといけないの。理由は？」

何も答えず、目を伏せる。

「言いたくないのね。それとも言いづらい？ いいわ。質問を変えましょう。まさか貴方もついて来る気？」

「もちろん」

これにはまっすぐ目の前の捜査官を見据えて言い切った。当たり前だ。自分がこんなところで踏みとどまっている理由はない。けれど、ジヨディは渋い顔を返した。

「無関係な市民をそんなところに連れて行くわけにはいかないわ」

「無関係？ どこからどうみたら私が無関係に見えるの。面白い冗談ね。笑えないけど」

「冗談なんかじゃないわよ。貴方とヤツらの間に何があるかは知らない。でもね、危険すぎる。市民を危ない目に合わせるわけにはいかない。それが私の仕事なんだもの」

哀は一瞬押し黙り、目の前の金髪を睨みつける。

「残念だけど……」

睨みつけたまま呟いた。すべての感情を押さえ込んだような抑揚のない口調だった。

「貴方たちに選択の余地はないわ」

「なんですって？」

「言ったでしょう。私はこの場所を隅から隅まで知ってる。私がい方がどう考えても有利よね？」

口を開いて反論しようとしたジヨディを、「それに」と素早く黙らせる。

「これは罠かも知れない。むしろ、その可能性の方が高い。だったら狙われているのは誰？　もちろん、私よ。私が此処にいる限り、彼らはこの場所を襲撃してくる。そうなったら本部どころじゃないわ。自分達、それから市民の命を守ることだけで手一杯。せっかく掴んだチャンスを見す見す逃す？　FBIはいつからそんな愚か者になったの。……よく考えなさい。私を連れていけば、此処が襲われる心配もないし、関係のない人が命を落とすこともない。私を囮にすることだって出来るのよ」

ひどく饒舌になっていることに自分自身が一番驚いた。分かっている。焦っちゃいけない。落ち着いて、それから此方のペースに引き込めばいい。そんなこと、分かっているのだ。

でも、舌が勝手に動いてしまう。少し指で弾くだけで切れてしまうような細かい糸、それを必死でつなぎとめようとしている。

ジョディはじつと哀の話を聞いた後、疲れたように目を伏せた。強く噛み締められている彼女の唇は、かさかさに乾いている。

「貴方を囮になんて、絶対にしない……」

「それってオーケーってことよね」

「……」

何も言わないジョディに哀はイライラと、吐き捨てるように言った。

「薬が欲しいの、どうしても」

「薬？」

「ええ。些細なデータでも、なんでもいい。組織のパソコンに入ってる筈だわ。それを必ず手に入れる……手に入れなきゃいけない」

「だったら私たちが取ってくるから、どんな薬か教えて」

ジョディの申し出に哀は首を横に振る。

「貴方たちじゃデータを引き出せないし、私が取ってこないと意味がない。こんな事で自分のしたことが許されないことくらい分かってる。でも、少しでも罪を償いたいから」

こんな貧相な言葉では、本当の想いなど、ほんの一ミリも伝わらないのだろう。別にいい。知って欲しいとも、分かって欲しいとも思わない。けれど、はつきりさせる必要はある。

私は、行かなきゃいけない。

哀はジョディの顔を覗き込むように見上げた。

「お願い……」

それは懇願だった。哀の瞳が悲しみに揺らぐ。ジョディはしばらく沈黙し、言った。

「危険なこととはしないと誓って」

声小さすぎて、聞き取りにくい。けれど、十分だ。哀は口許に緩やかな弧を描いた。

「ええ」

「私達の……FBIの傍を離れないとも？」

「誓うわ」

「コナン君もよ」

「江戸川君？」

お互いに、え？ と顔を見合わせる。

「あの子も来るんじゃないの？ いつも奴らが絡むと何かとコナン君が率先して知恵を貸してくれるじゃない」

「彼は……」

哀は俯き、二、三度、ゆっくりと瞬きを繰り返す。

「来ないわ。この事は言っていないもの」

「言っていない？ それじゃあ、コナン君は何も知らないのね」

「ええ。どうしたの？ まさか、小学一年生の頭脳がないと奴らに勝つ自信がないのかしら」

挑戦的に口許を吊り上げた哀に、馬鹿言わないでとジョディが顔を顰めた。

「自信ならあるわよ。お釣りが出るほど、たつぷりとね。今度こそ、奴らを闇の巣窟から光の元へと引きずり出してやる。鮮やかな色彩の中で、自分達がしてきた事をしっかりと思い知るがいいわ」

ジヨディはそう吐き捨てた。

光の中に出てきて、私は何を見てきたの？

彼女の話聞きながら、哀はふと思う。

自分がしてきた事。罪。十分に思い知った。身の引き裂かれる思いをいつも抱えてきた。

そして、同時に人の温もりまでもを知ってしまった。いきなり闇から光へと出てきてしまつて、目が眩まされていた。いつの間にかこの世界で出会った人々が自分の中にこんなに踏み込んできていたなんて。彼の存在がこんなにも支えになっていたなんて。

目が慣れた今なら、見える。自分のすべき事が。一刻も早く奴らと決着を着け、彼を元の世界に返すこと。それこそが今の自分の存在意義。

「もしかして」

急に声が掛かり、意識を引き戻される。見ると、ジヨディが頼杖をついて、じっと哀を見つめていた。

「作戦決行が明日じゃないといけない理由と関係あるのかしら」

「え？」

「コナン君」

「……貴方には関係ない」

そっけない口調で言う。ジヨディは、やれやれと言った調子で軽く顔を振った。

「それよりも、ありがとう」

哀が、表情を一変させ、穏やかな笑みを浮かべた。ジョディが訝しげに眉を顰める。

「何がかしら」

「決行、明日にしてくれるんでしょ」

目の前の捜査官が自分の失態に気が付き、小さく舌打ちする。苦虫を噛み潰したような彼女の顔がおかしくて、哀はふっと口許を緩ませる。

「ほんと、貴方には敵わないわね」

ジョディがため息を一つ吐き出した。  
辺りはもう、暗い。

## 十八章 一切の私欲を捨てて（後書き）

『きつと僕らは光と闇を抱えて、』ご覧頂きありがとうございます！

十八章は内容を膨らましすぎて、かなり字数の多い仕上がりになっております。

哀ちゃんを書くのは楽しくて、つい手が止まらなく……。おまけに蘭とコナンが二連続登場していません。退屈されている方も多いのではないかと。読むのにお疲れになった方、見苦しい文章をお見せしてすみませんでした。次回はちゃんと蘭とコナン登場予定です。

今後もお目に止めて頂けると幸いです！ 日向ひすい

## 十九章 知る者、知らざる者（前書き）

またまた更新が遅れてしまいました……。本当に申し訳ないです。

## 十九章 知る者、知らざる者

細く開いた窓の隙間から緩やかな風が吹き込んできた。

ざわざわと木が踊り、続いて不規則に訪れる沈黙。シャワーを浴びた後のすこし湿った長い髪を風が揺らしていく。

「風邪、引いてしまうよ。蘭ちゃん」

呼ばれて振り向く。陽気な声だ。いつもは高く結わいている髪の毛をおろし、遠山和葉が立っていた。白いタンクトップにジーンズという大分ラフな格好の彼女。それだけでも和葉は十分に魅力的だった。

蘭と目が合った瞬間、和葉はにこりと口元を綻ばせた。

「髪、もう少し乾かしたほうがええんちゃう？」

そう言って、和葉は蘭の揺れる毛先に視線を落とす。蘭は、思わず吹き出した。

なぜこのタイミングで自分が笑われたのか分からなくて、和葉は少しうろたえる。

「なんか、お母さんみたいなこと言うね、和葉ちゃん」

「え？ そっ？」

「うん」

和葉は、へえ、と目を見張った後、わざとらしく顔を顰めた。

「平次がアカンねん。いつまでも子供で、世話が焼けるんやもん。いつとも一緒に居るアタシは自然とそうなってしまうんよね」

あー嫌や、と和葉は何度も首を振った。蘭はくすつと笑いを零し、それからふと首を捻った。

いつも一緒に居る。

さらりと言われたその言葉に妙に揺すぶられる。和葉への嫉妬などではない。ただ、純粹に、不思議に思う。思わず首を捻ってしまう程に、なんだろうと思った。

いつもつてなんだろう。一緒つてなに。

蘭は、知らず知らずの内に、大阪の街を二人仲良く喧嘩しながら歩く和葉と平次の姿を頭の中に思い描く。そして、また、知らず知らずの内に、大阪の街並みは東京の都会の風景へ、街行く二人は蘭と新一の姿へと変化した。

わたしと新一は”いつも一緒”だったのかな。

自分自身に呼びかけてみる。生まれてから高校二年になるまでの十六年間、確かにいつも一緒に居た。同じ時を同じ場所で同じ景色を見ながら共に過ごしてきた。

それじゃ、あの日からは？

突然、新一が消えてしまったトロピカルランドに二人で行った日。たぶん新一はあの日を境に江戸川コナンになった。それでも。

指の傷が包帯の下で疼き、熱を持った。強引に、けれど優しく先ほどコナンが触れた箇所にも蘭も自分の手を添える。

それでも……彼はやっぱり、

「いつも一緒……か」

「え？」

聞こえないように呟いたつもりだったが、和葉はきちんと振り向いた。なっなんでもない、と蘭はくるりと目を伏せた。

「なあ、蘭ちゃん」

いつの間に閉めたのか、窓の隙間は埋められている。閉められた窓の傍に和葉が立っていた。

月明かりに照らされながら、小さく微笑を浮かべる。

「ちよつと外出えへん？」

コナンは瞼を落とし、ベットに身を投げ出していた。ここ数日で一番ほつとしていたのだ。

嬉しい。

蘭と言葉を交わせただけで、こんなにも安堵している。普段は気恥ずかしくて、こんなことを思っている自分を認めるのはなかなか難しいけれど、今だけは素直に頷けた。

ドアが開く音がして、それから隣のベットのスプリングが派手に軋んだ。コナンは片目を半分だけ開け、視線を横に流す。

「メシも食わねえで出かけやがって…… 和葉ちゃん怒ってたぞ」

反応はない。ただ、少し疲れているように息を吐いただけだった。

「どこいったんだよ、服部」

服部平次は乱暴に横たえていた上半身を、これまた乱暴に起こし、にやりと含み笑いをした。

「仕事、や」

仕事？ と、目を細めながら聞き返す。平次は含み笑いを止めようとはしなかった。

「なんだよ、それ」

「お前には関係……あるけど、今はない」

「引つかかる言い回しだな」

「いつか分かるちゅーこつちゃ。それも、近々な。せやから今は気にせんでええで。オレに任せとけ」

「はあ？」

平次は、もぞもぞと口を動かして、肩を竦め、黙り込んだ。違和感が芽吹いた。

何か掴んだな。

確信する。顔を見れば一目瞭然。悟られないとでも思っているのだろうか。そうだとしたら、なんて腹立たしい。

いくら神経が細くなっていようと、探偵の腕は落ちていないつもりだ。この男は何かを掴んだ。それもかなり大きなコトを。

けれど、曖昧に誤魔化されたことでコナンも追及する気が失せ、そのまま部屋は沈黙が支配した。

「そういやさ」

「ん？」

平次が首だけをコナンの方に傾ける。

「蘭と話したよ」

「ほんまか？」

「ああ。オメーの妙なお節介のおかげでな」

「ふん、節介言つてもオレに感謝してんやろ？」

「まあな」

苦笑しながらそう返すと変な間を置いて平次が、は？ と零した。見ると彼は「鳩が豆鉄砲を食らったような」表情そのものであった。そして、眉に皺をよせる。平次はそのままの面持ちでコナンに近づき、ぺたりと小さい額に手を置いた。

「なんだよ？」

「いや……やけに素直やなって思っただけ。熱はないよな？」

その言葉を聴いた瞬間、コナンは顔を顰め、ぱんつと平次の手を振り払う。返事をする気にもなれなくて、ただ深くため息をついた。平次は払われた手をひらりと振る。

「冗談や、冗談」

苦笑しながら言っているところをみると、あながち冗談でもなかった気がする。平次はまだ手を振っていた。

「それで？ 仲直り出来たんか？」

「いや。それは、まだ……だな」

「そうか」

「けど、どんなに時間掛けても分かって貰えるように努力はするよ。少なくとも、もう蘭の泣き顔は見たくない」

真つ直ぐ前方を見据えて、コナンは言い切った。

「そんなに時間もかからへんと思うで」

「どうだかな」

平次は笑った。

「絶対や」

絶対？

平次の断言にコナンは目を細めた。また一つ、違和感が根付く。なぜそんな風に言い切れる？

でも、たしかに平次は笑った。もう先は読めているかのように。先が読める？

ありえない。当事者の自分だって先のことなんかさっぱり分から

ないというのに。

それを平次に言つと「お前は自分のことに鈍すぎなんや」と軽くあしらわれる。正直言つて、全て見透かしているような平次の視線が面白くない。

思わず拗ねたように横を向いてしまふ。そんな子供じみた自分が急に恥ずかしくなつて、コナンは何度も空咳を繰り返した。

それにしても……。

コナンの額に自然と皺が寄る。考えを馳せるときにどうしてもなつていしまふ、いわば癖のようなものだった。

それにしても、この胸の引っかかりは何なのだろう。

この数日間で異常なことが起こり過ぎている。突然、工藤新一へと戻り、蘭に正体を知られ、とどめはこの手のことに誰よりも慎重である筈の灰原哀のあまりに浅はかな行動。

そうだ、灰原。これが最初の違和感だった。

以前にも感じたことだが、わざと危険を冒してまで解毒剤を飲ませるなんてどうかしている。それ程までに重要な目的が彼女にはあったのだろう。

でも、肝心の目的が分からない。

自分を工藤新一に戻すこと？

否。戻つたと言つても数分だけなのだから特にメリットがあつたとは到底思えない。じゃあ、一体なんだ？

蘭に真実を知られてしまい、自分らの正体が外部に漏れやすくなつたという決定的なミスをしてまで、彼女が手に入れたかつたものってなんだ。

決定的なミス　まさか、ミスじゃないのか。それこそが目的だったのか……？

今まで頭の片隅にあつた全てのこと一本の糸に繋がれていく。

きっかけは只の小さな違和感、されど考えを馳せれば馳せるほど胸がざわつき、信じていたものを初めて疑うような感覚に陥る。

しかし、まだ足りない。繋がらない。

もし、本当に蘭に正体をバラすことが目的だったとして、灰原に有利になるものなんてあるのだろうか。

ふと、目の前の男が目にとまった。

『仕事、や』

平次の言動も違和感の一つだった。

「服部」

「なんや」

「おまえ……」

おまえ、知ってるのか。灰原が何をしようとしてんのか、調べたのか。仕事って、それか？ いや、でも……。

一瞬、問うてしまってよいものか躊躇う。

それって考えすぎじゃないのか。ちらりと思った。でも可能性はゼロじゃない、と続けて思う。

この一瞬の葛藤がこれ以上の語らいの時間を奪った。すぐ後に起こったばんつという衝撃音によってコナンの言葉は打ち砕かれ、思考は強制終了させられたからだ。

続いて、廊下を走ってくる足音が鳴り響く。

何事かと平次とコナンがドアのほうを振り返った刹那。

「平次！！」

空気は突如部屋に駆け込んできた和葉の悲鳴に切り裂かれた。

額に汗、頬に泥、そして目には涙を浮かべた和葉が息を切らしな

がら平次に抱きつき、勢いで体を揺さぶる。

突然のことに反応、出来ず平次は大きくよろけ、仰け反った。コナンも呆気にとられながら和葉を見つめる。

「平次！ どないしよう！」

「ど、どうし……」

「アタシのせいやねん！ ほんまどないしたらええの……！」

「だから！ なにがや!!！」

泣きじゃくる和葉を引き離し、平次が言う。それでもまだ和葉の涙は止まらない。嗚咽を漏らしながら賢明に話そうとする和葉から一言だけコナンの耳に鮮明に届いた。

「蘭ちゃんが……っ」

愛しい人の名前を聴いた瞬間、少年の足は迷うことなく地を蹴った。

## 十九章 知る者、知らざる者（後書き）

カメ更新もいい加減にしろ！ って感じですね……。ごめんなさい。学期末考査も終わり、やっと時間が出来たので頑張って仕上げたいと思います。この物語もだいぶ終盤となりました。あとは最終回に向かって突っ走るだけです！突っ走れる……。でしょうか。ともかく、ご覧になっていただきありがとうございました。日向ひすい

## 二十章 底なしの闇

一時間前。

和葉は、夜の道をゆっくりと歩いていった。隣には美しい黒髪を月明かりに光らせる蘭の姿。和葉が連れ出したのだ。

「外に行くなら、し……コナン君と服部君にしろせておかないと……」

「ちよつと歩くだけやもん。大丈夫」

そんな会話があったのを覚えている。少し不安そうな顔をした蘭の腕を和葉は半ば強引に引っ張り、二人だけで夜の森へと足を踏み入れた。

今思えば、そこからして失敗だったのだ。蘭の言うとおり平次に一報入れるべきだったし、怖がり二人で夜道を歩くななんてあまりいいアイデアだとは言えないということに気がつくのが遅すぎた。

都心から隔離されたこの場所の夜は暗い。全てのものが黒く塗りつぶされる。星や月、自然の光があつて、やっと回りの色が見える程度だった。

ポケットの中を探り、ペンライトを取り出し、点ける。以前、蜘蛛屋敷事件のときに持っていたものだ。蘭も見覚えがあつたらしく、可笑しいような、申し訳ないような、どこか不自然な笑みを浮かべた。

かくして、光源は手に入れたわけだが、たかがペンライト一本。

足元が見やすくなったくらいで、大して周りの景色は変わらない。

「真っ暗だね」

と、蘭が呟いたように本当に色がなかったのだ。和葉も蘭も、幾度となく木の幹などの見落とした障害物に足を滑らせ、前につんのめった。

それでも、暫く歩いていると目が慣れてきたせいもか躓く回数も減っていき、十五分ほど歩いた頃には草花の形までが見えるようになっていた。

「だいぶ慣れてきたね」

蘭が、膝についた泥を落としながら言った。

「ほんま」

和葉もそれにならい、ぱたぱたと自分の膝を叩く。

「コナン君達、心配してるかな？」

「アタシらが抜け出したこと気イついてへんと思うな」

「たしかに」

どちらからともなく吹き出す。初めはくすくす笑っている程度だったが、だんだんと気分が高揚してきて押さえが利かなくなり、終いには森に響き渡るような大声でお腹を抱えて笑っていた。

良かった。蘭ちゃん、少し元気になってる。

蘭と一緒に笑い転げながらも、和葉は感じた。蘭の顔からは、も

う張り詰めたような表情はあまり読み取れない。どちらかというところ、柔和で優しいいつもどおりの彼女の表情を浮かべている。

蘭の表情を細かく観察していくうちに、彼女の眼に光るものがあることに和葉は気づいた。

涙……？

苦しみの涙であろうか、もしくは笑いの発作からくる生理的な涙であろうか。後者であることを望む。

蘭は、笑いで乱れた息を整えながら目の端に浮かんだ涙を巧みにふき取り、次の瞬間には蘭の目は乾いていた。蘭は数歩前に進み、くるりと和葉の方を振り返った。

「あーっ、可笑しい！」

「うん。せやね」

「なんか久しぶりに笑った気がするな」

蘭の言葉を最後に森はまた沈黙を取り戻した。いや、虫の音が微かに聞こえる。秋が近い証拠だ。

蘭はまた向きを変えて、ゆっくりと歩き出した。和葉は何も言わず、その背中を追いかける。しばらく二人は無言で森の中を進んだ。風が吹き、雑木が揺れる。さつき部屋の中で感じた風だ。心地よい。自然は厳しく、優しく、そして偉大だ。時に人を傷つけることもあり、時に傷を癒してくれる。

平次が旅行先をこの場所に指定したのは悪くなかったと思う。

「和葉ちゃん」

突然、蘭が振り向いた。

沈黙から十数分が経ち、ペンションからの距離もだいぶ離れてい

た。迷子にだけはならないように道順をおさらいする。もともと、真っ直ぐにしか進んできてないのだから道順も何もないのだけれど。

「なに？」

和葉も足を止め、優しく聞く。

「あの……」

「うん」

「わたしの相談、聞いてもらってもいいかな」

首を傾げ、少し躊躇いながら蘭が言った。その仕草がとてもかわいらしくて、和葉は思わず口許を綻ばせた。

「もちろん」

それを待つてたんやもの。

和葉の返答に安心したのか、蘭は「ありがと」と言って表情を緩めた。けれど、なかなか口を開かない。和葉も無理に急かすようなことはせず、黙って続きを待った。

「喧嘩したの」

蘭が横を向く。視線が闇に吸い込まれた。

「けんか？」

「うん。いや、ちょっと違うかな…… わたしが一方的に避けてた

っていうか

「コナン君を？」

えっ、と蘭の目が瞬いた。

「あっ。ゴメン、相手は聞かへん約束やったね」

「ううん、いいよ。相手は」

新一。

蘭の口がそう動く。それから「嘔吐いちゃってごめんね」と謝った。

うそ？ ああ、新幹線の時。

「別に気にせんでええよ、全然」

「ありがとう」

「でも、コナン君も元気あらへん氣イするけど。蘭ちゃんが心配やったんかな」

聞くと、蘭は痛いような笑みを浮かべた。

「コナン君は優しいから」

ああ、またやってもたと和葉はため息を吐き出す。

どこに地雷が落ちているかわからない。何が蘭をあんな表情にするか検討もつかない。もう余計な詮索するのはやめようと心に誓った。

「それで」と蘭はまた口火を切った。

「わたしが新一を避けてたのには理由があつて……」

そうやるな、と和葉は頷いた。蘭は進んで人を傷つけるような人間ではない。ましてや、相手は工藤新一。蘭が誰よりも大切にしている人なのだ知っている。

「理由つて？」

「新一がわたしに何ていうか……その、隠し事してたの。和葉ちゃんたちが来た日に本当のこと聞いたんだけど、なんかわたしその時混乱しちゃつて。あんまり覚えてないけど、たぶん酷い事言っちゃつたんだと思う」

「うん」

「ほんとに酷い事……新一を突き放すようなこと、言ったの。だけど、どうしようもなくて。歯止めが利かなくなっちゃつて。わたし……」

蘭は目を伏せ、息をついた。

「怖かった。新一のこと信じられなくなるのが、たまらなく怖くて嫌だった」

「蘭ちゃん……」

手を伸ばしかけて、やめた。蘭は支え棒なんて必要としてない。そっとしとけ。オレらはそっとしといたらええねん。

平次に言われた言葉が胸に響く。和葉は、そやね、と小さく頷いた。聴くだけでいい。気休めを言うわけでも、同情するのでもなく、ただ話を聴く。そのかわり、蘭の口から零れた言葉は一言一句絶対に聞き逃さない。

「でも」と蘭は続ける。彼女の表情が多少緩んだ。

「でもね、此处に来て、冷静になって、服部君と和葉ちゃんと話して分かったんだよね」

「なにが？」

「わたしは逃げてただけだった」

そう言って、蘭は微笑んだ。その微笑は美しく、優しく。

「わたし本当は」

「蘭ちゃん」

和葉は蘭の言葉を素早く遮った。

「アタシに相談するまでもあらへんかったね」

「え？」

「自分で答え、出せてるやん」

「ちやう？」と言いながら、にっこりと笑ってみせる。蘭は大きく二回瞬きした。

「せやからその先は本人に直接言わんと」

「直接……」

「そう、直接」

蘭は何も言わなかった。無言で足元を見つめていた。虫の声だけが豪勢に響く。

「帰ろつか」

和葉がぼつりと言った。

「帰ったほづがええよね。平次もそろそろ気づくかも」

蘭は「そうだね」と小さく答えた。数歩前を行っていた蘭が和葉の横に並ぶ。二人してもと来た道を帰ろうとしたとき、

「あつ」

和葉の手がペンライトを弾いた。

「ヤバっ！」

咄嗟に駆け出し、回りながら転がる光を掴もうと手を伸ばす。が、掴めたのは空気だけだった。ああ、もう！ と悪態をつきながらペンライトを追いかける。下へと広がる緩い傾斜が回転のスピードに拍車をかけていた。

ざっざっざつ。下草を踏み鳴らす音が自分の下から、そして後ろからも聞こえた。蘭がついてきている。

ペンライトはとまらない。奥に進むにつれ傾斜が急になり、更に勢いを増しながら転がり続ける。和葉は懸命に走り、進んだ。あと少し。

やっと手を伸ばせば届くくらいまで距離が縮まった。もう少し足の回転を早くして、手を掲げた。そして。

消えた。

消えた？

ペンライトが消えた。本来なら自分の手中にある筈のモノが突如目の前から姿を消した。ペンライトだけではない。目の前の雑木、草、あるもの全てがなくなった。

なっ、なに。

同時に来るふわっと体が浮かび上がるような感覚。知らないうちに前傾姿勢になっている。やっと気づいた。景色が消えたんじゃない。開けたんだ。背中がひゅっと冷たくなる。まさか……

墜ちる。

「和葉ちゃん!!」

蘭の叫び声が聞こえた。

落下の恐怖に思わずぎゅっと目を瞑る。風を感じた。怖い。あとどのくらいで地面に激突するのだろう。此処はそんなに高くはないと思うけれど、打ち所が悪かったら大怪我なんてものじゃすまないかも知れない。

風がまた体を通り抜けた。ああ、これが墜ちるって感覚なんだ。と、妙に納得した気分になる。

けれど、急に浮遊感がなくなった。代わりにぐいっと強く体を引っ張られる。引っ張られると言うより、振り回されたみたいだ。景色が反転する。

そして、次の瞬間には自分の体は硬い地面の上に横たわっていた。

「な、なにが……」

和葉は呆然と呟いた。

目の前に崖がある。とりあえず、墜ちずにはすんだようだ。でも、どうして？

「蘭ちゃん……？」

嫌な予感がして、呼びかける。返事がない。さっきとは違う意味で風が心を冷やしていく。

「蘭ちゃん？」

少し大きめの声にしてみても、蘭の姿はない。背筋が凍る。最悪の場面が頭の中に広がった。

冗談よね……？

声に出したかも分からない。ただ目の前の崖を見つめながら愕然と思った。だめだ。体が動かない。足がすくむ。

ありえない。絶対はない。だってそんな……。

指ががくがくと震えた。崖の下になにがある。なんで自分は落下しなかったのか。なぜ 答えは簡単だ。崖の下を除けば、判る。

和葉は、ゆらりと立ち上がり、目下を見下ろす。そして、見つけた。

「……………」

息を呑み込む。声が出ない。

和葉の目線の先、崖の下には長い髪の少女が横たわっていた。

蘭ちゃん……。

和葉の脳裏に一瞬にして美國島での光景が蘇る。あの時は、崖か

ら墜ちそうになった平次を遠心力を利用して和葉が地へと戻した。それとほぼ同じことが今起こったのだ。ほぼと言うのは平次が行った行為を自分は出来なかったから。身代わりとなり、落下してゆく蘭に手を伸ばせなかった。

どうしよう。

「どうしよう……」

自分の声が妙に遠くに感じる。変にエコーして、気持ち悪い。

「アタシのせいや……」

じわりと涙が浮かんでくる。

目の前が滲んだ途端、和葉はどうしようもないパニックに襲われる。

「蘭ちゃん……」

ソプラノの叫び声が漆黒の森に響き渡った。

## 二十章 底なしの闇（後書き）

更新出来ました！なんてしょーもないことに胸を張ってみる今日この頃。蘭ちゃんも大分気持ちの整理がついた模様です。良かったね、新一。この物語を書いていると、私は和葉ちゃんがとことん好きなんだなあって感じます（笑）彼女が美人であることの描写をたくさん書いていますので。 美國島での出来事は皆さんお気づきかと思いますが、原作28巻より引用です。蜘蛛屋敷事件は原作25巻でした。空色カエデさま。ご親切感謝いたします。 日向ひすい

## 二十一章 繋がる光

危ない。

そう思ったときにはもう反射的に手が出ていた。

「和葉ちゃん!!」

体が傾き、目下へと墜落する寸前の和葉の手をがっちり捕まえる。それをぐいっと力一杯自分の方に引き寄せ、体の位置を反転させた。和葉の細い体が草むらのほうに投げ出されるのが見えた。

ふわりと風が吹き抜けた。

目線が下がる。

墜ちている。そうリアルに感じた。何も考えられない。恐怖も、興奮も、痛覚も何もない。空っぽになりゆく胸の内にあるのはただ一人の名前だけ。

新一……!!

いつだってそうだった。危険な状況になると唯一思い浮かぶのはこの言葉、この名前。それは鮮やかに、まるで奇術のごとく蘭の不安要素を吹き飛ばす。

名を想う。

ただ、それだけの行為に何度も窮地を救われた。絶望の狭間から引き上げられてきた。この瞬間、ほんの一瞬ではあるけれどもいかなる時よりも新一を近くに感じる。確かに繋がっているのだと安堵す

る。

待ってる、オレが必ず助けるから。

そう言われた気がした。蘭は静かに目を閉じ、受身の態勢を作った。

途端、背中に衝撃がきた。体全体を地面に打ち付ける。息が詰まった。鈍い痛みに呻く。

けれど、痛みは思っていたより随分とまだ。体の下には僅かだが弾力があつた。地面一面に生えている長い下草が落下の衝撃をかなり減少させたらしい。

指を動かしてみる。続いて手首、足、それから背中。大丈夫。なんの異常もない。したたかに打たれた背中にはまだ鈍痛が残っているけれど、それも時間が経てば治まるだろう。

「蘭ちゃん!!」

泣き声に近い悲鳴が上から降ってきた。見上げる。夜空の月を隠すように和葉が下を覗き込んでいた。

「和葉ちゃんっ」

和葉を安心させる為に来るだけ優しい声で叫んび返す。和葉の肩がびくりと上下した。

「蘭ちゃん! 大丈夫なん!？」

「うん、大丈夫よ」

「ケガは? 痛いところはない?」

「大丈夫。どこもケガしてない」

「蘭ちゃん。アタシ、ほんまゴメン……」

和葉の声が震えている。泣いているのが分かった。

「わたしはほんとに大丈夫だから。ね？ 心配しないで。ただ」

蘭はそり立つ壁を見上げた。

「此处に登るのはちょっと無理かも」

そんなに急な斜面ではない。

けれど、見たところ和葉のいる地点まで十メートル弱はある。凹凸が少ない土剥き出しのそれを登るのはいくら運動神経のよい蘭だと言っても難かしそうだった。

和葉は蘭の言葉を聞くと、弾かれたように立ち上がった。

「アタシ、平次呼んでくる！ それまで待つといて」

和葉はそう叫ぶと、蘭の返事を待たずに駆け出した。雑草を踏み鳴らす足音が遠ざかり、やがて消えた。

行っちゃった。と、一人が心細くなる。唐突に「女子高校生、崖から転落。行方不明」の文字が、マスメディアの見出しにでもなるかのごとく現れた。蘭は首をちぎれそうな勢いで振り、ぱっぱっとそれを打ち消した。

下手に動かないほうがいい。このまま彼女を待とうと決め、蘭も大人しくなる。

あたりは静寂と化した。

ざわりと木が不気味に揺れた。闇が突き刺さる。耳や肌に染み入

るような深い闇。寒くもないのに、ぶるり身震いした。不規則な自然の音が恐怖心を煽る。

「や、やだ……」

崖から転落している時にはなんの怯えもなかったくせに、暗闇に一人残されるとすぐにこうなる。身が縮こまる。もともと蘭はオカルト要素のあるものが苦手なのだ。

情けない、すっかりしると自分で叱咤してみるも、全く効果を発揮しない。だんだんと意識まで暗くなってきた、周りが余計に気味悪く感じる。

いやだ。怖い。怖いよ……

風が唸る。闇は濃くなる一方で。

やだ。ほんとに……

待ってる、オレが必ず助けるから。

沈み行く意識を底の方でぴしゃりと跳ね返された。はっとする。

今、初めて覚醒したように目が冴え、胸が高鳴る。その反面で感情は徐々に落ち着きを取り戻し、恐怖はすうっと抜け落ちていった。

息を吐く。さっきまでの怯えは嘘みたいに治まっていた。体中の力が解ける。

待ってる。うん、待ってるよ。今までだってちゃんと待ってたじゃない。ずっと……信じて待ってるから。

新一。

新一……

「え？」

コナンは思わず足を止めた。

「どないした？」

前に行く平次も気づいて立ち止まる。平次の頬に汗が伝っているのが見えた。

「今、確かに……」

確かに聞こえた。風の音や、幻聴なんかではなく。自分の名を呼ぶ蘭の声が少しの淀みもなく耳に届いたのだ。その声はまるで自分の傍で囁かれたように何の雑音も纏ってはおらず、直接頭の中に語りかけてくるようだった。

蘭。

呼びかけてみる。

蘭、待ってるよ。ぜってえ助けてやつから。オメーのことだけは何があんでも絶対に。

部屋に転がり込んできた和葉に、蘭が崖から落ちたと聞かされたとき、コナンは目の前が真っ暗になった。比喩なんかではなく、本当に真っ暗になったのだ。眩暈もした。

彼女の話の詳細を詳しく聞いてみると、どうやら蘭は無事なようだったが、それでも心配な事にかわりはない。暗闇を恐れ、怖がりな蘭。自分が一番よく知っている。

「なに？ どうしたん」

二人が止まっている事に気づき、和葉も振り返る。此方も額に汗を浮かべ、息切れしている。和葉は手の甲で滴り落ちる雫を拭いた。

相当走った。ペンションを出てから三十分以上は走っている。それでもまだ目的地は見えないらしい。

「いや、なんでもないよ。急ごう」

コナンの言葉を区切りにし、和葉を先頭にまた動き始める。

コナンも自分の息を整え、また走り出そうとした。その途端よるめき、くらりと前のめりになった。力が抜けそうになる膝を懸命に踏ん張って倒れるのを防ぐ。動機が激しく、息が苦しい。睡眠不足のコナンの体の疲労はピークに達していた。

それでも、走らなくては。

蘭の元へと駆け寄り、この手に彼女の温もりを感じるまで安心は出来ない。

それから更に数十分走り続けた。きつい。体力的にも精神的にもとてもきつい。まるで酸素がない水の中にいる金魚みたいだ。それでも、蘭だけを目指しコナンは足を前に突き出していく。

と、急に平次の足が緩んだ。コナンと和葉もつられて立ち止まる。膝に手をつき、大きく息を吸い込む。突然大量の空気を吸ったためか、咳き込んでしまった。ゼーゼーと荒い息を吐き、喘ぐ。

和葉がコナンの背に手をやり、「大丈夫？」と優しく擦った。

「その崖っちゆうんは何処にあんねん。まだ着かへんのか」

少し苛ついたように口調に怒気を含ませながら、平次が和葉に聞いた。

和葉は一瞬今にも泣き出しそうな顔になり、顔を伏せた。その様子に平次は焦り、急いで和葉に弁解する。

「べっ、別に怒ってんのとちゃうやろ。唯、聞いただけや」

「わからへんねん」

「は？」

「崖、どこやったか思い出せへんねん！ 真っ直ぐにしか歩いてきてへんし、道は絶対あつてる筈なんやけど……でも、おかしいやろ。まだ着かないなんて絶対おかしいやろ。どうしよ、蘭ちゃんに何かあつたら……アタシ……」

とうとう和葉は両手を顔に当てた。なっ、泣くんやない、アホ！と、平次があたふたしながら必死で和葉を宥めようとしていた。確かにおかしい。

和葉と蘭が出かけたという時間から、自分達が事態を知った時間まで、約二時間半。往復だから片道は一時間強。夜道という事を考慮しても、和葉と蘭が歩いた時間は一時間半程度だ。しかも、折り返しの時、和葉は走っていた筈だ。実際の時間は更に短縮されると考えるのが妥当だろう。だったら、もうその崖に着いていても不思議じゃない。

しかし、目的地はまだ見えていなかった。単に和葉が見落としたわけではない。今までの道のりをコナンもずっと見ていたけれど、それらしき場所はなかったのだ。

どこだ？ どこにいる？

吹き出す汗に邪魔されながら、コナンは思考を巡らせる。そして、脇にある茂みに視線を流したとき、あるものが目に止まった。

草が寄ってる。

「これ……」

手に持っていた懐中電灯を問題の箇所に向ける。そこは獣道のように、草が真ん中から左右に割れていた。まるで誰かが通った後の

ように。

心臓がばくばくと暴れだす。落ち着け。落ち着いて手がかりを追うんだ。

「平次兄ちゃん！ 和葉姉ちゃん！」

二人を呼び、少し奥まで進んでみる。横にある低木が頬を擦った。草を掻き分け、前に進む。和葉が、あつと声を上げた。

「ここ、覚えてる！！」

平次が、しゃがみ込み土の表面を調べる。それから、ニツと笑った。

「足跡や。きつかり二足分あんで」

その言葉でコナンは確信した。間違いない。この先に、和葉のいう崖が存在する。そして、その下には蘭が。

思わず駆け出していた。「おいっ工藤！」と平次の叫び声が後ろから追いかけてきた。いつもなら和葉の前で工藤と呼ばれたことに対し注意をいれるが、今はそんなこと気にしてられない。

足の回転を速くする。この先は崖だ。下手に飛び出せば自分だって危ない。スピードを落とすべきだ。頭では十分すぎるほど判っている。理解もしている。それでも焦る気持ちは抑えられない。理性よりも感情を優先させてしまうのだ。

突然、世界が開けた。空が広くなる。そこに在ったものは断崖絶壁と、頭上の星星、それから。

崖淵に身を乗り出し、目下の少女を見つめる。彼女は背を向け、土の壁に静かに寄りかかっていた。月明かりに照らされ浮かび上がる愛しい人の影。その光景は幻かと疑うほどに美しく、どこまでも

幻想的で。

「ら……ん」

精一杯叫んだつもりだった。けれど、喉が乾いてひくつき、上手く声が出ない。実際自分の口から出た言葉は蚊の鳴くような小さなものだった。これでは十メートルくらいある蘭のもとまで届くはずもない。

もう一度、叫ぼうと大きく息を吸う。

その時、少女はふと思いつたように頭上を見上げた。辺りが余りに暗く、お互いに顔は見えない。けれど、確実に目が合った。合ったというより、両者共に強い引力を感じ、引き付けられて離れない。コナンは、口をOの字に開いたまま硬直した。

「し、んいち」

名前を呼ばれ、我に戻る。

「新一！」

もう一度、今度はさっきよりもはっきりと蘭の声が聞こえる。

蘭は、無事だ。

「良かった……」

体から全ての力が抜けた。安堵の脱力。今までからからに渴いていた口の中に水気が戻る。コナンはゆっくりとそれを飲み下しながら、立ち上がった。

背後からはさばさと足音が聞こえる。平次と和葉が近づいて来ている。

「蘭」

優しく蘭に呼びかける。今度はきちんと声が出た。

「危ねーから、そこ退いてろ」

「え？」

ざざつ。茂みが動く。二人の気配が現れたのを背中に感じた。出てきた平次がふうつと息をついた。

「お前なあ、勝手に走り出したりすんなや。危ないやろ　え？  
ちよ、おっおい。くど」

平次の言葉は途中で切れる。和葉が驚いて息を呑んだ。

コナンは、崖の淵の淵、もう地と空の境目ぎりぎりのところに足を置いていた。月が雲に隠れ、闇は更に濃密になる。コナンの口許には穏やかな笑みが浮かんだ。  
そして。

コナンの足が地を離れた。小さな身体は崖の側面に沿って下へ下へと降りてゆく。その軌道を辿るように茶色い土が舞い上がった。

蘭は、その様子をただじっと見守っていた。

## 二十一章 繋がる光（後書き）

二十一章もご覧になって頂き、誠にありがとうございました。とうとう使ってしまった！『テレパシー』！原作の方でもよく出てくる蘭と新一の固い絆の表現（だと私は思っています）。私も一度挑戦してみたかったのでこそとばかりに使わせて頂きました。でも、やっぱり勉強不足ですね……。腕を磨きつつこれからも頑張ります。日向ひすい

## 二十二章 迷宮の少女

研究室に入り、ぐったりと椅子に腰を掛けた。疲れた。疲れたけれど、最高に気分がいい。

腕を擦る。

鳥肌が立っていた。叫びだしたいような歓喜の旋律が身体を駆け抜け、ぞわりと心身が震えたのだ。

自分の頬を撫でながら、哀は誰にもなくふふつと笑いかけた。た。

契約完了。約束は取り付けた。あとは時間まで待つのみ。

「明日の午後十時。最速でもその時間になるわね。それより前に計画は遂行出来ないわ」

ジョディの言葉を思い出す。彼女は、頬杖を崩しながら哀にそう告げたのだ。

「十時？」

「ええ」

「随分遅いのね」

「備えあれば憂いなしってね」

彼女は、にっこり笑い、携帯電話を取り出しダイアルを押した。母国語で二言三言話した後、「詳しいことはまた連絡するわ。それじゃ」と言って席を立った。その手にはまだしっかりと携帯電話が握られていた。

明日午後十時。

充分だ。計画遂行が何時からにせよ、明日中ならば彼が巻き込まれる心配はない。正直、ここまで上手くいくとは思っていなかった。ほぼ哀の要求通りに事が進んでいる。これほどまでに上手く運べると、逆に心配になる。

すんなり行き過ぎているときほど、危険な頃はない。

人生とはさしてそういうものなのだ。けれど、だからといって今更計画を中止する気は毛頭ない。自分は明日、組織の本部にFBIと乗り込み、全てを終わらせる。その決意に揺らぎは一切許されない。

全て終わらせるということは、組織を壊滅させると共に、薬のデータを手に入れることだ。それさえ手に入れば江戸川コナンは工藤新一へと戻り、愛する幼馴染と以前のような平和な生活を送ることが出来る。完璧なハッピーエンド。やはり物語にはそれが一番よく似合う。

そう。完璧な、ハッピーエンド……。

私はどうなるの？

唐突にその疑問が浮かんだ。慌てて思考にストップを掛ける。今まで目を逸らし、絶対に考えまいとしていた疑問がふとした拍子に出てきてしまった。

いつもなら上手く自分を誤魔化して違うことを考えられるのに、今日は駄目だ。前日だからだろうか。どうしても歯止めが、利かない。悪魔の囁きに耳を傾けてしまう。

さっきまで体中に蠢いていた歓喜の渦がすうっと引いていく。変

わりに冷たいものが腹の中心に居座った。

聴いちやダメ。考えたらダメ。揺らぐなんて許されない。分かってるでしょう。私には贖うべき罪がある。だから組織に行つて……

組織に行つて無事に帰れると本気で思つてるの。

……やめて。

完璧つて何よ。

黙つて。

解毒剤が出来たら、彼は幼馴染のところに行くわ。私になんて見向きもしなくなる。

嫌い……。

死ぬわよ。

……っ!!

「嫌い！ 嫌い、嫌い、嫌い!!」

思わず吼える。髪を掻き、拳をにぎる。自分自身の暴言に激しく感情を揺さぶられる。気がつけば、はあっはあっと思が上がついてた。

乱れた髪を押さえつけ、呼吸を整える。自分の肩を強く抱く。小刻みに来る震えを懸命に押さえ込もうとする。けれど、止まらない。本当は怖い。死にたくない。またあの身の凍るような処に足を踏み入れるなんて考えただけで吐き気がする。

目尻に指が触れたとき、冷たいものを感じた。一瞬それが何か分からなかった。水？ 違う。冷たいものの正体に気付く。それが流れ出ないようにぐつと堪えていた。

泣いたらいけない。ここで涙するのは卑怯だ。弱い愚か者だがする行為だ。自分は愚か者ではあるけれど、弱くはない。常に強くありたかった。人に縋ってばかりでは強くなれない。

私は、一人で強くなる。

そう心に誓ったとき、この計画を思いついたのだ。当初の目的を思い出し、哀はだんだんと落ち着きを取り戻していった。

深呼吸してみる。今、自分が生きている喜びと感謝を身体に刻み付ける。その傍らでたくさんの方が犠牲になったことも忘れない。直接手に掛けたことはなくても、自分の作った毒薬の所為で被害を受けた人も少なくはない筈。そう、彼のように。

もともと組織を抜けるときに一度は諦めた命だ。怖気づくのは止めよう。今更、何を考えたって遅すぎる。事は既に始動してしまっているのだから。

カチャリと扉が開かれる音がした。

「哀くん？」

偶然とは思えないようなタイミングで博士が研究室に入ってきた。ドアの端からひよこり覗いたその顔は心なしか少し青ざめて見える。まさか、聞かれた？

博士と視線が合う。と、博士の顔がふにゃんと垂れ、柔和な表情に戻った。

「帰っておったのか。遅いから心配しておったんじゃ」

博士がハハハと笑う。両手にはコーヒークップが二つ握られていた。湯気は立っていない。

「……ええ、ごめんなさい。話がちょっと長引いて」

カップが手渡された。哀はそれを受け取り、「ありがとう」と言っ  
て少し口に含んだ。コーヒーのいい香りが鼻腔に広がる。けれど。

ぬるいわね。冷めてしまってる。

淹れてから結構な時間が経っている証拠だった。

博士にはこれ以上心配を掛けたくなかった。感謝している。組織  
を抜け、身体が縮み、雨に打たれ、ボロボロのようになったどうしよ  
うもない自分を、何の疑いもなく温かに向かい入れてくれた博士。  
あの瞬間、奇跡を信じた。人の優しさを姉以外から初めて感じた。

もし、あの時博士に出会わなかったら、もしくは違う人のところ  
に拾われていたら、自分はきつと死んでいただろう。行く先には破  
滅しかなかった。罪を償うことも出来ず、裏切り者というレッテル  
を貼り付けられて無様に最期を迎えていた筈だ。

本当にありがたいと思っっている。言葉には出来ないくらい、深く  
深く。

だから、もう心配なんてして欲しくない。自分なんかの為に心を  
痛めて欲しくない。けれど、明日自分が突然姿を消せば博士は間違  
いなく苦しむだろう。人との繋がりや時として大きな枷になる。一  
度結ばれた縁はどうやって消えはしない。

心配かけて、ごめんなさい。どうか苦しまないで。

それから本当に、

「ありがとう」

博士の目が見開かれる。そんな表情を見ていたくなくて、哀の視  
線は、つっと横に流れた。

「……コーヒー」

「え？」

「コーヒーすごく美味しかったから。だから、ありがとう」

「あ、ああ」

哀は頷き、「さてと」と言いながら立ち上がる。

「少し遅いけど夕飯にしましょ。私が作らないと、カロリーの高いデリバリー頼んじゃうんだから」

哀はスタスタと台所に向かう。そして振り向き様に一つ釘を刺した。

「野菜は博士が切つてね。ただし、ちゃんと手を洗ってきて」

博士は「わかつとるよ」と苦笑しながら後に続く。その苦笑に隠れて博士の顔に不安が過ぎったであろう事は、前に行く哀にさえも容易に想像がついたのだった。

作戦決行まで、あと一日と三時間。

空気は夏とは思えぬほどに、冷たかった。

## 二十二章 迷宮の少女（後書き）

この章は番外編くらいの気持ちで書きました。回数も通常より少なくなっています。本当は怖い、でも新一には迷惑をかけたくないという哀ちゃんの葛藤が少しでも伝わっていたら嬉しいです。このお話は物語の進行にそこまで大きく関わっては来ないので読み流して頂いても構いません。ただ、哀ちゃん複雑な心境を書いてみたかったもので。次回は崖から飛び降りたコナンと蘭との心理的交差になる予定です。ご覧になって下さってありがとうございます。

日向ひすい

## 二十三章 きつと僕はは(前書き)

執筆時間が長かった分、内容がとにかく長くなってしまいました。

## 二十三章 きつと僕は

斜面を下りながら、砂埃の奥に、重く暖かい空気を肌に感じた。  
一雨来るかな。

顔を上げ、遠くの空を見据えると、降り注がんばかりの星粒を厚い雲がすっぽり覆っていた。

あの雲はいずれこの場所までやってきて、恵みの水を地にもたらすだろう。

その前に、なんとかなるだろうか。

地面に降り立ち、手に持つ懐中電灯を左右に振る。パツと光が闇を照らす。その光の筋の先に少女はいた。

蘭……

服が少し汚れて、白く艶やかな蘭の頬に紅い掠り傷が目立つ。それでも、蘭は充分に生気を放っていた。運が良かったと思う。この高さから落ちて、この程度の負傷で済むなんて。

偶像崇拜なんてものに興味はなくても、何かに感謝する気持ちがコナンの中に溢れる。

その対象が神なのか、自然なのかは定かではないけれど、安堵と感謝でふいに目の奥が熱くなった。

コナンはゆっくり息を吐き、その場にへたり込んでいる蘭の傍まで寄った。

蘭は、動かない。身じろぎ一つする気配がない。彼女の目は大きく見開かれ、コナンの顔を唯見つめるばかりだった。

声を掛けようとしたとき、頭上から名前を呼ばれた。コナンではなく、本当の名だ。

いきなり斜面を滑り降りたコナンの安否を確認するために「くどー！」と服部平次が声を張ったのだ。あれほど気を付けるといつているのに。

コナンは小さく舌打ちして、崖の上の平次を睨んだ。それから、息をつく。

まあ、状況が状況だし今回は許してやるか……。

それに、今更正体を隠そうとじたばたする気も起きなかった。今まで必死に欺こうとしてきた人は全てではなくとも、もう真実を知っている。

「大丈夫か！」

怒鳴り声がまた降り注ぐ。

「大丈夫だよ。平次兄ちゃん」

兄ちゃん、を強調してコナンも怒鳴り返した。じたばたする気は起きなくとも、和葉が居る手前、大っぴらに平次と対等な語調で話すわけにはいかない。

「大丈夫か？ 怪我はないか」

懐中電灯を持っている手を大きく振り、平気だということを強調する。

「蘭ちゃんは!？」

和葉が叫んだ。

コナンは、視線を素早く横に走らせた。

「蘭、大丈夫か？」

優しく声をかける。見たところ大きな外傷はないようだが、結構な高さの崖から転落したのだから、内臓などが圧迫され内部で出血をしているということも考えられる。

その場合、自分出来る処置はかなり限定されてしまう。  
蘭は答えない。ただ、呆然と瞬きを繰り返すだけだった。

「蘭？ どうした。どっか痛むのか？」

もう一度、問いかけたとき、彼女の視線がはっきりとコナンの顔に向けられた。

蘭は、はっとしたように息を呑み込んだ。

「あ、うん。大丈夫……」

コナンはどこかぼうつとしたような蘭の態度に首を傾げながらも、また視線を頭上に戻した。

「蘭姉ちゃんも無事だよ。和葉姉ちゃん」

良かったあ、と平次の肩に顔を埋める和葉の姿が見て取れた。平次が軽く頷き、携帯電話をポケットから取り出す。

「ほな、誰かに連絡　　うわっ、アカン。此処、圏外や」

「ええっ」

「しゃーないな。和葉、お前は街の方まで行って来い。この道右に曲がってすぐやから、分かるやる。オレはペンション戻って電話する」

「うん。分かった」

「くど……ボウズ！ 聞こえたな。オレらで助け呼んで来る。動いたりせんと、姉ちゃんと大人しく此処で待つとれよ。ええな、絶対動くなよ」

「え？ あっ、おい！ ちょっと待てよ、はっとり」

呼びかけたけれど、平次と和葉から返って来たのは駆け出そうとする足音だけで。

あの二人に振り回されるのはもう慣れたつもりだったけれど、やはり少々面食らう。

コナンはため息をついて、頭を軽く搔いた。

とは言っても、この場合は平次の言葉に素直に従うのが得策だろう。暗闇の中でよく知らない場所を無闇やたらに動き回るのは賢いとは思えない。

二人きりになり、辺りがまたしんと静まり返った。蘭の身体がぶるつと震えた気がした。

情けないな、と思う。ここ最近、幾度も自分のふがいなさを痛感している。

助けにきたつもりが、二人して助けを待っている状態になってしまった。結局蘭の不安要素を除いてやれたのかも分からない。

何も考えず、いや、ただ蘭の近くに行くことだけを考えて唐突に崖下に飛び込んでしまった自分よりも、平次のほうがよっぽど冷静な対処をしたと言える。

何もしてやれない今の状況が、無力な自分の象徴のようで、コナ

ンは奥歯を噛み締めた。

「本当に大丈夫か？」

蘭の隣に腰をおろしながら再度聞いてみた。何か話していないと空気がどんどん重くなる気がしたのだ。

重圧を得た空気はやがて胸を押し潰し、大切な言葉も腹の底に押し込めてしまふ。それが募り大きな塊となり、しこりが出来る。そんなどうしようもない悪循環にひどく嫌気が差していた。

「痛てえとこあんなら我慢しねーで言えよ？」

「うん」

「あつ、えつと、寒くねーか？　なんか気温下がってきたし。寒かったらオレの上着」

「……新一」

蘭はコナンの質問には答えず、静かに名を呼んだ。呼んだきり何も言わない。

コナンは、不振に思っ、蘭の顔を覗き込んだ。彼女の視線が一点に向けられていることに気付く。蘭の視線を辿ると、コナンの膝から血が滲んでいた。痛みなど殆ど感じなかったから、気付かなかった。

他者が傷つくことに人一倍敏感な蘭はこの傷を案じているのだろう。蘭を安心させたくて、コナンは笑った。

「ああ、こんなの全然痛くねえから大丈夫だよ。そんな事より」

「そんな事？」

低い声で蘭が言う。表情は硬かった。

「そんな事ってなによ」

「え？」

やっと重い口を開いたと思ったら、蘭はコナンを鋭く睨みつけた。自分が大丈夫だといえば、蘭は笑ってくれると思っていたコナンは、彼女の荒々しい態度に気付き、困惑した。

蘭はすっと立ち上がり、コナンとの距離を縮める。コナンと同じ高さになるように膝立ちになり、そして、声を張り上げた。

「バカ！」

静かだった暗闇の中を鋭い声が切り裂く。

あまりの迫力にコナンは一步後ずさった。その開いた分だけの感覚を埋めるように、蘭がまた一步コナンに詰め寄る。

「バカ、バカ、バカ！ あんな所から飛び降りるなんて、なに考えてるの。怪我したらどうするのよ。そりゃ、最初に落ちたわたしが悪いんだけど、でも！なんでそんな無茶するの？」

「え、あの、蘭？」

ぼかんと口を開けて、蘭を見る。蘭は構わず続ける。

「大体、新一はいつもそうじゃない。いつもいっつもいっつも！何にも言わないで無茶ばかり！コナン君が 新一がいなく

なる度にわたしがどれだけ心配してたか少しは考えてよ！」

「わ、悪い……」

一気に捲くし立てる蘭に思わず謝ってしまった。蘭は息を乱暴に吐き、肩を大きく上下させると、ふっと力を抜いた。儂げな目でコナンの膝の傷をじっと見つめる。

その表情にコナンの胸は小さく疼き始めた。

「下手したらそんな擦り傷だけじゃすまないんだよ。もしかしたら……もしかしたら死んじゃうかもしれないのに……なのに……ほんと、バカだよ」

語尾に近づくとつれ、蘭の声は震えていった。一瞬、蘭の瞳が揺らいだ気がした。

いつもこうやって、蘭を不安にさせて来たのだろうか。コナンは胸が締め付けられるような思いで、もう一度

「ごめん」

と囁いた。

たしかに、バカだったかも知れない。蘭に言われるまでもなく、愚かだったと思う。

それでも。

たとえバカだと言われても、平次の行った処置の方が聡明だったと分かっているても、また同じことが起きれば、やはり自分は今と全く同じ行動をするだろう。

計算なんてしない。出来ない。蘭を救うことが出来るなら、いくらだって危険に飛び込む。怖いなんて思わない。

仕方ねーだろ。体が勝手に動いちゃうんだから。

コナンの口からふつと笑みがこぼれた。小さな笑いの種はだんだん大きくなり、コナン自身調節できなくて、気がつけば腹を抱えていた。

蘭は、一瞬きょとんとコナンを見つめた。そして、訳がわからないうちのように首を振り、目を細めた。

「なっ、なによ。何で笑うの。わたし本当に心配して」

「ははっ、悪イ。そうじゃなくてさ、やっと……やっと、目が合ったよな」

「え?」

「ずっと、すれ違っただけだったからさ」

疼く笑いを噛み殺して蘭と向き合う。蘭は相変わらずかたくなに口元を引き締めている。

今まで完璧に視線が合わなかったわけではない。けれど、目が合いそうになる度、どちらからともなくすつと逸らしていた。

こんな風に目と目がばちりと、火花を散らすほどに見詰め合ったのは久しぶりなような気がした。

「……そうだね」

蘭の口元が一瞬緩んで言葉が零れ落ちた。俯き、辛そうに眉を寄せる。

「バー口」

んな顔するなよ。

本当はそう続けたかった。けれど、それを言っていないのかどうかも今のコナンには判断がつかなくて、言葉はただの眩きになる。むず痒いような笑いは、もう腹の奥におさまっていた。

「知ってたか？」

「え？」

「オメーだって、ここ、擦りむいてんだぜ」

コナンの手が伸び、蘭の頬をすっと撫でる。少女の小さな肩がびくりと震えた。

昨晚のことが蘇る。蘭の肩を抱き込もうとした手は見事に弾かれ、そして拒絶されたのだ。

正直、また同じことになるのではないかと心配だったけれど、今日は手を振り払われることはなかった。

ほっとした。それを蘭に悟られないようにするため、今まで詰めていた息を吐き出す。

他人のと言えねーだろ、と蘭に笑いかけコナンは彼女の頬から手を離れた。そのまま空を見上げてみる。雨はまだ来そうにない。

「ねえ、新一」

コナンは黙っていた。返事の変わりに蘭に顔を向ける。

「昨日、わたしが言ったこと、覚えてる？」

「ああ」

覚えている。あの部屋のむせ返るような熱気も、聞きたくない

必死に耳を塞いだ蘭の姿も、振り払われた手の痛みも、すべての生々しい感覚として此処にある。

そつだ、覚えている。忘れられるわけがない。

「あの時言ったこと、全部嘘じゃないよ」

またしても息が詰まった。

聞きたくない。

耳の奥にこびりついて取れない響き。あの言葉もやっぱり嘘じゃないのか。嘘じゃないんだろうな。蘭は、あの状況下でそんな稚拙を並べるような人間じゃない。

コナンの想いを察したように、蘭はゆっくり頷いた。

「嘘じゃない。何も聞きたくないって言ったことも、新一を信じられなくなるのが怖いって言ったことも、ぜんぶ。でも」

蘭が微笑む。

「ホントじゃなかった」

「え？」

「意味がわからない？」

「ま、まあな……」

「新一でもわからないことがあるんだね。小さくなって腕落ちたんじゃない？」

「うっせーな」

コナンの拗ねたような様子はまるで本物の小学生みたいで、蘭は思わず吹き出した。コナンもつられて口元を緩める。

「で？ ホントじゃなかったって？」

「それだけじゃなかったって事」

ますます訳がわからない。首を捻るコナンに蘭は優しく微笑み、「つまりね」と続けた。

「わたしが聞きたくないって言った理由は、そんなことじゃなかったの。もちろんわたしの中で新一って存在を否定するような気持ちも浮かんできちゃったのはショックだったよ。だって今までずっと仲の良かった幼馴染なのに、その信用がガラガラって崩れたんだから。出来ればそんな思いもうしたくない。だから、もう聞きたくないなんて酷い事言っちゃったの……そう思ってた」

「違ったのか」

蘭の首が肯定の意味で縦に振られる。

「わたしが新一を拒んだのは、それだけじゃなくて……そんなことだけじゃなくて、もっと単純なこと」

ごくりと唾を飲み下す音がした。それがコナンの中に響く。心臓が早鐘を打つ。

早く先が聞きたい。真実を 真実に一番近い真実を知りたい。

それは証拠をかき集めて犯人を暴き出すときのあの高揚感とは違い、もっと重く、濃密で、そして穏やかな想いだった。

「新一が大切なの」

にっこりと微笑んでそう言った蘭はとても綺麗で。  
呼吸の仕方なんか吹き飛んでしまいうくらいに。

「あの時、わたし、裏切られた気がして、目の前が真っ暗になちや  
つて。今までずっと一緒にいたのに何で話してくれなかったのって  
すぐくシヨックで……。でも、それって裏返せば悲しいのと同じく  
らいに」

新一が大切ってことでしょ？

「バカだよな。服部君に言われるまで、こんな簡単なことに気付け  
なかつたんだもん」

今まで驚いて動けなかったコナンがびくりと耳を動かした。夢で  
はないのかと疑うような蘭の言葉に放心状態だったコナンの意識が  
服部平次という超現実的な単語で、ぐいっと現実に引き戻されたの  
だ。

「服部に？」

「うん。服部君がね、今逃げてるのはわたしの方だって言ってくれ  
たの」

「はっ！？ アイツなに勝手に」

思いつきり額に皺を寄せる。コナンは、イライラと髪を掻いた。  
蘭に「逃げている」などと好き勝手を言ったことも腹が立つが、

何より二人きりで蘭と話したという事実が許せない。

「でも、その通りだったよ」

「え？ なにが？」

「逃げてたんだよ、わたし。新一から逃げた。ほんとバカみたいに……さっき、やっと目が合ったって言ったでしょ」

「ああ」

「新一と目が合うとね、怖い。自分でも気付いてないわたしの心の中見透かされそうで怖い。小さい頃から喧嘩した後とかは新一の目見れなかったなあ」

遠くを見るような目で蘭がくすっと笑った。コナンは黙って続きを待つ。

「でも、もうわかったから。もう自分がどうしたいのかわかったから、逃げない」

二人の視線が絡み合う。コナンは、ふっと口元に弧を描き、優しく蘭を見つめる。

「話すよ」

囁くように言った。

「ぜんぶ話すよ、蘭。もっと早くこうすべきだった。オレがなんでコナンになっちまったのか、なんで蘭に黙ってたのか、全部隠さず

話す。だから、聞いてくれるか？」

蘭が、にっこり笑う。

「うん」

コナンはこみ上げる想いを押さえ込み、「サンキュ」と返す。さて、どこから話せばいいのか。拙い言葉でどうしたら上手く蘭に伝えることができるのか。

最初から、だよな。

一度深呼吸をして、もう一度口を開こうとする。全てを伝える為に。

「あつ、待って」

突然、蘭が口を挟んだ。コナンは、首を捻って蘭を見る。

「ぜんぶ聞く前に、どうしても言いたいことがあるの」

「言いたいこと？」

「うん」

蘭は、コナンの顔をじっとみる。その瞳には優しさが揺れていた。この眼は、工藤新一に向けられるものじゃなくて、今となっては慣れ親しんだ……

「コナン君」

ついこの前まで、この声で呼ばれていたのかと思うと不思議な気

分になる。

姿はどうあれ、工藤新一を意識しているのとしていないのではありません。全然違い、江戸川コナンは全くの別人だということを痛感した。

「どづしたの？」

”コナン”の調子で尋ねる。

「コナン君にはいっぱい助けて貰ったよね。いつでも危ないことに首突っ込んでいちゃって心配してばかりだったけど、でも嬉しかったよ」

蘭はコナンに微笑みかけると、すつと息を吸った。

「ずっと守ってくれてありがとう。コナン君」

コナンは一瞬驚いたように目を見開く。

ざわざわと枝が揺れた。パシツと音がしたかと思うと、直ぐに鼻の頭に水滴を感じた。

全身の力を抜く。自然に笑みを浮かべていた。

「どづいたしまして。蘭姉ちゃん」

夏の夜の風が言葉を運んでいく。

## 二十三章 きつと僕は(後書き)

ご覧下さってありがとうございます！今回は時間がなくて滑り込みで投稿したので、おかしな表現が盛りだくさんなような気がします……。気がつかれましたらどうか言ってやって下さい。日向ひすい

## 二十四章 朝焼けの喧騒（前書き）

お久しぶりです。ちょっととしたスランプで執筆速度が落ちていました。本当にすみません。申し訳ないです……。もしまだ見捨てないでこの物語を読んで下さる方がいらっしゃたら嬉しいです。本当にすみませんでした。

## 二十四章 朝焼けの喧騒

八月十五日 午前三時二分 阿笠邸前

哀は建物を見つめていた。

外壁を白で統一したいかにも発明家の家らしい建造だ。

そして彼女の目はその城壁を飛び越え、中で鼾でもかいているだろう博士を見ていた。

ありがとう。

それしか言えなかった。本当はもっと伝えたかった。貴方と出逢えた喜びを、救済の手を差し伸べてくれた感動を、共に同じ時間を過ごせた感謝を、拙い五文字の中にどれだけ籠められただろう。

朝日が昇る前に家を出たいと思った。もう一度博士の顔を見て平気でいられるほど自分が強くないことを知っていた。

FBIは約束を守るだろうか。博士に組織の魔の手が及ばないように全力をつくしてくれるのだろうか。

自分に関わりあった所為で、もし博士に何かあったら……。

不安と焦燥が駆け巡り、心臓が締め付けられる。今はただFBIを信じるしかない自分が齒がゆくて堪らない。

博士も、そしてあの人も、もう誰一人として失いたくなかった。

組織の狂気から守るためなら何だってする。

もう行かなくちゃ。

博士がベッドを抜け出し、小さな少女の姿がないことに気付く前

に。

哀は一度大きく息を吸い込んで、闇のなかへと足を進めていった。

八月十五日 午前四時零分 ペンション一室

強い雨が窓を打っていた。風が低く唸っていた。厚い雲がペンションを覆っていた。

平次が電波の届く場所に着いた瞬間に電話が鳴った。老人からだった。

「いなくなつた？ それ、ヤバいんとちゃうか」

内容を聞き終えた後の、平次の正直な感想だった。どうしようもなく、胸騒ぎがする。

「新一くんは？ 新一に代わってくれ」

「工藤は……」

老人の震えるような声を聞いて、この人も不安なんだと感じた。その不安を拭い去ってやるには、真実を見極められるものが必要だった。気休めの「大丈夫」という言葉なんかではなくて、確かな支えが欲しいはずだ。

その言葉を与えられるのは、名探偵と呼ばれる工藤新一、ただ一人。

彼に言えば、解決する。根拠のない思い込みでもなんでもなく、老人はそう思っている。本気で工藤新一を信頼している。絶対的に

信じているのだろう。

けれど、アイツは今 戦ってる。守っている。取り戻そうとしている。大切な人を。

そして。きっと、それは今しか出来ない。

「今は……そつとしいてやってくれへんか。せめて、今夜だけでも」

「でも！」

「こつちも立て込んでな。アンタの話やったら今日の午後十時までは何も起きへん筈やろ。それにアイツは絶対あの子を見捨てたりせえへん。約束する。片付いたらすぐ向かわせたるから」

そう言っって強引に通話を断ち切った。もし、これであの少女に何かあったら彼は自分を恨むだろうか。

少女がFBIと共に例の組織に乗り込もうとしてる事はもう調べがついている。少女が動き出したのだとしたら、もう時間がない。だからこそ、平次は工藤に幼馴染との距離を縮めて欲しかった。それも今夜、今すぐにでも。

暫くして、また電話が鳴った。次の電話は自分の幼馴染からだった。

手の中の受話器からは、和葉の叫び声が聞こえていた。

「平次、どないしよう！」

ひどく擦り切れた声だった。電話の向こうからは時折、すすり泣きが聞こえた。

「消防署とか、警察とか……他にも色々行ってみたんやけど全部ア

カンって……なんか」

「土砂崩れ」

ばしりと言い当てる。

「う、うん……」

「オレもペンション戻ってから色んなトコ電話してみたけど、どこも似たような返事やったわ。この雨の中じゃ土砂崩れの恐れがあるから今は動けん、救助のいくんやったら明日の朝、せめて雨がやんでから、てな」

平次は、うんざりした口調でそう言うと、額に皺を集めたまま窓の外を一瞥した。老人との会話以来、胸が鉛をつかえたように重い。ペンションに到着する三十分ほど前に急に天気は崩れた。最初こそは、ぽつりぽつりと軽く地を打つ程度だったが、それは次第に雨脚を強め、付近の住民に注意報が出るまでに至っていた。

「平次、どうする？」

不安な声の和葉に、さらに平次の心は重くなる。

「どうするもこうするも」

一言発するたびに鉛は大きくなっていった。息を吐くのも億劫になる。

「どっしりよつもないやんけ」

和葉が目を見張った様子が平次の脳裏に過ぎる。

「それ……どういう意味？」

「そのまんまや。オレらだけじゃボウズ達引つ張りあげられへん。どうしようもないやろ」

「言われた通り、朝まで待つつもり!？」

「ぎゃんぎゃん騒ぐな。耳が痛うなる」

「蘭ちゃんたち傘も持ってへんのに。それでも朝まで待つのに!」

「そうするしかないやろ」

「でも……でも、平次は心配やないの」

平次は、何も返さなかった。無言の時間が流れる。和葉との沈黙がこんなに身に突き刺さるのは久しぶりだった。久しぶりだっただけに、痛い。

「信じられへん……」

和葉の口から呟くように零れた言葉に、平次はかっとな頭に血が上るのを感じた。

信じられへん？　それはこっちのセリフや。なんで、こっ、次から次へと……。

平次は、息をつき、苛立ちを腹の底に押し込めた。和葉に当たるようなみっともない真似だけはしたくなかった。

結局、この後平次がどんなに言い聞かせても、和葉がこの決断を

快く受け入れることはなかった。説き伏せれば、説き伏せるほどに「いやや」の一点張り。

困り果てた平次が「雨が止んだらすぐに救助に行く」という条件を呑んだことで、一応は電話は切断された。

が、ペンションにずぶ濡れになって帰ってきた和葉は、その後平次を徹底的に無視し続け、翌朝救助に向かうまで一言も言葉を交わそうとはしなかった。

八月十五日 午前八時四十分 崖の下

翌朝、雨も上がり、穏やかに揺れる高い木の下で、コナンと蘭の姿を確認した。真っ先に駆け寄った和葉は暫く二人の様子を確認していたかと思うと、急に振り返り、じとつと平次の顔を睨みつけた。

「なんやねん、その顔」

はあつとため息をつきながら、平次は和葉から目を背ける。和葉の目はさらに厳しいものになった。

「濡れてる」

「は？」

ぶすつとぶてくされたように和葉が言った。

「なんやって？」

「蘭ちゃんとコナン君の服、濡れてるよ」

「まあ、そら、あの雨の中やったしな。雨宿りのつもりで木の下に移動したんやろうけど」

「そうや、木の下にいるくらいじゃ濡れるに決まってる。せやから、やっぱり傘くらい届けに来ればよかったやん」

「まだ言ってるのか」

平次はめんどくさそうに髪をかき、大きくあくびをした。

「やって、蘭ちゃんおちたのアタシの所為やし……それなのに助けに行かへんかったなんて」

「別にお前の所為やないやろ」

「アタシの所為や!」

和葉は唇を噛み、何か堪えるような仕草を見せた。平次はそんな和葉に何と声を掛けて良いのか分からず、ポリポリと頬を掻いた。

「それに……らしくないんやもん」

「あん?」

見ると、和葉はどこか少し寂しそうな表情で平次を見つめていた。

「待ってる、なんて。平次らしくないやん。いつもは無茶ばかりするくせに、今回は大人しくしてろやて? 意味わからへん」

「せやからな、オレは」

「何があつたか知らんけど、ちゃんとした理由があるなら言つて欲しかった。どうしようもない、なんて誤魔化し気イ悪いわ」

あまりにも和葉の目が鋭いから、何にもいえなくなった。

「あんまり見くびらんといて」

和葉はそう言つてスタスタと平次から離れる。平次は、慌てて後を追つた。

「お、おい。ちょー待て。どこいくんや」

「斉藤さんのとこ」

「斉藤さん？」

「地元の人。この辺は地盤が緩いから安全に上がれるとこ探してくれるんやて」

「あ……さよか」

「平次は、二人についててあげて。目え覚ますかもしれへんし」

今日の和葉はえらくテキパキと物を言う。平次はまた頬を搔いた。

「ほんま、かなわんなア」

小さく呟いて、なんとなく辺りを見回してみる。

朝日が照っていた。風もやわらかく頬を撫でていた。小鳥が鳴いていた。

穏やかと形容するには完璧すぎるくらい、辺りは明るい。

その中でひとり、平次だけは憂鬱そうにため息をつく。

平次の目の前には、木の下に寄り添いながらすやすや寝息をたてる女と少年。ふたりの衣服は和葉の言ったとおり確かに湿り気を帯びている。

平次は、暫しふたりを静かに見下ろしていたが、やがてしゃがみこみ、少年の横である物を見つけた。

「工藤の眼鏡……か」

いつも頑なに眼鏡を外すことを拒んでいた彼にしては、珍しいことだった。もちろん、彼が素顔を晒すのを嫌がる理由は知っている。逆を言えば、今眼鏡をしていないということは、もうその理由がなくなったということだ。

レンズ越しでない”工藤新一”の顔は、どこことなく子供じみていて、安心しきった彼の心情が容易に見て取れた。

その表情を見ていた男は何故か無性に腹立たしくなり、そして同時にどうしようもないやるせなさを感じた。平次は乱暴にコナンの耳に眼鏡を引っ掛けた。

耳元で、「平次」という声がして、反射的にそちらに目を向ける。平次の目の前で、ポニーテールがさらりと揺れた。いつの間にか和葉が帰ってきていた。

「そろそろ準備出来るって。地盤の確認も済んだし、もう上がってええって」

「斉藤さんが？」

「うん」

「わかった」

そう答えたはいいものの、なかなか動く気になれない。しばらく、そのまましていると、和葉も平次の隣に座り込んだ。

「なんか……起こすの氣イ引けるね」

確かに、と首が自然に縦に振れる。こうも気持ちよさそうに眠れると、此処が外だということも、昨日あったことも、自分を憂鬱にさせているアノ電話のことも、全て忘れてしまいたいそうになる。このままにしておいたほうが幸せなのではないのかとさえ、思えてくる。

けれど。

「けど、起こさなアカンやる」

「わかってるよ、そんなこと」

和葉は、唇を尖らせ、眠る蘭の肩へと手を伸ばした。

平次は、コナンの曲がった眼鏡を直して、その小さな肩を優しく揺らした。もう一つの厄介な現実へと引き戻すために。

二十五章 悲しき姫の子守歌(1) (前書き)

お待たせして大変申し訳ありませんでした……。

二十五章 悲しき姫の子守歌（1）

（ で、オレの体は縮んじまった）

（生きてるって奴らにバレるのはまずいんだよ）

（オレの周りの人を、誰よりもオメーを、危険に晒したくなかった）

（だから正体を隠してた）

（黙っててごめんな、蘭……）

断片的に声がエコーする。何度も、何度も……。

ふと気がつくと、蘭は見慣れた場所にいた。

自分が夢を見ていることは意識の片隅で分かっていた。壁という壁を本棚が埋め尽くしている、幼い頃からよく足を運んでいたあの家。その場所に、誰でもない高校生の工藤新一が立っていたからだ。夢だと判っていても彼の姿を見るだけで彼女の胸は、とくん、と高鳴る。

背を向けていた新一は振り向き、蘭の姿を確認すると、ぎこちなく微笑んだ。

蘭も微笑み返し、新一の方に一歩近づく。しかし、彼は悲しそうに首を振った。

『会えない』

蘭は驚いて足を止め、聞いた。

「どっしてっ？」

『……でも』

新一は蘭の問いには答えず、

『傍にいる』

今度は自分から蘭の方へと歩み寄る。

『姿は変わっても、ずっと傍にいて、守ってやる』

蘭の目の前に立った新一は、彼女の頭を優しく撫で、そして消えた。

「しん、い、ち……」

「蘭？」

思考がノロノロ動き出す。頭をなでる感触はまだ続いているため、夢からの覚醒したのか、自信が持てない。

「寝言か」

遠くで落ち着いたソプラノ声が聞こえた。自分の頭を撫ぜる手はとても小さく、温かった。

続けて扉が閉まる音がして、頭から温もりは離れていった。

「……姉ちゃんは？」

「シッ！　寝てる。色々あって疲れたんだろ」

「お前かて同じくらい疲れてるやろ。膝も擦りむいてんな……落ちた時か。ほんまに無茶しよって」

「オメーに言われたかねえよ」

「まあ……せやな。痛むか？」

「全然。久しぶりにゆつくり眠れたし、だいぶ調子いいぜ」

「ふん。調子ええ理由はほんまにそれだけか？」

「あん？」

「お前の特效薬は、そこで寝てる姉ちゃんやろ」

「ばっ……バーロ！　んなんじゃねえよ！」

「まあ、ええわ。ほんで大丈夫なんやろな」

「だから平気だって」

「いや、体調やのうて……その、な」

「　ああ、蘭か。それも大丈夫だよ。昨日全部話した。組織の事も、薬の事も、オレが正体を隠してた理由も。多少混乱してたけど分かってくれた……と思う」

蘭はすっかり目を閉じ、横になったまま聞いていた。瞼が重くて

開けられない。麻酔でも打たれたかのように頭に薄く靄がかかって、聞いている言葉が、何を意味するのか、なかなか理解出来ない。

二人の会話は夢のようにも感じられ、今自分が目を覚ましているのかさえ確信が持てないでいた。

けれど、脳の働きが鈍くなっている状態でも、これが夢でも現実でも、蘭は幸せだった。なんだか胸の奥がとても満たされていた。

心地よいベッドのせいじゃない。今までぼつかり開いていた穴がようやく埋まった、そんな充実した感じだった。

「オメーには感謝してるよ、ほんと」

「何やねん、急に」

「蘭が言ってた。服部に言われて初めて気づいたって」

「何に？」

「……ム力つくから教えねー」

「なんやそれ」

「でも、感謝してるのは本当だぜ。それに 色々オレに代わって調べてくれたみてーだしな」

しばし会話が途切れた。一人が深くため息をついた。

「やっぱり気付いてたんか」

「気付かないわけねえだろ……ていうのは、ただの見栄で、本当は確信はなかったんだ。でも、普通に考えておかしいだろ？ いきな

り身体が元に戻って、蘭に正体がバレた。オメーはこそそこそ何か嗅ぎ回ってるし、今日帰って見たら携帯には博士からの着信が詰まってる……これを全部踏まえると、自然とある結論に行き着くってわけさ。 服部」

「……なんや」

「灰原は何処だ」

部屋に緊張が走った。

哀ちゃん……？

昨夜、コナンの口から語られた夢のような話に彼女の名前は出てこなかった。しかし、記憶を辿ってみるとコナン同様に彼女もまた、子供らしかぬ行動を見せていたことを思い出す。察するに、新一を幼児化させた組織に関係あるに違いない。

ということは、新一はまだわたしに全部話してはいないんだ……。その事実を蘭を、寂しさともつかない気持ちにさせ、同時にどうしようもない不安を感じさせた。

平次がまた息を吐くのが分かった。

「お前って、何ちゅーか、ほんま忙しい奴やな。せっかく……」

「しゃーねえよ。オレは探偵だ」

コナンが、そして新一が探偵を名乗るとき、口調はいつも自信と誇りに満ちていた。

しかし、今は違う。苦々しく、自分に言い聞かせるような、喉に引っかかる声だった。

「分かつとる……けど、話す前に」

「ん？」

「話す前に約束せえ。絶対……絶対、この子を置いていかへんて」

二つの視線が自分に向けられる。蘭はギョツと目を閉じて、必死に寝たフリを続けた。二人の会話をもう少し聞いていたかった。

「約束するよ」

少し間を置いてコナンが答えた。

「もう蘭を泣かせたりしない」

「……アホか。そこまでは言うてへん。守れない約束なんかすんな」

「哀ちゃん？」

「守れない約束？」

「この子を置いていかない？」

二人はさっきから何を言っているのだろう。分からない。ワカラナイ。

「オメーの知ってること、全部教えてくれ」

コナンが小声で言った。平次が頷く気配がした。

「ええやる。まず、今回お前の身体が一時的に元に戻ったんは、あの子が風邪薬を装って作った未完成の解毒剤が原因や。ここまでは分かってたな？」

「ああ」

「お前は彼女の狙い通り風邪引いて、薬飲んで、ほんで姉ちゃんの前で正体を晒したんや」

博士に貰った風邪薬。アレが原因だったなんて……。

「蘭にオレの正体をバラすのがアイツの狙いだったのか？」

「いや、ちゃうな。彼女の狙いはお前の注意を自分から逸らすこと  
「や」

「オレの注意？」

「せや。姉ちゃんに正体がバレてから今日まで、お前いっぱい  
ばいやつたる。他の事なんて考える余裕ないなかつた筈や……まあ、  
お前の脳みそはオレらが想像してたよりもずっと器用やった。でも、  
普段のお前ならあの子の異変にもっと早う気付いてたんとちゃうか  
?」

蘭はそつと薄目を開けて様子を盗み見をした。目の前には小さな  
背中。その先で長身の青年がこちらに向かい合っている。危く平次  
と目が合いそうになり、慌てて目を閉じた。

「ここからはオレの推理や。正解かは分からん」

「自信は？」

「はっきり言って、ある」

「聞くよ」

平次は一瞬躊躇い、ため息をついた。

「あの子はな、工藤、お前に計画を邪魔されとうなかつたらしい」

「計画？」

「ああ。その計画のために彼女はFBIと組んだんや」

平次は吐いた息をまた吸い込み、

「あの子、多分例の組織に潜入しようとしてるで」

組織に潜入。

平次がさらっと言った穏やかではない言葉に蘭は少なからず衝撃を受けた。恐怖の波が押し寄せてくる。頭がくらくらした。

けれど、彼女が組織について知っているのは、新一の体を縮ませた凶悪集団だということ、だた一つであり、この少ない情報と彼女の想像力では、組織の本当の恐ろしさなるものを理解するには無理があった。

この場でそれを知っているのは身をもって彼らの狂気に触れたコナンだけなのだが、にも関わらず彼はというと、小さく息をついただけだった。

「あんまり驚かへんな」

少々呆れたように平次が言った。

「そんなこつたろうと思ってたよ。オレに迷惑をかけないで自分が

犠牲になる。アイツの考えそうなことだ」

「ほんまに器用やな。こっちがびっくりするわ」

皮肉っぽく言う。

「……でな、工藤。オレ、お前に謝らんとあかんことがあんねん」

「謝る？」

「自分が組織に行くなんて言うたらお前は絶対ついて来る。そんなこと絶対にさせたくない。あの子の目的はお前を混乱させて自分から注意を反らすこと、やる？」

「ああ」

「オレはお前を助けとつて、此処に連れてきたんや。けど、オレが実際助けたんはあの子やったらしい。注意を”そらす”だけの計画にオレが余計な手助けをしてしもた」

「あいつの傍からオレを遠ざけたってことか」

「せや。あの子は工藤がおらんのを知って、今しかないって思ったんやろな、計画実行を早めたらしい」

「いつだ？」

「今日の午後十時。あの子がぼそつと漏らしたのをジイさんが聞いた。きつとあの子はこの時間にFBIと落ち合うんやと思っつ」



二十五章 悲しき姫の子守歌(1) (後書き)

今回は長かったので、2つにわけてしまいました。ノロマ更新の常習犯である日向ですが、次話は遅くとも9月10日までには投稿したいと思います!……がんばりますのでどうか見捨てずにお付き合下さい。

ところで。原作62巻を読んで「憎悪の村」がこの小説に何となく似ていてびっくりしてしまいました(自惚れ……?)。このお話しも博士のうっかりにしていますれば良かったとプチ後悔。そうしたらもう完結しているのに……!さすが青山先生です(笑)

二十六章 悲しき姫の子守歌(2) (前書き)

遅くなって大変申し訳ございませんでした……。

## 二十六章 悲しき姫の子守歌(2)

平次の発言の後、長い沈黙が流れた。

重苦しい空気を破ったのはコナンで、一言、覚悟を決めたかのよう  
に「分かった」と。

その瞬間、今までどこか鈍っていた蘭の頭脳は霧をふき飛ばし、  
平次の溜息の意味を、コナンの言葉の意味を、先ほど交わされた約  
束の意味を、悟ってしまった。また、自分が置いて行かれるという  
ことを。

約束せえ。この子を置いていかへんて。

この子を置いて、”逝かへん”て。

ぱさりと音がして机に紙切れが乗せられる。「東京までの新幹  
線の切符や。これやったら間に合うやろ」という平次の声が、悪魔  
の囁きに聞こえた。

蘭は、声にならない悲鳴を上げた。

新一が行っちゃおう………！

「切符なんていつの間に？ ……サンキュ、服部」

なんで、どうして？

やっと、信じられたのに。やっと、わかったのに。

「まあ、これはお詫びちゅーか、オレの奢りやから」

いや、やめて。行かないで……

「え、そんなのいらねーよ」

待ってよ……

「なに気遣うてんのか、アホらしい。素直に受け取れ。駅まではオレが送ってたるから。ほな、いこか」

「  
ああ」

蘭は、目を開けた。

コナンが大きく目を見開き、蘭を見つめていた。その後ろで平次も息を吞んでいた。

はっとする。

掌に細い腕の感触。

咄嗟に掴んだ切れそうな糸。

蘭は、自分がコナンを引き留めるかのように、無意識に彼の腕を握ったことに気づく。

てっきり蘭は眠っていると信じ込んでいたコナンは、混乱の表情を見せた。そして、今までの会話をすべて聞かれたことを知ると、ばつの悪そうな顔をした。

彼は、蘭に何も告げずに行くつもりだったのだろう。

コナンの目が、何かを訴えてくる。

何も、言えない。

眼球の奥から、温かいものが押し寄せてきた。止める間もなく滴が溢れた。

泣きたくなんてないのに。  
必死に涙を止めようとす。しかし、噛みしめた唇の間から嗚咽  
さえ漏れてしまう。

行かないで。

どうしても言葉には出来ない。哀が危険な状況にいて、彼はそれを助けに行けなくてはならない。自分が、行かないでなどと言ったら、彼を困らせるだけだ。優しすぎる彼女には痛いほどそれが解っていた。

だからこそ、捌け口のない言葉は涙となつてとどめなく流れ、蘭自身を苛む。

なんて勝手。なんて傲慢。

でも、行つて欲しくない。やっと”会えた”というのに。

コナンと蘭の視線が絡み合う。お互いに本心を相手に伝えられな  
いもどかしさをぶつけ合うかのように、いつまでも、ただ見つめあ  
う。

「大丈夫だから」

穏やかに。

「大丈夫。心配すんな」

その声は、するすると蘭の一番深い部位に到達して、

「ここでお別れってわけじゃねえんだから」

優しく彼女を溶かしていく。

「すぐに会えるんだから」

「新……………」

「一足先に帰って、今度はオレがオメーを待つてる。だから」

コナンが蘭の手に自分の手を添えた。ぎゅっと一度強く握って手を放す。コナンの右腕が躊躇いがちに上がってきて、腕時計の上蓋となっている時計盤を外し、ポインターが蘭に向けられた。

「だから、もう少しだけ夢の中にいてくれ」

その言葉を聞いたと思ったたら、パシュツという音がして。彼女の意識は再度眠りの中へと落ちて行った。

「ええんか？ 麻酔撃ち込んだりして」

ドアに寄りかかりながら、平次が言った。見てはいけないものを見てしまった子供みたいに、気まずそうに目が泳いでいた。

蘭に優しく布団を掛けて、コナンは苦笑する。

「物騒な言い方すんなよな」

コナンは左手で髪をかき上げた。実際、蘭に対する罪悪感が胸に込み上げていたのだ。

あの眼に。

突然に腕を引かれ、自分を見上げてきたあの懇願の眼に抉られる。

行かないで。

蘭の中で混沌と渦巻き、けれど決して言葉にはされなかった想いがはつきりと聞こえた。

その想いに揺さぶられる。熱くて痛いほどの激しい感情が瞬時に体をめぐった。彼女のことかどうしようもなく愛しくて、離れたくなかった。

本能に身を任せ、彼女をこの手に抱けたなら。

けれど、コナンのどこか醒めた部分が、今はそれは出来ない、と警告していた。

そつと蘭の頬を撫でてみる。そこには確かに生きている人間のぬくみがあった。

コナンはもう一度だけ優しく触れ、名残惜しそうに手を離れた。

この先、どうなるか判らない。けれど、蘭にだけはもう嘘は吐きたくない。すぐに逢える。その言葉を嘘にしてはいけない。逢えなくてはいけないのだ。

再会を、必ず。

「 行こうぜ」

もうすぐ、列車が出る。

## 二十七章 願わくば、貴方と（前書き）

作者が受験のため不定期更新が続きました。もう少し続くかも知れませんが、不甲斐ない作者で申し訳ございません。それでも見捨てないでいてくれた方々、本当にありがとうございます。この小説を書き始めたのがもう二年近く前。本当に情けないほどのノロノロ更新で来ましたが、この小説も次回最終話、後エピソードを何話か書いて終わりとなります。次回の更新はできるだけ早くと思っておりますが、いつになるかわかりません……。けれど、決して投げ出したりはしないので、待っていて下さる方がいらっしやいましたら、とても幸せに思います。感謝とお詫びをこめて

日向ひすい

## 二十七章 願わくば、貴方と

上手くいつてる。

哀は自分に言い聞かせた。

大丈夫。何も問題ない。アレは……ただの幻聴よ。

ぼーん、ぼーん。

けれど、そんな哀の思いを嘲笑うかのように弾むボールの音は止まらない。自分すらまともに欺くことが出来ないならば、この目で確認するしかないのだ。

ため息をつきながら後ろを振り返る。

そこにいたのは、憎らしいほど不敵な笑みを浮かべ、サッカーボールを蹴り続ける少年の姿だった。

「遅い……」

約束の時間はとっくに過ぎていたのだ。その時点で気付くべきだった。この計画は完璧で、上手くいき過ぎていたのだと。

それでもまだ待っていたのは自分が惨めになりたくなかったから。

「ジョディ先生なら来ねーよ」

聞こえる筈のない耳慣れた声に哀の全身の動きが一瞬止まった。

そんな馬鹿なという思いと、やっぱりという諦めがせめぎ合う。

声は続く。

「計画のことが上にバレて、ストップがかかったらしいぜ。危険すぎるってな」

ため息をついて振り向くと、そこにはやはり見慣れた顔。今一番見たくなかった、顔。

「どうして……」

「本気でオレに隠し事が出来ると思ってんのかよ」

声の主は、少し苛立っているようだった。

「なんで……なんでここにいるのよ!」

「オレは探偵だぜ? オメーの考えることくらい簡単に想像つくんだよ」

そう言ってから、少し笑う。

「なんてな。オメーの計算通り、さすがのオレも今回はいつぱいっばいだったぜ。オレのいない間のオメーの行動を調べてくれたのも、帰りの電車手配してくれたのも全部服部だ」

汗が出る。冷汗だ。敗北感、喪失感、虚脱感……身体の中をぐるぐる廻る。現実を見ていたくなって目を逸らした。

あの人は何をしているの?

約束の時間はもうとっくに過ぎているのに……。

「待ってても無駄だぜ。FBIはオメーが提供した情報のおかげで緊急会議。シヨディ先生は事情説明の為に呼ばれてんだ。約束守れ

なくてごめんなさい、ってオメーへの伝言」

少年　コナンは喋ってる間決してこちらを向かなかつた。空中のサッカーボールを器用に操っている。

哀は動けないでいた。やがてボールの音がやみ、コナンが肩をすくめたのが分かった。ざりっ……と耳障りな音が立ち、コナンとの距離が縮まる。

「だから、ほら」

手を掴まれる。

その瞬間、何故だか目の奥が、かあっと熱くなった。

「……やつ、は、離して！」

らしくなくない金切り声をあげて、コナンの手を振り払う。予想していたことなのか、相手に驚くような様子はない。

哀は怒りとも焦りとも似つかない激しい感情の波に襲われていた。目の前のこの余裕しやくしやくな男を殴ってやりたい。けれど、真剣な表情が恐い。軀が、がくがくと震えた。

気がつけば、言葉が流れ出ていた。

「もう……もう、うんざりなのよ！　こんな風にいつまでもあなたに庇護されて、労わられて。いい加減にしてよ。何様のつもりなの。鬱陶しいのよ、あなたのその正義感がどうしようもないくらい。あの約束のこと気にしてるなら充分果たしてもらったわ。どうも、ありがと。これからは、自分の身くらい自分でまもれる。だからもう私に構わないで。放っておいてよ！」

「……灰原」

睨みつける。

「よく喋るな」

……っ！

頭に、血が上る。血液がどくとどくと流れる音が聞こえた。軀が、  
熱い。

ひどく憎らしかった。どうしようもなく腹立たしかった。  
なのに。

「帰ろうぜ」

もう一度、手が伸びてくる。

「……聞こえなかったの！？ 迷惑だって」

「第一に」

口調が強くなる。相手の苛立ちも増したようだった。

「え？」

「第一にさっきからオメーはオレの目を見ない」

「な、なに」

「第二に、いつもの灰原からは考えられねーくらいよく喋るよな」

「ちょっと！ 私は真剣に……っ」

「分かってるよ。だからオレも真剣に推理してんじゃねえか。人っていうのはな、何かを隠そうとしたり誤魔化そうとする時、無意識に目が泳いじまったり、変に饒舌になったりするもんなんだ。けど、そんなものはおいといてもな、灰原」

コナンの顔が真剣になった。もう逃げられない。

「オメー演技下手くそなんだよ。ああ、泣き真似はなかなかイケてたっけ。でも他はひでえぜ。寝たフリも子供のフリも。特に今の何か最悪だ」

「演技なんかじゃ……」

「じゃあ、言ってみるよ」

「……っ」

「迷惑だって、鬱陶しいって、放っておけて、オレの目を見て言ってみるよ、灰原。そしたら、オレは何も言わねえよ」

哀が首をあげた。口をゆっくり開く。けれど、そこから何か言葉が発せられることはなかった。なにか言えばすべてを吐き出してしまいたいような気がして、哀は唇を噛みしめたまま、コナンを睨みつけるように見つめる。

言えるわけ、ない……。

迷惑なんて思っていない。鬱陶しかったらこんな大切に思わない。だって本当は怖かった。「独り」で奴らに向き合う勇氣なんて私にはない。自身が強くありたいなんて私のエゴ。

願わくば、貴方と強きたいのに……。

そう思った瞬間、身体全部がふるえだした。足の指先から、腰、肩、首、頭、哀のすべてに震えがくる。のどが詰まった。立ってられない。ふるえに身を委ね、両膝をつくしか術がなかった。そして、ぬくみを感じた。

「灰原」

気づいたら、コナンの腕の中において。

ああ、この人は生きているんだと感じた。そして、私も。

「灰原、大丈夫だから。オメーを独りにしたりしねーから」

「どうして……」

「え？」

「どうしていつも私の欲しい言葉をくれるの？　大丈夫だってどうして言えるの？　脆くなっちゃうじゃない。貴方がそんなこと言うから、何時まで経っても私はこの現状に甘んじて、弱いままじゃない。貴方は巻き込まれただけ、被害者なのよ。私の、私の所為なのに……なのに、私はこの世界にいたいと思ってしまうの。あなたの傍で笑っていたって……こんなの赦されるわけ、ない。だから、私は、私の手で奴らを潰さなくちゃいけないのに……どうして、邪魔するのよ……」

限界だった。涙が頬を伝って口許へと落ちる。涙の味を思い出させてくれたのもこの人だった。どうして一緒にいるとこんなに弱くなってしまうのだろうか。

震える哀の指は、それでもコナンの細い腕だけは感じた。

「それは、弱さじゃねえよ」

だんだんと痺れてきた脳を中心に、じんと染みるような優しい声。「弱さじゃねえ……」とかみしめるようにもう一度言われれば、今度こそ自分を抑えられなくなって。涙はとどまる気配がない。

「支えあうことは弱さなのか。あんなでかい組織相手に個人の力が通用すると本気で思ってたのかよ」

厳しい言葉とは裏腹に、コナンの手はこの上なく優しくかった。

「オメーだけじゃねえ。オレだつてもう引き返せねえとこまで来んだよ。奴らはオレの手で……いや、オレらの手でぜってえぶつ潰す。なのに、肝心の灰原が今更じたばたしてんじゃねーよ。もう本部の場所まで分かったんだろ？ だつたら、機会は絶対来る。だから、それまで安心してオレの横で笑ってろ」

眼を閉じてみる。

「灰原が、必要なんだ」

はいばらが、ひつようなんだ。

自分の口の中で言葉を転がしてみる。まるで違う言語のように聞こえたそれは、妙に甘く、呪文のように哀の心を落ち着かせた。

深呼吸を繰り返す。肺に空気が入ってきて、ふるえはとまった。同時に哀は眠気に襲われた。このままコナンの腕の中で眠りにつけたら、きつとそれが一番心地いいのに。そう思った。思った瞬間、身体を起こし、優しく抱擁する腕からすると逃れていた。

ひどくみじめな姿を晒してしまった拳句、ひどく恥ずかしい格好でいたことに気が付き、顔がほてった。

「落ち着いたか？」

コナンが顔をのぞきこむ。気恥ずかしくて直視出来なかった。

「忘れて！」

あまりの恥ずかしさから声が大きくなり、怒鳴りつけるようになってしまう。

「お願いだから、何も言わないで今のこと全部忘れて！ いいわね？」

「は、はあ……」

突然いつもの調子を取り戻した哀に、たじたじになりながらも、コナンは苦笑を洩らす。

これだけは言っておかないといけないと思った。

「ごめんなさい」

途端に、コナンの眉が不自然にあがる。

「また、それかよ。灰原に謝られると調子狂うんだよな」

「違うの。勝手なことして、本当に今回は軽率だったと思うわ。意地だけであんなバカなことしようとしてたんだもの」

「まあな。オレが止めなきゃ、オメー、ヤバかったかもな」

茶化すようにいうコナンに真剣に向き直る。

「私、死のうとしてたのかもしれない」

「は!?!」

「でも、今は生きてたいって思うわ。本当よ。生きてなければ、温かくないから」

「……相変わらず、意味不明な女だな。オメーは」

「ありがとう」

不敵に笑う哀は、「生」の輝きに満ちていて。

コナンは戸惑いながらも安心したように笑った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3163c/>

---

きっと僕らは光と闇を抱えて、

2010年10月10日22時09分発行